

N・T・ライト とは誰か

中澤啓介

英国の聖書学者N・T・ライトが注目されている。その福音理解の新鮮な視点が高く評価される半面、伝統的な義認論・贖罪論を脅かすとの批判も根強い。ライトはどんな人物で、何を主張しているのか。また、彼に対する賛否の議論はどのようなものなのか。欧米の福音主義神学の動向などに詳しい中澤啓介氏に解説していただく。

ニコラス・トーマス・ライト(通称N・T・ライト、あるいはトム・ライト、以下ライトと略す)はアングリカン(イギリス国教会、以下「国教会」と略す)の元主教で、正統的・福音的信仰に立ちながらも、新鮮な聖書解釈を展開し、従来のキリスト教信仰を一味違う切り口で解き明かし、今世界で話題になっている新約学者です。教会の最先端で牧会者として活躍しつつ、アカデミズムの世界においても古代ユダヤ教や新約聖書の分野で画期的な研究成果を次々と発表しています。

しかも、抜群のユーモアのセンス、誰にでも親しみを感ぜさせるオープンな態度、時代思潮に鋭く切り込む大胆な発想、幅広い教養がにじみ出ている表現力などの優れたコミュニケーション能力を通じて、一般社会にも強力なインパクトを与え続けています。まさに「今が旬の人」、という感があります。

日本でもこの5月、『クリスチャンであるとは』という書物があめんどろ社から翻訳・出版されました。売れ行きも順調のようです。ライトファンの方々は、2015年を「ライト元年」にしようと張り切っています。引き続きライトの数冊の書物が翻訳、出版される予定と聞いています。

この書物が出版されるにあたり、出版元からの依頼で次

「創造・新創造」に基づく新しい福音理解を提示

のような文章を書きました。「N・T・ライトは3つの顔をもっている。まず1世紀の歴史研究家で、歴史・宗教・聖書学の学界に新しい驚くべき成果を発表し続けている。2つ目は英国国教会の主教で、世界のキリスト教界に『創造・新創造』に基づく新しい福音理解を流布し続けている。3つ目はポストモダンの時代思潮に鋭敏な著述家で、一般社会にキリスト教信仰の絶対性と真理性を挑発し続けている。今や世界の思想界は、ライトをバイパスして『世界・人生・信仰』を論じることができない状況になってきている。」

なぜ、今ライトか

今なぜ、ライトなのでしょう。理由は明白です。メイソンラインあるいは福音派を問わず、現在世界で最も注目されている神学者は、イギリスの聖書学者ライトを除いてほかにはいないからです。

カトリックの世界では、第二バチカン公会議時代に活躍したハンス・キュンク、カール・ラーナー、ハンス・ウルス・フォン・バルタザールのような偉大な神学者たちは、もはや過去のの人となりしました。前ローマ教皇ベネディクト16世(本名、ヨーゼフ・アロイス・ラツィンガー、在位期間は05年4月19日〜13年2月28日)も、実は極めて興味

深い保守的神学者でしたが、生前退位後名誉教皇となつてからは大きな影響を与えるほどにはなっていません。現在のカトリック教会は、第二バチカン公会議(1962年〜65年)の路線を継承・実践していく中で、長年のカトリックの負の遺産を精算することに主力が注がれ、神学的に注目されるようなことはほとんど聞かえてきません。

ドイツ語圏のプロテスタント・メイソンラインにおいては、バルトやフルトマン以降、ウオルフハルト・パネンベルク(2014年没)やユルゲン・モルトマン(現在90歳)が大きな影響を与えてきました。彼らは既に過去の人になりつつあります。彼ら以降は、世界的に話題になるような神学者は出ていません。

英語圏においては、注目されている聖書学者・神学者がいないわけではありません。メイソンラインの教会の神学界をも含め、特別際立って話題に上っている神学者は出ていないように思います。むしろ、イギリスを中心にして、リチャード・ドーキンスたちのような無神論者がキリスト教界に果敢に論争を挑み続けているのが目立ちます。彼らは、「06年を無神論元年にしよう」とキャンペーンをほり、キリスト教信仰にまつわるさまざまな問題について発言しています。しかし、こういうネガティブな運動は一時的に盛り上がりつつも、「だから何なの」という根本的な問題が浮上し、線香花火的な話題提供で終わってしまうでしょう。

反対に、若い福音主義者の間では、「ポスト福音派」の神学とあり方を巡って活発な討論が展開され、国教会の中に福音的信仰を復権させる動きが見られます。(大野キリスト教会宣教師)

N・T・ライト とは誰か

2 中澤啓介

興味深いのは、アメリカの福音派の教会、大学、神学校の動きです。特定の聖書学者、神学者たちも積極的に発信しています。(バイオロゴスのグループをはじめ、ジョン・ハワード・ヨータ、スコット・マックナイト、グレゴリー・ポイドなどがいます)。福音派全体が活気にあふれていることは間違いないと思います。アメリカの福音主義神学会のメンバーたちの多くも、やっとな聖書の無誤性の縛りから解放され(むろん、その火種は、一部においてくすぶりが続いています)、ポスト・モダンの社会に積極的に発信し続けています。

特に、リーダー的な存在のある神学者が、今やプロテストанトの世界では、リベラル以外の人々は皆福音派です」とまで断言していました。特に、聖書の無誤性(Inerrancy と Infallibility) の理解をより聖書的な言葉(例えば、「信頼しうる (trustworthy とか reliability)」)表現し直し、この教理を否定するのではなく、よの高く聖書信仰を標榜しつつ、あらゆる解釈の可能性を大切にしながら、一致協力して聖書学と神学を推し進めていくと表明しました。キリスト教界全体をリードしていくという気概と自信を肌で感じさせる一瞬でした。

では、日本のキリスト教界の状況はどうでしょうか。残念ながら、カトリック、メソジスト及び福音派を問わず、キリスト教界から日本社会全体に向かってキリスト教信仰(聖書の福音)を発信していきこうという気持はほとんど

ポスト・モダン社会に「聖書的な福音」を発信

どない、と言わねばなりません。佐藤優も橋爪大三郎といった売れっ子の著述家たちが、キリスト教に関わりのありそうな本を書いて、20万部あるいは30万部と売れる書物を出版しています。こういう状況を見るなら、日本人がキリスト教に関心をもっていないわけではないことが分かります。彼らの書物が何がしかの影響を与えることはあるにしても、10年もすれば何の話題にも登らないでしょう。

では、日本の福音派はどのような状況にあるのでしょうか。依然として欧米の教会の動向を後追ひするだけで、自らの足で立つて活動を展開していく姿は見られません。残念ながら、翻訳文化の枠内に留まり、そこから抜け出る兆しは見えてきません。優秀な学者たちもそれなりに育ってきているのですが、教派や教派神学校の枠にきっちりおさまってしまい、一般社会にインパクトを与えるほどには至っていません。

ただし、30代から40代の若い牧師たちの中には、こういう状況を憂い、インターネットなどを通じて、自分たちの考えていること(ボイス)を積極的に発信してこうとうという動きも出てきています。新しい世代の台頭に期待し、20年後30年後のキリスト教界を彼らに託す以外に希望はない、というのが実情です。

もし、キリスト者と教会がこの世において生き生きと活動しきれていないのであれば(例えば、閉塞感に覆われている、窒息死寸前である、若者たちに魅力の無いものとな

っている、ポスト・モダンの社会に届いていない、高齢化・過疎化現象に対応できていない、エキエニズムに無関心になっている、社会から孤立あるいは遊離している)、その神学に致命的な欠陥があることに気づかねばなりません。聖書の福音理解に真正面から取り組み直し、現代社会に「妥当性 (relevance)」をもつ教会へと体質改善を図っていかねばなりません。

以上のような世界の神学的状況を踏まえるとき、現代のポスト・モダン社会に「聖書的な福音」のメッセージを発信し続けているライトに注目するのは当然でしょう。彼はこの20年の間、現代社会の思潮を鋭敏に捉え、エキエニズム(教会一致)運動を射程に入れたつ、大胆かつ有効に神学的な活動を展開しています。日本では、ライトの書物が日本語に訳されなかった事情もあり、今日までライトの神学が話題にされることはほとんどありませんでした。日本福音主義神学会においてさえ、一部に「ライトは危ない!」(この意味は私には全く分かりませんが)という声があるからでしょうか、本格的な議論がなされていません。ごく一部のライト信奉者たちが、読書会やセミナーを開いて学び続けてきたという、まことに寂しい状態でした。

日本の福音派の教会、神学校、各種伝道団体、牧師たち、それに教会のリーダーたちは、こういうキリスト教界の状況から一日も早く脱出しなければなりません。神がこの世界を創造された目的に目覚め、聖書の伝える「福音のメッセージ」をしつかり日本社会に浸透させていくために、大胆な体質改善が求められています。(大野キリスト教会宣教師)

N・T・ライト とは誰か

3 中澤啓介

第1部 ライトの経歴と著作

では、N・T・ライトとはどのような人物なのでしょう。ある人の神学を知るには、その人自身の歩みを知らねばなりません。神学を、その人の生活から切り離して考えることはできないからです。神学とは、自分の生活の現場で構築されるものです。

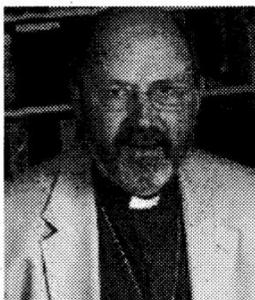
その際、その人を突き動かしている「根本的なもの」が何かを、見極めねばなりません。もしそれが理解できるなら、やがてその人の神学の全貌が見えてくるはず。ライトの発言は多岐にわたっていますので、すべてを細部に至るまで理解することは大変ですが、彼が主張したい真意を理解することはさほど難しいことではありません。

1. 教職者になるまで (75年頃まで)

ライトは、1948年12月1日、イギリスの北部ノーサンバランド州ノーペスに生まれました。彼は、幼い頃から、信仰的には中庸な立場を取る国教会の中で育てられました。回心は4歳か5歳の頃で、一人椅子に腰掛けていたとき神の愛に圧倒され、イエスが自分のために死んでくださったことを受け入れました。また7歳か8歳の頃、キリスト教のフルタイムの働き人になるようにとの「神からの召命」を受けました。

彼は、11歳の時から毎日聖書を読む習慣を身につけ、詩篇と旧約聖書と新約聖書を毎日少しずつ読んでいたようです。あるとき、どうしてそん

「聖書の権威に服して歩む者」に感動し、学問の道へ



なふうに読んでいるのかと聞かれますが、それは若い時からしていることで、特にやめる理由はないからです、と答えています。

自分は、国教会の伝承を大切にしているが、いつでもその伝承よりの聖書を大切にしている、と公言してはばかりませぬ。自分たちの伝承をも含め、伝承に従うか神の言葉に従うかについては一度も迷ったことはない、私にとっては聖書以上に大切なものは何もないと言いつけるところに、ライト神学の最大の特徴があります。

最初ライトは、自分の召命は牧会者になることだと考えていました。そのためには、古典語の学びが大切だと考え、セルベルフ学校、ヨークシャの学校に通い、古典語を専攻します。その後68年から71年にかけて、オックスフォード大学のエクセターカレッジで古典文献学(古典文学、哲学、歴史などを含む)を学びます。そのような学びを続けている過程で、自分は学問的な分野で神のために働くことが使命ではないか、と考えるようになります。

その頃、大学のクリスチャンサークルに参加し、そのグループの委員長として活躍します。71年に彼は、特待生で

オックスフォード大学を卒業しています(B.A.)。

当時のライトは、ジョン・ウエンハム(プリストルのテイネルホール副学長)が講演の中で語った、「神学や聖書学の学問に進むのであれば、聖書の権威に服して歩む者でなければならない」という言葉に深く感動し、学問の道に進む決心をします。

学生時代から成績は抜群で、72年には3人の学生とともに、早くも『福音書における神の恵み』という書物を出版します。彼はエクセターカレッジに残り、73年に神学におけるB.A.の学位を再び特待生で取得します。その頃、カルヴィニズムの影響を強く受けています。その後、オックスフォードのウイクリフホールで国教会の教職者になるための学びをし、75年に修士(M.A.)の学位を、その後博士(D.D.)の学位をオックスフォードから受けます。そして、75年には執事に、76年には司祭に任職されます。77年、E・P・サンダースは『パウロとパレスチナユダヤ教』という書物を出版し、パウロに関する新しい見方を提唱しました。スコットランドの新約学者ジェームス・ダンも彼の見方に大筋賛同したため、その後の新約学会におけるパウロ理解に大きな変化が生じました。

ライトもまた歴史家として、その路線上に立ってパウロ研究を進めます。パウロを窓口にしてキリスト教信仰の起源を解明していこう、これがライトの神学研究の基本的なスタンスとなりました。ライトは様々な分野に自分の意見を発信し続けていますが、この姿勢はいささかもぶれることなく、今日まで貫いています。(大野キリスト教会宣教師)

N・T・ライト とは誰か

4 中澤啓介

2. 地道な研究時代

(75年～93年頃)

ライトは、1975年にオックスフォード大学メルトンカレッジの研究員とチャブレンに就任します。その後78年から81年、ケンブリッジ大学ダウニングカレッジで研究員とチャブレンを勤めます。81年には『メシヤと神の民：ローマ人への手紙に関するパウロ神学の研究』という論文をメルトンカレッジに提出し、D.Phil.の学位を取得します。

81～86年、モントリオールのマクギール大学の新約学の准教授になります。86～93年にはウェスターカレッジで研究員とチャブレン、さらにオックスフォード大学の新約聖書の講義者になります。研究分野もパウロ研究からイエス研究へと広げ、「史的イエス」に懐疑的な人々との論争にも積極的に関わります。その傍ら、国教会の福音派の学者たちを育てるために建てられた研究センター「ラティマーハウス」の評議会の秘書となり、活動の場を広げていきます。

ライトは、若い時から著述の賜物を自覚し、興味深い書物を出版しています。78年にはオックスフォードの学生グループに語った説教に基づき、『小さな信仰、偉大な神』を著しました。その5章には、「主は聖なる方」というイザヤ書6章からの説教が掲載されています。ライト自身が40年後にそれを読み、今の自分が語っていることほとんど変わらなさと感動を覚えたほどの書物です。80年には、福音派の一致を促進させるためにと国教会の福音派協議会よ

国教会の出世コースを辞し 研究と執筆に専念

り要請され、「国教会福音派のアイデンティティー：聖書、福音書、教会の関係」を出版（J.I.パッカーとの共著）、新しい解説を加え08年に同じ書名で再版。さらに83年には『ジョン・プリスの作品』を著し、宗教改革者ジョン・プリス（1533年没）に関する研究を発表しています。

86年にはティンデル注解シリーズの『コロサイ書とピレモン書の注解』を執筆しました（08年に邦訳出版）。88年にはステファン・ニールによる『新約聖書の解釈』の改訂版を出版しています。初版は1861年から100年間の新約聖書の学術書を扱っていましたが、ニールはライトの助力を得て改訂版に着手。ところがニールは84年に没し、ライトは一人で61年から86年までの期間の書物を加える作業をすることになったのです。

以上のように、ライトは70年代から80年代にかけ、様々な種類の書物を出版しています。しかし、基本的には学術雑誌への論文投稿がほとんどで、一般社会や教会に対して働きかけたものはごくわずかでした。そのため、新約学者の間ではそれなりの評価を受けますが、一般社会で注目されることはあまのまかせでした。

3. 脚光を浴びる時代

(93年頃～05年頃)

しかし、90年代に入ると、様相はがらりと変わります。ライトは学際的な世界だけでなく、広く一般社会を意識し、情報を発信するようになるます。「史的イエス」などの論争を巡って、テレビやラジオに

もしばしば出演しています。その書物や講演、インタビューなどは次第に高い評価を得るようになり、彼の活動はどんどん広がっていきます。

その背景は、彼の稀有なコミュニケーション能力だけでなく、国教会の中でより高い地位に登りつめていくことと深く関係していました。ライトは94年から99年まで、リッチフィールド大聖堂の首席司祭(Dean)に任じられます。2000年にはウェストミンスター大寺院の最高位の神学者(Canon Theologian)に抜擢され、03年にはタム大聖堂の主教(Bishop)に就任します。この教会は国教会の中でも古い教会の一つで、格式も高く、国教会第4位の地位にあります。世界遺産にも登録され、映画「ハリー・ポッター」の撮影現場としても有名になりました。

06年8月4日、ライトは5年間の教会関係の法定代表者に指名され、イギリスの国会にもしばしば招待され、国家の問題にも深く関わるようになります。こういう状況の中で、彼の発言は国教会内でもますます大きな影響力をもつようになります。ところがライトは、10年4月27日、学術的な生活と放送などの働きに専念したいという理由で、8月31日をもってタム教会を辞せたいと表明します。国教会の様々な問題に巻き込まれるより、学術的な研鑽、執筆と講演活動の道を選んだのです。その結果、スコットランドのセントメアリーカレッジの「新約聖書と初期キリスト教の研究教授」に就任します。このような決断の背景には、何があったのでしょうか。おそらく、ライトの神学に対する国教会の評価が微妙に反映しているように思われます。(大野キリスト教会宣教師)

N・T・ライトとは誰か

5 中澤啓介

4. 評価と批判のはざままで
ところで、05年頃までは、ライトの聖書解釈と神学はほとんどの人に歓迎されてきました。しかし、彼の神学を必ずしも快く思わない人々が出てきました。むしろ、そういう人たちは最初からいました。ライトがそれほど目立たなかった時代は、反対もそれほど大きくはありませんでした。しかし、彼の名声が上がるにつれ、冷ややかな目で見られる人たちも増えてきます。そのようなグループは大きく二つに分けられます。

一つは、国教会内の教職者グループです。96年にロンドンで、聖公会の福音派グループのリーダーたちによるカンファレンスが開かれました。これは、福音的な聖公会の教職者たちが一致して行動するため、福音的な主教たちにより招集されたものです。その会合において、リッチフィールドの主席司祭だったライトと、保守的な福音派の代表者パウロ・ガードナーとがルカ24章の内容について討論しました。そこでガードナーは、「二世紀時代のユダヤ人たちはいまだ捕囚時代にあると考えていた」というライトの主張に疑義の念を表明しました。ライトは自らの主張を弁護せざるを得なくなるのですが、この時以降、ライトの考えは無条件で受け入れるべきではないという空気が、教役者仲間に広がっていきます。さらに、当時の国教会は、同性愛者同士の結婚や女性教職者の認否を巡り、大きく揺れていました。ライトは前者には否定的、後者には肯定的

1 世紀ユダヤ教の解釈と終末論に 保守派から批判

な立場を取りますが、そういう立場のライトを批判的に見る同労者はたくさんいました。1976年には聖公会の第1回「教会同盟会議(National Evangelical Anglican)」が開かれました。その会合は、従来タブー視されてきた問題に積極的に取り組もうという趣旨で開かれ、ジョン・ストットが指導的な役割を果たしました。キールにおける1回目の会議では「関わること」、翌77年のノッティンガムにおける2回目の会議では「解釈」、88年のカイスターにおける3回目の会議では「統合」の標語が掲げられました。ライトは、77年の2回目の会議で起草された「変わりゆく世界においてキリストに従う」という宣言文に深く関わりました。

さいました。ところが、教会の牧会という現場に立つと、従来の福音、天国、終末理解などを修正し、新しい路線を進もうとする教役者は多くはないわけです。ライトの神学的提唱は、牧会の現場で応用されるようになるまでは行きませんでした。長い伝統を背景にした国教会内での話です。慎重になるのは当然のことでした。どのような学問の分野でも同じことは起こりません。宗教の世界では、古いものを新しく変えていくには幾世代も要するものです。百年単位、ときには千年単位で取り組まねばならないことさえあることも、知っておく必要があります。

ところが、03年のブラックプールにおける第4回の会議では「聖書、十字架、宣教」が最重要視されるようになります。そのときに指導的な役割を果たすのは、ライトに疑義の念を抱いていたガードナーでした。08年には、ロンドンで5回目の「1日の協議会」が開かれますが、いずれの会合においても、ライトは発言する機会を与えられません。これは、ライトの国教会における実質的な立場を物語っています。彼は、公には10年までダラムの主教ですが、06年頃からアメリカにおける活動に重点を移すようになっていきます。

10年10月には、南アフリカのケープタウンで「第3回ローザンヌ会議」が開かれました。その準備委員会がロンドンで開かれますが、そこにおいてもライトは、何の役目も果たすことはできませんでした。このケープタウン会議では、「包括的な福音」の理解が討議され、社会の問題に深く関わっていく決意が表明される予定でした。ライトは既に「創造から新創造へ」という神学的フレームを確立しており、彼独自の終末論を展開していました。ロンドンで開かれた準備委員会において、社会的責任を十分果たすためには確固たる神学的土台が必要であるという意見が出され、ライトを招いて発題してもらおうとの動きがありました。

しかし、ライトの神学に大きな関心が示されることもなく、通り一遍のもので終わりました。ライトは、ケープタウン会議に公式に招かれてはいましたが、発言の機会のないことが明らかになったため、自らその招待を断わりました。(大野キリスト教会宣教牧師)

N・T・ライトとは誰か

6 中澤啓介

ライトに対して冷たい態度を取り続けたもう一つのグループは、オックスフォード大学の教授やその仲間たち、メインラインの中で聖書批評学を継承してきた新約学者たちでした。当時の新約学会は、ライトのアプローチは、これまで自分たちが築き上げてきた学問的土台を根幹から揺さぶるものとして、脅威に感じました。そこで、一切無視するという立場を取る学者たちも現れました。例えば、オックスフォードのクリストファ・M・テュケットは、2001年に『キリスト論と新約聖書・イエスと彼の最初の弟子たち』という書物を著しましたが、ライトについては一言もふれていません。注や参考文献の中にも登場しません。125人の現代の新約学者たちの名前が索引に出ているにもかかわらず、ライトに関しては一言の言及もありません。このことは、どう考えても不自然の誹りを免れません。オックスフォード大学では、ライトの著作を読んでいる学生たちは「根本主義者」と見なされ、冷たい目で見られると聞いたことがあります。また、オーストラリアの神学生たちの間では、ライトの書物を読んでもいいが、隠れて読みなさいと教授から忠告されたという逸話まで伝わっています。この種の伝聞は、どこまでが真実なのかははっきりしませんが、あり得る話です。学問の世界では、ライトはリベラル派からは「根本主義者」と批判され、根本主義者からは「ラディカル過ぎる」と批判されています。ラ

聖書批評学の学者から「根本主義者」と見なされ無視

イト自身は、聖書の学問的な研究成果と現実の教会が置かれている世界との間に大きな乖離のあることを憂え、その橋渡しをしようと考えていました。しかし、現実には大変厳しい状況にありました。福音派の中でさえも、ライトを無視したり、批判する人々がいまいましたが、ポスト福音派の神学を模索している若き学者たちは、概して言えば、ライトを積極的に評価しています。例えば、グラハム・グレイ(リドレイ・ホール・神学大学学長)は、私たちは皆「批判的な現実主義者」にならねばならないと主張し、ライトについては「福音派の学際的な水準の高さを示す代表的な歴史学者」と評価しています。ライトはしばしば、ヨハネが「ことばは人となって」(ヨハネ1:14)と述べているが、教会は「人をことばに戻してしまっただ」と述べています。ケンブリッジ大学出身のマジ・ダウン(現在はエル大学准教授)は、このライトの視点に注目し、ライトの学問的業績や神学の方向性を強く支持しています。ライトの評価については、国教会の中では、現在もおおろおお揺れ続けているように思われます。保守的な福音主義者に厳しい批判を向け続けてきたジェームス・バー(オックスフォード大学の旧約学者、06年没)の次の言葉は、ライトの立ち位置を見事に表現していると思います。「ライトは確かに福音派の学者ではあるが、むしろ彼は独自の道を歩んでいる。誰も、ライトに向

かってこう考えるべきだと言うことはできない。私は彼の言うことすべてに賛成する必要はないと思っているが、彼の発想や神学的展開については大いに敬意を払っている」言うまでもなく、ライトの著作の真意を理解し、正しく評価するには、彼が仕えている国教会、特に福音派の動きをよく知らねばなりません。国教会の中では、福音派の教会が時代のニーズに応じた活動を、過去30年以上にわたって活発に展開してきた結果、若者たちや教会から離れていった層を呼び戻すことに成功してきました。むしろ、福音派の教会が礼拝形態や教会活動を刷新し、国教会内部にその発言力や影響力を増し始めると、按手礼を受けて教職になろうとする人々の数を制限したり、組織の中枢の人事に福音派の人々が侵入してくることに極度に警戒心を抱く人々が増えてきていることも事実です。この辺の微妙な動きを知っておくことも、ライトという一人の聖書学者・神学者を理解するためには重要なことです。むしろ、このようなことは、キリスト教界のムラ社会の問題で、つまらない、笑い話にもならない問題です。しかし、この種の問題は、アメリカでも日本でも、世界中どこでも起こり得るのです。そういううくだらない問題からも逃げずに真摯に取り組みながら、キリスト教界の負の遺産を清算して「神の国」の働きを展覧させていくことが求められているわけです。日本の福音派の若き牧師たちが、この辺の事情をも理解し、受け止め、スケールの大きな人物になって、キリスト教界全体を引っ張っていかなくてはならないことを祈っています。(大野キリスト教会宣教牧師)

N・T・ライト とは誰か

7 中澤啓介

5. ライトの著作

ライトは、様々な種類の書物を著していますが、代表的で重要なのは「キリスト教の起源と神の疑問シリーズ」という、大部の学術的な著作です。学術的と言われると、素人には分からない難解な書物とイメージされると思いますが、しかし、実際にはそうではありません。確かに、聖書に関する基礎知識が全くないと理解し難いところはありますが。しかし、新約時代の歴史的背景や、新約各書の成り立ちなどについて少々の知識があれば、少しも難しいものではありません。

ライトは、啓蒙主義以前、啓蒙主義、啓蒙主義後の近代主義及びポストモダン的な聖書の読み方の違いを丁寧に説明しながら執筆しています。聖書批評学などについても、資料批評から様式史批評、編集史批評を経て物語批評に至るまでをよく整理し、ポストモダン的な感覚を大切にしながら、読み物としても十分耐えられるよう、構成に多くの工夫をこらしています。書物の分厚さに圧倒され、引いてしまわないで、脚注などは気にせず、本文を普通の読み物として読んでみると、聖書の講解説教を読んでいるかのような錯覚に陥ります。

ライトはある個所で「自分の本を一番初めに読み、最初に感想を寄せ続けてくれるのは91歳になる父でした。聖書の学問には全く無縁な父ですが、700頁の本を3日間で読み終え、たいへん面白かったと感想を述べてくれました。た

学術書でも91歳の父が分かるように書こうと

とえどのような学術書であっても、父が分かるように書くという務めています」と述べています。ライトのこのような執筆姿勢を知るなら、私たちがもまた、ライトの学術書にチャレンジする勇気が湧いてくるのではないのでしょうか。

このシリーズの1巻目は『新約聖書と神の民』(535頁)で、1992年に出版されました。そこでは新約聖書時代のユダヤ人の問題が取り扱われています。2巻目は『イエスと神の勝利』(74頁)という書名で、96年の出版でした。

3巻目は『神の子の復活』(816頁)で、03年の出版でした。

この2巻目と3巻目は、イエスの十字架と復活に関する事柄が扱われています。そして4巻目は『パウロと神の誠実さ』という書名で、3巻目から10年後の13年に出版されました。同書は4部に分かれており、I部(パウロと彼の世界)とII部(使徒のマインドセット)が一冊になっていて605頁、III部(パウロの神学)とIV部(歴史におけるパウロ)がもう一冊で千53頁、合計千658頁という膨大な著作です。

このシリーズは、これまで20年以上の歳月をかけて執筆されてきたもので、全部で3千750頁の大著になります。しかし、これで完成というわけではなく、今後さらに2冊が追加される予定です。内容については分かりませんが、6巻ものシリーズで、総頁数は最終的には6千頁を超えることになるでしょう。

神学は、神と歴史と被造物のすべてを扱う学問です。従って、書くことが次から次

へと湧き上がってきて、留まるどころを知らないというライトの心境も理解できます。ヨハネは、「もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も書かれた書物を入れることができまい」(ヨハネ21・25)と述べていますが、ライトの本を読んでみると、ヨハネが言いたかったことがよく分かるような気がします。

しかしライトの偉大さは、このような大部の学術的な著作にある、というわけではなく、神からのメッセージを伺い届けたいと、ポピュラーな書物をたくさん出版し続けていることにあります。

ライトが想定している読者層は、3つに分けられます。

一つは、従来の伝統的なキリスト教信仰に凝り固まっている教役者や神学生です。彼らには、現代のキリスト教界にとって大切なテーマを新しい切り口で、かなりの学術的な匂いを強めて書いています。第二は、教会の信徒一人ひとりに慰めや励まし、霊的な祝福を与えようと、牧会者の立場から書かれています。ここでは学術的な香りは薄まり、新鮮な表現やプレゼンテーションが目立ちます。そして三番目は、キリスト教に懐疑的な一般社会の知識層です。彼は、初めから福音的聖書信仰の立場を鮮明にし、時にいわゆる学問的な論理を超越して大胆に発言をしています。極端な懐疑主義者であるバーバラ・シーリング、A・N・ウィルソン、ジャック・スポークなどの「イエス・セミナー」の論客に対しても、圧倒的な存在感を見せつけて論破できるのは、ライトならではの感があります。(大野キリスト教会 宣教師)

伝道・牧会を考える

N・T・ライトとは誰か

8 中澤啓介

学術書の次に紹介しなければならぬのは、2001年から「すべての人シリーズ」と題された新約聖書の簡明な註解書です。08年まで続き、パウロ以外のすべての手紙（ヘブル書は例外）と黙示録を除いて完成しています。

信徒を対象にして平易に書かれたものですが、内容的にレベルが低いわけではなく、学術的に深みのある内容を分かりやすく解説しています（日本語訳が出版予定）。このシリーズから、新約聖書本文のライト訳のみを抜き出して出版されたのが『王国の新約聖書』（11年）です。ライトらしい翻訳が随所にみられ、デボーションなどで活用すると大きな励みを受けます。これらのほかに、ライトは今日までに50冊以上のポピュラーな書物を著しています。そのほとんどは一般信徒向けの分かりやすいものですが、そういう書物であっても凡に墮することなく、学術的にもしっかりと裏付けされた著作です。その多くは、いろいろな教会や大学、神学校などにおいて、講演や討論、説教やインタビューなどから生まれたものです。例えば、07年に出版された『驚くべき希望』は、もともと01年にウェストミンスター大寺院で語られた講演を、少なくとも別の9か所の教会や大学、神学校において繰り返し、人々のニーズに応え、文章を熟成させていったまとめあげたものです。

そのようなわけで、誰が読んで分かるような内容に構成されています。その話題のほとんどは、ライトが10代の頃

学術的に深みのある内容を誰にでも分かりやすく

頃に抱いた疑問を出発点にしており、しかも90歳を超えた自分の父が一読して分かるようにと熟考した文章です。時々韻を踏んだ美しい文章の中には、戸惑うような単語が使われることもあります。大意をつかめばよいのですから気にする必要はありません。英語の美しい文章の読解にチャレンジするのも、面白いのではないのでしょうか。今後順次、日本語で翻訳出版される計画もあります。

ここでは私の手元にある書物を、テーマごとに紹介しておきます。ポスト・モダンあるいは弁証学的な書物として、『悪と神の義』（06年）、『クリスチャンであるとは』（06年、今回日本語に訳された）、『創造、力と真理』（13年）など。聖書論に関しては、『新約聖書と神の民』（92年）、『聖書と神の権威』（05年、翻訳予定）『驚くべき聖書』（14年）、『なぜ聖書を読むのか？』（15年）。イエスを伝えている、『イエスとは誰だったのか？』（92年）、『オリジナルなイエス』（96年）、『主の道』（99年）、『イエスのチャレンジ』（00年）、『シンプルなイエス』（11年）です。キリストの復活については、『冠と火』（92年）、『神の子の復活』（03年）、『イエスの復活：ジョン・ドミニコ・クロッサンとN・T・ライトの対話』（06年）です。神の国については、『イエスと神の勝利』（96年）、『神はいかにして王となられたか』（11年）、『シンプルな福音』（15年、翻訳予定）などがあります。

パウロの神学については、『契約のクライマックス』（93年）、『聖パウロは本当のところ何と言ったのか』（97年、翻訳予定）、『パウロ：フランスシユな視点』（09年）、『義認』（09年）、『パウロと神の誠実さ』（13年）など。教会論に関しては、『新しくされた教会に対する新しい仕事』（92年）、『素人のための聖餐式』（99年）、『すべての聖徒のために』（03年）、『聖公会、福音派のアイデンティティー』（08年）など。終末については、『千年という神話』（99年）、『新しい天と新しい地』キリスト者の希望の聖書的な描写』（99年）、『驚くべき希望』（07年）、『黙示録』（12年）などです。

なお、説教集としては、『イエスに従う』（94年）、『主と彼の祈り』（96年）、『すべての人に神の価値がある』（97年）、『聖書、十字架、神の民』（05年）、『十字架とコーリーの街』（07年）、『すべての人のための新約聖書の知恵』（13年）などがあります。また、キリスト者の歩みについては、『栄光を反映する』（98年）、『生まれ変わった者達の美德』（10年）、『詩篇の中に神を発見する』（14年）などです。

20年ほど前ほとんど無名に近かったライトは、今日の英語圏において最も影響力のある聖書学者として注目されています。彼は、類まれな著作能力を神から与えられ、教会のリーダーでありながらもアカデミズムにも身を置き、さらに一般の人々にも「コミュニケーションする能力にあふれている」という特異な人物です。ユーマアのセンス、誰にでも親しみを感じさせるオープンな姿勢、時代風潮に鋭く切り込む大胆な発想、質疑応答の場面で見せる独特なカリスマ性……彼のような人物はしばらく出てこないのではないだろうかと思わされます。（大野キリスト教会宣教師）

N・T・ライトの神学とは

1 中澤啓介

8回にわたりの「N・T・ライトとは誰か」を紹介してきましたが、ライトを知るには言うまでもなく彼の書物を読むのが一番です。といっても、英語の原書を読むのは容易ではありません。それでも、ライトが今話題の聖書学者・神学者であるなら、たとえ表面的であっても、教養程度であつてもよいから、サクッと知っておきたいという方々も多いかと思います。そのような方々のために、ライトが何を考え、どのようなことを主張しているのかを簡単に紹介したいと思えます。ライトの奥深い信仰、斬新な切り口で展開する聖書解釈の妙技をわずかでも味わっていただければと思つていきます。

もとの私自身は、ライト研究者でも、ライトファンでもありません。自然災害大国と言われる日本の教会を牧会する中で、自らの内側に起つた「キリスト教信仰の認知的不協和」を何とか解決したいものがき続いている一牧師にすぎません。正直に言えば、自然災害の問題の解決の糸口が見つかるのではないかと、ライトの『悪と神の義』(2006年)をわざわざ読むように読んだのですが、何のヒントも得られず、やり場のない怒りを感じた者でした。

そのとき、啓蒙主義に毒されていくキリスト教からの解放を叫ぶライト神学の方向性に共鳴しながらも、啓蒙主義が提起した問題を真正面から受け止めるキリスト教神学を構築し直さなければだめだと思いました。そういうわけですから、読者にライトの信奉

聖書理解を振り返り 自分の神学を構築する手がかりに

者になっていただきたいわけはありません。ライトにはライトの限界がたくさんありますが、まずは真摯に彼の主張に耳を傾け、そこからライトを越えて自分の神学を築いていただきたいと願っています。

以下のライト神学のまとめは、ライトの膨大な書物の中で、筆者が特に感動した部分を筆者自身の言葉で要約したものです。できるかぎりライトの文章をそのまま伝えるべきでしょうが、そうすると複雑な翻訳文となり、無駄な線り返しも多く、前後の文脈を解説したり、脚注をつけないと意味不明ということになります。ライト的な雰囲気を残す努力を最大限しつつも、ライトが言わんとする趣旨を要約して紹介するに留めざるを得ません。

ライトの主張をおおまかにつかんでいただき、自分の信仰や聖書理解に振り返りの時をもつていただければ、それで十分です。もしおかしと思うところや、分からないところがあれば、読み飛ばしていただくのが一番です。これまで自分が信じてきたことに確信をもち続けて信仰生活を歩むことはとても大切です。

しかし、ライトの言っていることに、今まで気づけなかったことや、面白い点、従来の教をより納得できる事柄もたくさん出てくるはず。そういう文章に出くわしたときには、言及されている聖書箇所を開き、前後の文脈を読み返しながらい、ライトの文章を反すうしていただければと思います。必ずや、ご自分の

信仰を広げていただけたらと思います。

筆者は、すべてのキリスト者が自分の名前をつけた神学を構築してほしいと考えています。私であれば「中澤啓介の神学」です。それは、自分が今、現に「神によって置かれている場所」で、「神から託されている使命」を果たすに十分間に合う神学でなければなりません。そのような神学は、①自分が置かれた現場で直面している問題に真摯に向き合うところから出発し、②これまで受けてきた聖書の知識、宗教体験、関連する教養を基に考え、③自分の周囲の人々(書物を含む)と対話を繰り返しながら熟成させていく、という3つのプロセスを経て構築されます。

神はキリスト者に、「霊的な知恵と理解力」(コロサイ1:9)や「真の知識とあらゆる識別力」(ペリピ1:9)を備えてくださっています。キリスト者一人ひとりは、そのような能力を聖霊の導きと助けの中で働かせ、祈りの中で自分の神学を一步一步築いていくものです。そしてその神学は、「キリストとの共同相続人」(ローマ8:17)あるいは「王である祭司」(1ペテロ2:9、黙示1:6、5:10)として、この世界を治めていく使命に役立つものでなければなりません。

これからライトの神学と一緒に考えるのですが、何のためにこのような学びをするのか、その最終ゴールをはっきり見定めて取り掛かることはとても大切なことです。何をやるべきでも同じですが、その目標が曖昧であったり、ぶれたりのすると、無駄な時間とエネルギーを消費したなど疲労感が残るだけになりかねません。(大野キリスト教会宣教師)

N・T・ライトの神学とは

2 中澤啓介

ライトは、時代意識に極めて鋭敏な聖書学者・神学者です。歴史家として「初代キリスト教の起源」の研究を始め、今日の世界がポストモダンという時代思潮の中にあることをいち早く読み取り、その流れの中で自らの研究を追求し続けてきました。従ってライトは、このポストモダンの時代思潮を鋭く意識しながら、個々の聖書箇所を新鮮な切り口で解釈し直し、それを伝統的なキリスト教神学や教会の課題と絡み合わせながら論じていきます。

そもそもキリスト教神学は、古代教父たちがギリシャ哲学を基盤にしながら構築した正統的なキリスト教神学、スコラ哲学を背景にした中世のカトリック神学、宗教改革によって生じたプロテスタント正統派神学、啓蒙主義以降の合理主義を基盤にする自由主義神学、それに反動した根本主義神学、正統派神学にモダンの意識をもって修正を試みた新正統主義神学、それに危機感をもって対応した福音主義神学、と歴史の流れに応じて旅を続けています。このような流れを踏まえて、しかもポストモダンの社会のニーズに応えることができるようなキリスト教のメッセージを届けなければならぬというのが、ライトの問題意識の背景にあるわけです。以下、ライトの主張の要約です。

1 啓蒙主義以前

キリスト教の世界では、聖書は常に中心的な位置を占めています。イエスが自身も聖書の中で生き、その生涯を聖

第2部 ライトの時代認識 ポストモダン社会に届くメッセージ

書に基づいておくりました。イエスは旧約聖書を数多く引用し、自らの言動を解説しました。それは、福音書を見れば一目瞭然です。荒野で誘惑に遭われた時(マタイ4・1～11)から始まって、神に関する信仰を説かれただけでなく、ご自分の生涯そのものが旧約聖書の約束を成就するものだと言明しています(ルカ24・27、44～46)。

イエスの弟子たちもまた、イエスに倣い、イエスが自身とその御業を聖書から理解しようとする(使徒1・16、2・16～21、25～28、34～35)。彼らは、イエスに関する証言や示された信仰を、手紙や福音書の形で人々に伝えました。彼らは、自分たちの文書が聖書として、後世にまで残され、継承されていくとどこまで自覚していたかは分かりませんが。

その後の教会史上に現れた教会教父たちは皆、聖書研究を中心に神学的な論争を展開しました。オリゲネス、クリソストム、ヒエロニムス、アウグスティヌスなどの古代のキリスト教弁証家たちは、プラトンを中心とするギリシャ哲学から大きな影響を受けました。しかし彼らは、常に聖書に基づきながら、異端者と言われる人々との論争を試みました。

アキナナスをはじめとする中世のカトリック神学者たちは、アリストテレスを中心とするギリシャ哲学を利用しながらスコラ哲学を形成し、その哲学に基づいてスコラ神学を構築しました。しかし、そこでも聖書が中心的な位置を

占めていたことは明らかです。さらに、ルターやカルヴァンを始めとする宗教改革者たちにとって、聖書が信仰の基盤であったことは論を待ちません。彼らの説教や神学は、聖書の講解そのものであると言ってもよいでしょう。彼らはいずれも「聖書の教師」と呼ばれることに最大の名誉を感じていました。近代から現代に至るまでのプロテスタントの教会は、教派を問わず、信仰と信仰生活、教理の形成などにおいて「聖書」をその中心に置きました。

もちろん、カトリックとプロテスタントの間には、大きな違いも存在します。カトリックは教皇の権威を主張し、その結果、教会の権威を聖書の権威と同等に置いていました。宗教改革者たちは、この点こそが最大の問題であると指摘し、伝承は聖書によって最終的にチェックされねばならないと主張しました。カトリックは、このようなプロテスタントの運動を受け、トリエンツ公会議を開き、聖書と伝承の関係について論じます。その会議は、「聖書と伝承は同等の権威をもつ」という従来の見解を保持しますが、同時に聖書の重要性をも確認します。一方宗教改革者たちも、教会の伝承をすべて否定したわけではありません。彼らは、聖書を解釈するとき、絶えずギリシャ教父たちの理解を参照し、彼らの言明に自らの主張の正当性を訴えています(むろん、聖書の権威とはレベルが違いますが)。

クリスチャンは皆、歴史の流れの中で生きています。いかなる伝統にも縛られていないという人はいません。意識する、しないにかかわらず、私たちは、時代の流れの中で聖書を読み、解釈しています。(大野キリスト教会宣教師)

N・T・ライトの神学とは

3 中澤啓介

2 啓蒙主義の時代

1715年に「マグナカルタ」が公布され、「自由と平等」の重要性が訴えられました。しかし、西欧の社会においてそれが実際に問題とされたのは18世紀終わりのフランス革命の時でした。人々は専制君主制度から解放され、ものごとを自分で決定できる「自由と民主主義」を手に入れるようになった。その時以降、次第に、従来の迷信的信仰や恐怖の概念から解放され、人種差別や身分差別、性差別などが減少していく方向で歴史が動き始めました。

18世紀には、科学的な発見と技術が大きな進歩を遂げ、文化的、社会的、政治的な変革が大きく進み、人類の歴史は大きな転換点を迎えました。社会はより自由で開かれた、リベラルで寛大なものになっていきました。

宗教改革以降、18世紀には啓蒙主義運動が盛んになります。それは、人間社会や自然の世界を、ありのまま人間理性で合理的に把握しようとする思想運動です。代表的な人物としては、ヒューム、ボルトール、トマス・ジエファールソン、カントなどを挙げることができます。彼ら啓蒙主義者たちは、キリスト教の問題点は理性的・合理的に物事を考えないことにある、と喝破します。中世のカトリック神学やプロテスタント正統派神学は、いずれも社会や自然に言及していますが、それはあくまで、神、キリスト教哲学、聖書というフィルターを通して見たもので、実態とはかけ

第1章 ライトの時代認識 神を2階に棚上げした理神論の弱点

離れていると批判します。彼らは理性を唯一の判断基準としたため、合理的懐疑主義の立場になり、無神論的傾向を強く打ち出すようになります。

特に、フランスのルソーやアメリカのジエファールソンなどに代表される啓蒙主義の理神論的な運動は、神と世界を分け、神を2階に上げて世界を1階に住ませるといった考え方をしました。2階に住む神は、1階でクリスチャンが個人的な祈りや日曜日の礼拝をささげているときには、この世界に関心をもつことはあざわらうが、通常は一切関知しないという立場をとったのです。神は2階の部屋に閉じ込められ、1階には何も成し得ない、と考えたわけです。これが、いわゆる「理神論」という考え方です。

さらに、聖書を一般の書物と同列に置き、人間の理性ですべてを割り切ろうとする聖書批評学という学問が勃興してきました。こうして理神論者たちは、キリスト教は今の世界では個人的で内面的な事柄を問題とし、未来の世界では天国に行くこと（幸運であるか、あるいは正しい教理を信じていれば天国に迎えられる）を問題にする宗教であると思なしました。

これに対するキリスト教の反応は、様々でした。一方では、新しい聖書批評学を受け入れ、それでもキリスト教信仰を内心の問題と理解し、社会的活動の源泉として活かそうとする人々がいました。一方、新しい考え方や聖書批評学を拒否し、古い伝統的なものに固執し、受け継いできた

キリスト教信仰を守ろうとするグループも現れました。特にキリスト教根本主義者たちは、啓蒙主義運動の理性中心主義を徹底的に批判し、理神論的キリスト教を攻撃しました（彼らが他のグループを批判するときには、皮肉なことに常に理性中心主義でした）。

啓蒙主義運動と時を同じった伝道者として、イギリスのジョン・ウエスレーにふれないわけにはいきません。彼は、信仰の体験を重んじたことから「ウエスレーの四辺形」という言葉が生み出されるほどになりました。聖書、伝承、理性、経験の4つをキリスト教理解の柱にしようとしたのです。むしろ、ウエスレーは経験を重視しましたが、この表現自体は、彼に由来するわけではありません。ウエスレーは、きよめの「伝承」を継承し、神の言葉を聞くときの「理性」を重視し、神の愛を知るための「経験」を大切にしました。しかし、その3つを「聖書」と同列に置くことはしませんでした。

聖書は神の自身の権威に基づくものであり、他の3つは人間に根ざしているものです。理神論には、決定的な弱点があります。イエスは「御心が天になるように地においても行われますように」という祈りを弟子たちに教えました。さらに復活後のイエスは、「わたしは天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」（マタイ28・18）と宣言されました。

いづれの個所でも、「地」においてもという句が出てきます。理神論者たちはイエスのこれらの言葉を全く無視し、神を2階に棚上げし、地から神を断絶してしまいました。それはもはや、キリスト教とは言いがたい理論です。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

伝道・牧会を考える

N・T・ライトの神学とは

4 中澤啓介

3. モタンの時代思潮

近代合理主義の時代は、18世紀の啓蒙主義を契機として始まります。19世紀になると、西欧世界は科学的な思考がさらに進み、科学と技術の世界を発展させ、多くの祝福をもたらしました。その結果、人間社会はより良いものへと発展していくとの楽観主義が横行しました。社会、道徳、政治、経済などの領域では、新しいものが次々と生み出され、古いものに取って代わり、すべてはより良い方向に進んでいるかに見えたのです。

19世紀の世界は、人間の力による巨大な帝国が築かれていくかを見えました。様々な学問が発展し、人間社会や自然も人間の力で治められるかに見えました。特に生物学の研究は目覚ましいものとなりました。ダーウィンの進化の学説は、進化はデタラメに進むのではなく、生き残るにふさわしいものが残っていく(適者生存の法則)という原理に基づいて発展していくことを明らかにしました。つまり、1階の世界であるこの宇宙は、あらゆる方向に進化するのではなく、前進する傾向のもとで進んでいるということです。このような考えは生物学の世界にかぎらず、社会全体に及ぶものと考えられました。科学の発達は、6千年前のある6日間に世界のすべてが創造されたと記されている聖書の解釈をめぐる、大きな論争を起しました。

20世紀は、この19世紀の楽観主義を引き継いで始まります。ところが人類は、2つの

信仰の根底を揺さぶる合理主義

第1章 ライトの時代認識

世界大戦を経験し、ソ連強制収容所やアウシュビッツの悲劇、経済の大恐慌、アフリカの飢えと民族紛争、独裁的専制政治の恐怖、宗教的原理主義者の反乱などを経験していくこととなります。20世紀初頭のロシア革命、30年代に入るとヒトラーが登場し、問題を解決するかに見えました。しかし、それは一時的な希望で終わり、人類の夢は見事に裏切られました。20世紀の終わりにベルリンの壁が崩れるという希望が生じましたが、民族紛争は絶えず、宗教的イデオロギーの戦いはますます先鋭化していきます。

こういう状況であっても、西欧の人々の多くは、歴史はなおよい方向に進んでおり、すべての国々が「西欧の自由で民主主義の社会」をモデルにして前進している、とお手軽な楽観主義を抱き続けています。そういう通俗的な時代解釈に対し、ミシェル・フーコー、ジャック・デリダ、ジャン・フランソワ・リオタールなどの思想家たちは、モタニストの主張する「前進の夢」の暗部のルーツを明らかにしようとしてきました。彼らは、西欧社会は歴史が前進していく先のモデルになるのか、西欧の民主主義社会に世界中の国々を巻き込んでいくことが人類史のたどるべき道だろうか、と、大きな疑問を投げかけたのです。

18世紀の啓蒙主義以降、歴史と宗教は区別して考えるのが一般的になりました。その結果、福音書研究者は、「歴史のイエス」と「信仰のキリスト」とを区別して論じるよう

になりました。イエスがまつわる超自然的な出来事は、信じる者たちの心の中で起こっているだけで、現実には起こったわけではないと主張したのです。しかし、古代の出来事に対峙するとき、歴史と宗教を切り離すことはできません。旧約聖書のアブラハムやモーセなど誰であっても、新約聖書のイエスやパウロにしても、ギリシャのアレクサンダー大王やローマのユリウス・シーザーを歴史的人物として扱うと同様、歴史的に扱わねばなりません。これまでキリスト教の保守派は、歴史に直面することを恐れてきました。しかし、イエスはこの世界の歴史のまったた中においていになりました。歴史の事実やデータを恐れる必要は、いささかもありません。

この200年間の聖書研究は大いに進むのですが、中立的・客観的と称して、聖書をすべて合理的に解釈することになりました。その聖書批評学は、大学と神学校で受け入れられ、キリスト教信仰の根底を揺さぶるようになります。にもかかわらず、聖書は19世紀から20世紀の西欧社会に大きな影響を与えました。特に、文化、政治、哲学、神学、倫理の5つの分野において顕著でした。

カトリックは伝承を重視し、プロテスタント・メソジストは理性を重視しました。その反動もあったのでしよう。プロテスタント福音派は、種々の問題解決の方法として聖書の権威に訴える傾向を強く示しました。しかし、聖書に権威を置く場合、福音派は近代合理主義の理性中心主義を受け継いでおり、16世紀の宗教改革時代のそれとは、かなりの異なっています。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

5 中澤啓介

4 ポストモダンの時代思潮

人類は、啓蒙主義以降の200年間、すべては歴史的・科学的思考によって割り切れると考える近代合理主義の時代を過ごしてきました。この間の科学と技術の進歩は、それまでの二千年間の比ではありません。地球は平らであるとか、太陽が地球の周りを回っているとか、宇宙は6千年前に創造されたとか、ごく最近まで考えられていたのです。しかし、鉄道や車から飛行機へ、そして今や宇宙ステーションの時代になりました。宇宙の起源については謎はまだ山ほどありますが、多くのことが解明されつつあります。生物の進化の歴史も、驚くほどの確実性をもって論じることができるようになりました。DNAの研究は進み、様々な新薬も発見されています。

モダンの社会は、20世紀半ばの全体主義において頂点に達しました。しかし、全体主義は長続きしませんでした。むしろそこからポストモダンという社会が生み出されました。それは、真理はどこにも存在しない、確かなものは何も無いという、ニヒリズムの社会です。全体主義が客観的な認識論を代表するとすれば、ポストモダンは主観主義のチャンピオンです。それは懐疑主義の時代であり、自由主義の時代です。

モダンとポストモダンの社会では多くの相違があります。その一つは、「真理」に対する考え方です。モダンの社会では、真理は真理であって、普遍的なものとして信じられてき

真理に懐疑的な社会で聖書の現実を

第1章 ライトの時代認識

したが、ポストモダンの社会では、真理に関して「不確定原理の要素が導入されます。科学や数学の世界での「真理」は、繰り返し起こる事象であり、実験によって検証可能です。一方、イエスが十字架上で死なれたことは真理である」とは、歴史上の出来事として実際に起こったという意味になります。ところが、「放蕩息子」の話は真理である」とは、神が父であるかのような愛を人にもっていることを確信している、という意味です。さらに、「真理」は文化的背景の中で違いが生じます。あなたにとって「真理」であることが、私にとっては必ずしも「真理」であるとは限りません。ある社会での「真理」が、別の社会では「真理」として受け止められないということはしばしば起こります。

聖書の物語は、「公共の世界」誰もが認知できる普通の世界を舞台に繰り広げられました。私と他の研究者たちは、イエスに関する記録を1世紀の文脈の中で集中的に研究しています。その結果、これらの資料は基本的に信頼できるものとの結論に達しました。といっても、提起されている疑問のすべてに合理的な証明を提供できた、というわけではありません。そのような疑問のあるものは、科学を専攻した人々から出されたものです。歴史的な出来事の疑問に科学的な方法論で回答することは不可能です。歴史における出来事は一回限りのしか起こらないものですから、高い確率で起こったことを述べることができません。繰り返し実験を行い、同じ結果を出すことによって証明する科学とは、本質的に異なる学問なのです。

このような状況をポストモダンというのであれば、クリスチャンもまた、喜んでポストモダン主義者になるでしょう。しかし、現在、世界中に鳴り響いている懐疑主義のコールは、少々違います。科学の世界では、水が突然100度Cではなく90度Cで沸騰するようにはなりません。同様に歴史においても、ある日突然、紀元後70年のエルサレムの陥落は起こらなかったとか、その40年前のイエスの十字架の受難は起こらなかった、という結論が出ることはありません。イエスの復活を証明することは、ピタゴラスの定理を数学的に証明することと違いません。それは別のカテゴリーの出来事ですが、それなりの合理的説明は可能なのです。

「聖書の物語」を研究する学者は、ポストモダン主義キリスト教のモダン主義も含む）をポストモダンの視点をもちつつ、批判的に検証する作業に従事しています。それによって、聖書の約束する「新創造の世界」が、現実のものとして開かれ、迫ってくるのです。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

N・T・ライトの神学とは

6 中澤啓介

5. 聖書的な歴史展望

アメリカではステイブン・ピンカーが『我々の本性の中のより良い天使』(2012年)を著し、暴力の歴史をたどりながら、世界はより平和になりつつあり犯罪は減少している、と楽観的な見方を表明しました。一方イギリスのジョン・グレイは、人間が政治と道徳の面において前進しているとの考えは神話に過ぎず、現実的ではないと述べています。クリスチャンは、この世界がどうなっていくと見ることが正しいのでしょうか。クリスチャンは、人間の文明の歴史という小さな領域から、宇宙大の全被造物の視点に立ち、キリストの復活による「福音」が歴史の転換点になっていることを知らねばなりません。イエスと彼に従った最初の弟子たちは、「福音」を「イエスの十字架と復活の出来事が起こった結果、この世界は従来とは全く違った位置に置かれるようになった」と信じました。ところが現代の教会は、福音をそうは理解していません。

啓蒙主義者が、神と世界を1階と2階に分離したことを思い出してください。あるクリスチャンたちは2階に上がって1階に降りて来ません。別のクリスチャンたちは1階に住み2階に上がることはしません。こうして「自分たちこそ聖書的である」と叫んでいるのですが、1世紀の福音理解からは大きくずれてしまっていることに気づいていません。その結果、この世界の人々は誰も聖書の福音を聞け

なくなってしまうています。

2階に住む1階には降りて来ようとしませんが、福音派の根本主義者たちがいます。彼らは、聖書を啓示の書として受け止め、そこから正統的な教義を完全な体系として導き出しています。不確定であればあるほど、確定を求めたくなるというのが人の常ですが、根本主義者とは、ポストモダンの空気の中で確定を求める人たちです。それは学問的な研究から来るものとは違う性質の確かさです。

2階の住民には、自らの宗教的・霊的な体験、あるいは自らの感覚を重視して信仰生活を送っているカリスマ運動のめり込んでいるクリスチャンたちもいます。彼らは超自然的な世界を住環境としており、1階の住民や外の大通りにいる人々に向かって、2階に上がって来るよう大声で呼び続けています。

一方1階に住むクリスチャンたちは、自分たちの部屋の鍵をかけてしまい、2階に決して上がろうとはしません。この世界の問題には熱心に取り組む、政治や社会に山積する問題に首を突っ込むどころそがクリスチャンの使命であると確信しています。彼らもまた、根本主義者たちと同様「理性中心主義者」なのですが、その理性が向かう対象が異なります。この世界であって聖書ではありません。その基本的アプローチは、理性的に納得できることのみを真理と考えるため、超自然的な神や聖書、イエスに対し、あるいは教理体系や神学そのものに対し、懐疑主義的メンタリ

ティーをもっています。

イエスは、復活された後、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」(マタイ28・18)と宣言されました。パウロもまた、獄屋のただ中で、キリストは全宇宙を治め、すべての悪の力はキリストによって滅ぼされている、と叫んでいます。1世紀のクリスチャンたちは、迫害を受け、困難な中で様々な苦闘を強いられながら、キリストが全世界の主であることを告白し続け、宣べ伝え続けました。彼らは、あなどられ、退けられ、無視されながらも寛大に生き、貧しき者たちに愛を施し、病人を癒やし、あるいは見舞い、何の関係もない人々にさえ愛を分かちあう生き方をしました。神の愛と聖霊の力が今のこの世界において働いていることに信頼し、不可能を祈りの中で変えていったのです。イエスはメシヤとしてよみがえられ、新創造を始めておられる、そう信じて、あらゆる新しい可能性が開かれていることを真正面から受け止めて歩んでいました。

現代のポストモダン時代に生きるクリスチャンの中には、イエスが再臨されるまでは、この世界に対し何もすることはできない、ただキリストの再臨を待つだけだと考えている人々がいいます。彼らは、新約聖書のメッセージを真剣に受け止めることをせず、イエスとイエスに従う初代のクリスチャンたちに見習おうともしていません。

神の国は神が打ち立てていくもので、人が創りだすものではありません。神は、神の方法ですべての働きをすでに進めておられます。クリスチャンは、そのことに気づかねばなりません。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

伝道・牧会を考える

第1章 ライトの時代認識 世界をどう見るか 1世紀と現代

N・T・ライトの神学とは

7 中澤啓介

6. 信仰と希望と愛の認識論

理性は最も人間らしい特質で、他の被造物にはない特別な能力です。それは人間が造られた「神のかたち」の一部であると同時に、墮落によって傷つけられています。しかし、イエスによる贖いのプランはクリスチャンの全人格に及びます。贖われたクリスチャンの理性は、信仰によって有益です。しかし、信じることをすべて命題的に把握できず、弁証できるのかという点、そうではありません。聖書はそのような目的で書かれてはいません。福音派の神学では、命題が指し示している事柄より命題そのものが問題で、そこに焦点があてられる傾向があります。しかも、すべての教理的体系を「信じたら天国に行ける」という枠組みでまとめてしまうことには、大きな危険があります。

クリスチャンが、自分の体験や感覚、感情などを信仰理解のために大切にするのは当然です。「神のかたち」の中には、それらも含まれます。音楽、絵画、芸術などを通して神体験が深められていくことは間違いありません。霊的賜物、超自然的・神秘的な洞察や証しは、神への信頼を深め、信仰を自らの内に内面化させ、互いの交わりを促進させ、共同体を励まし育てていきます。これらのことは理性中心主義に陥っていく間違いは避けさせてくれますが、同時に、独りよがりになり独断的になっていく危険性に注意を払わねばなりません。

私たちは、神が聖書を通して

新創造を理解する新しい認識論

第1章 ライトの時代認識

語りかけている「新創造の世界」を見なければなりません。この新創造は、イエスの復活の出来事を起点として始まりました。イエスの復活は、「公共の世界（一般の人々の世界）」では奇妙な出来事に映るでしょう。無神論を前提とする現代科学や歴史のような疑似科学によつては認識できない、理解不能な事件です。それゆえ懐疑論者は、イースターの朝の出来事を単なる主観主義の問題へと還元してしまします。しかしそれは、主観的な世界の出来事でもありません。客観的でも主観的でもない第三の認識論によつて近づく必要があります。イエスを「主」と告白し、新創造を理解する新しい認識論です。これまでの認識論で神を知ろうとするのは、ろうそくの光で太陽が照っているかどうかを確かめようとするようなものです。そのような愚かなことは、即刻やめた方がよいでしょう。

イエスの復活は、新創造を特徴づける全く新しい出来事です。従って、信仰と希望と愛とに基づいた「新しい認識論」によつて近づく必要があります。この認識論は、「信仰の認識論」とも「希望の認識論」とも「愛の認識論」とも呼ぶことができます。「信仰の認識論」の代表的な例としてトマスを挙げることができます。トマスは、自分も古い世界観ではイエスの復活を受けとめることができずとてした(ヨハネ20・24～25)。復活のイエスに出会い、初めて「私の神。私の主」(28節)とひれ伏したのです。そのトマ

スに、イエスは「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです」と言われました(29節)。私は、イエスのこの言葉を「トマスのチャレンジ」と名づけています。トマスに求められたことは、反歴史主義や反科学主義ではなく、それを大きく超えたものでした。

トマスが「信仰の認識論」の代表者であるなら、「希望の認識論」を展開したのはパウロです。コリント人への手紙第15章の前半でパウロは、キリスト者とは「キリストに単なる希望を置いている」人たちではないと断言します(19節)。そして後半で、キリスト者が終末において復活のからだにあずかる「希望」を詳しく論じます(35～49節)。新創造の世界は、イエスの復活によつて始まりました。パウロは終末の新しい創造に対する希望をもつことによつて、イエスの復活を理解できることを示しました。

「愛の認識論」を教えている人物はペテロです。ヨハネの福音書21章において、復活されたイエスはペテロに「あなたはわたしを愛するか」と3度尋ねました(15、16、17節)。ペテロは、「私があなたを愛することは、あなたがご存知です」と3度答えました(15、16、17節)。イエスを愛することなくしては、イエスの復活も新創造の世界も謎のまま終わってしまつてしまいます。

「信仰」と「希望」と「愛」の3つは、いつまでも続きま(1コリント13・13)。イエスの復活から始まる「新創造の世界」は、「信仰の認識論」、「希望の認識論」、「愛の認識論」をもって近づくべき、切の開かれていくのです。

(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

8 中澤啓介

キリスト教界は、いつの時代であっても、聖書を土台に信仰や教理、神学を構築してきました。プロテスタントのほとんどの教派では、「聖書は神の靈感によって記された正典であり、信仰と生活の唯一の規範である」と告白しています。では、聖書とはそもそもどのような書物なのでしょうか。なぜ神の権威をもつ書物なのでしょうか。聖書をどのように解釈するのがよいのでしょうか。ライトはどのように考えているのでしょうか。従来の福音派が主張していることと、違いがあるのでしょうか。ライトの語ることを聞いてみたいと思います。

1. 聖書は「神の物語」

すべての民族や社会は、生きていくにあたり、様々な疑問にぶつかりました。この世界は、なぜ、どのようにして出来上がったのか。この世界はどんな構造をしているのか。どのような意味や目的があるのか。人間とは何者か。永遠の世界は存在するのか。神とはどのような方か。神はお一人か、たくさんいるのか。普段は何をしているのか。それぞれの民族や集団は、この種の質問に対し、彼らなりの答えを見いだしてきました。そして、通常は仲間内において、それを物語の形式で世々に伝承してきました。いつの時代でも、この世界でも、誰でも理解できる普遍的な伝達形式は物語です。物語は大抵は宗教的な意識や装いをまとっていました。それが宗教の起りのものであります。近代合理主義の時代には、そ

第2章 聖書について 正典の権威の源はどこにあるのか？

のような問題を解明する「宗教学」が発展しました。

キリスト教の正典である聖書も、そのような宗教的な背景をもつ文書の一つと見なすことができます。ユダヤ民族は、古代中近東の様々な民族や国家の中で誕生しました。この世界の創造者であるヤハウェなる神は、アブラムという一家系を呼び出し、唯一の神の宗教国家を形成しようと目論まれました。しかも神は、その中からある人々を「神の器」として選り、神ご自身が意図された「創造と贖いの計画」を、ご自分の民に明らかにされました。それが聖書です。ですから、語るようにと選ばれた人も、そして語られた神の民も、神のご意思をよく理解できたはずで、と

いうことは、神は、彼らが日常使っていた言語や表現様式を通して語られた、ということに他なりません。

ところで、聖書はこのような特殊な性格をもつ書物です。から、他の宗教的な文書と全く同じ類の書物とはいえませんが、それは、人間を超えた神が「息を吹きかけられ」生み出された文書です(IIテモテ3・16)。聖書の著者は神であり、神がその書物を集め、正典として教会に与えられました。しかし、ある人々は、「聖書の各書物を結集し、正典として承認したのは教会だから、聖書の権威は教会のもにあり、教会の権威の方が上である」と主張しています。特に、教会の伝統を重んじるカトリック教会には、このような考えが強く見られます。

異なりませんが、ポストモダンの懐疑主義者たちもまた、歴史的経緯を重視し、社会的なパワーゲームの理論を基に、同じような考え方をしています。しかし、彼らの理屈には根本的な欠陥があります。例えば、兵士が上官から手紙によってある命令を受けたとします。手紙の配達者は、その手紙を上官から受け取り、宛先人の兵士に届けます。このプロセスを見て、兵士は手紙の配達者から命令を受けたと理解する人はいるでしょうか。教会の権威を上へ置く人は、同じようなことをしているのです。

新約聖書の正典化のプロセスは「使徒的権威の認められるものが集められた」と、ひと言で片づけられるような簡単なものではありません。新約聖書のそれぞれの書物は、神が歴史において着々と実現している「神の物語」のフレームに沿いながら、聖霊の働きをおして記されたものです。初代のクリスチャンたちの中には、ローマ皇帝の権力による迫害を受け、逮捕され、投獄され、殉教する道をたどった人々がたくさんいました。彼らが神の贖いの恵みの中で生かされ、読み続けてきた書物が聖書です。マタイやマルコの福音書を読み、パウロの手紙を読んで信仰に生きていたのです。

懐疑主義者たちの中には、トマス福音書の方が四福音書より古いと考え、聖書以上に権威があると主張する人がいます。しかし、それは極めて不正確な歴史認識です。トマスの福音書を読んで命をかけた信仰者は一人もいません。聖書は、この世界に神の国を生み出す原動力になった書物です。そこに聖書の権威があるのです。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

9 中澤啓介

2. 物語の5つのモチーフ

聖書は、万物の創造者なる神が一人の家系を選び、その家系をおして全人類に豊かな祝福を注ぐとする「神の物語 (narrative)」です。下から上へではなく、上から下への物語です。神がこの世界を愛され、その世界を治めるために「神のかたち」に造られた人間を限りなく愛され続けているという、神の「愛の物語」です。この物語は5つのモチーフから成り立っています。創造、墮落、イスラエル、イエス、そして教会です。これら5つのモチーフは、5つの舞台、あるいは5つのモデルと言ってもよいでしょう。

5つに分類したのは私自身 (ライト) です。それは、絶対的なものではありません。ある人は、ヨハネの黙示録の最後 (21〜22章) に出てくる「新しい天と新しい地」の出来事に加え、6つに分類するほうがよい、と主張するかもしれません。そのように理解しても構わないのですが、私自身は、新天地の希望は6番目の最後の舞台というより、新しい「新創造の物語」の最初の舞台と位置づける方がよいと考えています。

またある人々は、創世記3章にしか出てこない「墮落」の出来事を、特別一つのモチーフとして取り上げる必要はないのではないかと疑問を呈します。確かに私は、墮落の出来事を重要視し過ぎるくらいはあるかもしれませんが、むしろ、創造のすばらしさを奪ってしまふ「悪の起源」について、1世紀のユダヤ世界に

第2章 聖書について 墮落から新創造へ向かう「神の愛の物語」

別の考えがあったことを承知しています。しかしそれでも、聖書物語全体において、創世記3章の墮落記事が極めて重要な意味をもっていることを強調しないわけにはいきません。旧約のイスラエルの歴史においても、新約のイエスの贖いのわざにおいても、人類の墮落という出来事が絶えずつきまとっているからです。

5つのモチーフから成り立っている「神の愛の物語」は、交響曲に例えるなら5つの楽章をもって展開されていると言ってもよいでしょう。各楽章が追いかけて合いながら、最後のクライマックスに向かって進むのです。それは、完全であった神の創造が人間の墮落によって混乱に陥るが、イエスの贖いを通して回復の道へと進み、遂に新創造へと完成されていくという「神の物語」です。イエスはこの世界を滅ぼすためではなく、回復し新しい世界を導入するために来られたのです。イエスによる救出劇は、神の民をこの世界から逃避させるものではありません。むしろ、ご自身の民を新たなものに造り替え、世界に派遣するものでした。

この「神の愛の物語」の作者は神でした。物語の主人公もまた、神ご自身です。そして舞台は、創造の初めから、古代イスラエル史、イエス時代を通じて初代キリスト教史へと進みます。聖書の物語は、ここで終わっています。ところが、驚いてはいけません。この「神の愛の物語」は、そこで終わるわけではありません。その物語は、今に至るまでずっと続いています。しか

も、その物語には隠れた主役がいます。それは「あなた」です。聖書を読んでいる「あなた」自身が、神の物語の主役として抜擢されているのです。聖書は、過去の歴史物語で閉じているわけではありません。また、未来の新創造の物語に勝利のファンファーレを響かせている、というだけでもないのです。現に今、歴史のまった中で苦闘している「私」、そして「あなた」に、神は傍らで声援を送り続けています。クリスチャンは皆、神の民として、神とともに働きながら、神の物語を描き続けているのです。私たちは、5番目の「教会」という舞台で活動している、今の時代の主人公です。その5幕は、イエスターとペンテコステをもって始まりました。そしてその最後は、全被造物の贖いと新天地の到来で幕を閉じます。その最後の光景は、ローマ人への手紙8章、コリント人への手紙第一15章、黙示録21から22章において明らかにされています。

聖書は、神が主導された「神の愛の物語」です。物語の權威は、語り手である「神」にあります。さらに、いつの時代の人々にも神からの深いメッセージを届け続けた「物語」そのものにあります。その物語は、創造から新創造までのストーリーを様々な角度から繰り返して語ることによって、読者を異なる世界観に対峙させ、変えていく力をもっています。それが聖書の權威です。教会は聖書の權威を巡って様々な論争を展開しました。しかし、聖書の權威を、語り手なる神から切り離し、物語のメッセージがもたらす權威から離れて論じるならば、結局、無益な論争に終始するでしょう。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

10 中澤啓介

3. 物語における クリスチャンの位置

聖書は、創造、墮落、イスラエル、イエス、教会の5つの舞台から成り立つ物語の中に生きている人々を描いています。イエスによって贖われたクリスチャンは、第5幕に生きる人々です。第1幕から第4幕までの登場人物と深い関わりがありますが、その生き方をそのまま模倣することはできません。私たちは、第1幕（創世1〜2章）の創造やエデンの園に登場する「人類の祖」であるアダムとエバを、第5幕に登場するクリスチャンの創造時の人間像として読まなければなりません。

といつても、クリスチャンや教会が罪のなかつたエデンの園に戻って生きることができると考えてはなりません。現代に生きるクリスチャンが、創世記1章と2章の世界から「こうあるべきだ」と論ずることは構いません。しかしそこには、わずかなヒントがあるだけで、今の私たちが必要としているものはほとんどありません。クリスチャンは、エデンの園にモデルを求めて戻ろうとするのではなく、新創造に向かって変革していくのであり、神の全体のご計画を知って行動していかねばなりません。

第2幕（創世3〜11章）は、人間の墮落の出来事を伝えています。そこにはキリストの贖い以前の悲惨な世界の姿が描かれています。現代社会とほとんど変わらない状況を見いだし、驚くでしょう。しかし、現代のクリスチャンは、

第2章 聖書について 私たちにとっての各幕の読み方と意味

既にイエスの贖いを受けています。第5幕の生き方を、第2幕の世界と同一視することはできません。確かに悪はこの世界に満ちています。しかし、キリストによって贖われた者に対しては何もできません。今や私たちは、勝利者イエスのもとに歩む恵みを備えられているのです。

第3幕（創世12章からマラキ書まで）は、イスラエルの歩みを報じています。クリスチャンはイスラエルの民ではないので、神殿に行ったり、犠牲をささげたりはしません。律法や預言者のメッセージは、古代イスラエルの民に向かって語られたものです。クリスチャンは、第3幕のイスラエルの民をモデルにして生きることをしません。ただし、ここに難しい問題があります。第4幕のイエスも同じですが、第5幕で生きるクリスチャンの中には、ユダヤ人と接触して生きることを余儀なくされた人々がいたことです。例えばパウロは、ユダヤ教の中で育てられ、ユダヤ人の仲間とユダヤ教の会堂に入

って伝道を展開しました。ここでは「ユダヤ人には、ユダヤ人のように」という行動原理が求められました。この問題は、ガラテヤ人への手紙3章やローマ人への手紙4章で扱われています。

第4幕（新約聖書の福音書）は、イエスの活動を明らかにしています。イエスは「イスラエルのクライマックス」として、さらには第5幕の「贖いの基礎」として行動されました。贖われたクリスチャンは、イエスが語られた

メッセージを直接そのままするべきではありません。現代の私たちは、パレスチナの地に住んでいるわけでも、イエスの直接の弟子でもありません。例えばイエスは「異邦人の道に行つてはいけません。サマリヤ人の街に入つてはいけません」（マタイ10・5）と、12弟子に命じました。しかし、イエスの命令だからといってそれを守る必要はありません。復活されたイエスは「あらゆる国の人々を弟子としなさい」（マタイ28・19）と、その命令を打ち消されたのですから。イエスが語られた「神の国」の譬え話は、第5幕の舞台を予告したものであり、第5幕のクリスチャンが聞くべきメッセージでした。

第5幕（新約聖書の手紙など）は、私たちにに向けて語られたものです。むしろ、1世紀のクリスチャンに語られたことは事実ですので、その脈絡の中で有効なものとそうでないものを見分ける必要があります。またクリスチャンが新約聖書と旧約聖書の扱い方を導くのは当然のことです。第5幕の最後の場面、終末の世界を見据えながら歩んでいきます。そこに神殿はなく、神からの直接の御声を聞くことでしょうか。もはや聖礼典はなく、聖書さえ読まれることはない世界です。

クリスチャンは、第1幕の創造から第5幕の教会に至るまでの出来事を的確に把握し、その展開に沿いながら自らの歩みを正していくことが大切です。聖霊の導きと祈りの助けを神からいただきながら、仲間の中で調和を保ち、自由にかつ創造的に、自らに与えられた使命を果たしていくことを求められています。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

N・T・ライトの 神学とは

中澤啓介

4. 聖書の権威

これまでキリスト教界は、聖書を「時を越えた神の真理を記述した書物」とか「神との交わりに有用な書物」と理解してきました。前者では、聖書はキリスト教教理の素材を提供する書物となります。後者では、聖書は毎日クリスチャンが読む「デポーション」的な書物と位置づけられます。しかし聖書は、宗教的、神学的、倫理的な真理を情報として提供しているわけではなく、あるいは、クリスチャンに対し、毎日の生活で神との交わりを促進させようとしているわけでもありません。むしろ、神自身が生み出された全被造物に対して持つ「おられる計画」、あるいは「目的を明らかにした書物」です。私は、聖書から神の事柄に対する真理を導き出し、教理を体系化するプロテスタントの神学的な作業はどれも重要だと認めています。また、プロテスタントの中にもイグナチウスに見られるような黙想の手段として聖書を用いるグループが盛んに活動している状況を喜んでいます。しかし、それが聖書の本来の目的だったとは思っていません。特に、そのような読み方を「聖書の権威」に結びつけて論じることは正しくありません。聖書はそれ以上のものです。神は、永遠のご計画のもとにこの世界を創造されました(エペソ1・1〜13)。神は、人間の墮落以降、キリストによってすべての悪の力を打ち砕き、世界を改変し、新創造に向かって働きを進めて

第2章 聖書について 神は聖書と被造物を通して語っている

おられます。そのような計画のもとに神の民を選び、彼らに神のみこころを示し、計画を着々と実現しておられます。神は、そのご計画を聖書を通して明らかにされているのです。教会は、聖書を読んで神のご計画を知ります。教会は文字とおりの「聖書を読み合っている共同体(the scripture-reading community)」です。神は、聖書朗読、説教、解説、適用などを通して、個人の心と精神とに語りかけます。聖書のみ力は「書かれた」「あるいは」「語られた」「言葉と共に働き、教会が与えられた使命を十分に果たすことができるように助けます。キリスト者は、聖霊と祈りの助けにより、第一幕の創造から第五幕の教会に至る出来事を的確に把握し、その展開に沿いながら、一番よい調和をもって理解していくよう自由、創造的に発展させていかねばなりません。自由にといつと、気ままにと勘違いし、勝手な行動が許されていると考える人たちが多くいます。しかし、それは間違いです。音楽で言えば、楽譜に沿いながら周囲の人々の声にも耳を傾け、一つの音楽を完成させていくのです。一人のクリスチャンであっても、一つの教会であっても、主旋律からはみ出て勝手な音楽を奏でてはいけません。その際、理性の働きは重要です。理性は、主旋律ではなく、主旋律を力強く鳴り響かせるために、副旋律を全体として調和させ、補う働きをします。20世紀後半のプロテスタント福音派の世界では、聖書の

権威を確立するため、「無謬性(infallibility)」とか「無誤性(inerrancy)」という問題が論じられてきました。近代の合理主義精神に基づいて聖書を命題的真理の集合体として捉え、懐疑主義から弁護しなければならぬと考えました。しかし、その議論はどこかスーツケースに入っているものを外から論じているような感があります。いっそスーツケースを全部開き、中の物をすべて取り出して新しい空気に触れさせ、新たな視点より論じる必要があります。時にアイコンをかけ直すこともしたほうがよいでしょう。パウロは、すべての権威は神から来ていると述べます(ローマ13・1)。イエスもまた、権威は上から与えられるものだと述べています(ヨハネ19・11)。ヨハネは、「ことばは人となつて、私たちの間に住まわれた。私たちがこの方の栄光を見た」(ヨハネ1・14)と言います。ここで「ことばは書かれた」とは言われていません。イエスは、天においても、地においても、一切の権威が神から授けられています(マタイ28・18)。聖書の権威を神、あるいはキリストから切り離して考えるようになってしまつたことが大きな間違いだったので、神は、聖書を通して語りかけられます。しかし、それだけではなりません。被造物を通して神は語りかけられます(詩篇19篇、ローマ1・20、10・18)。肉体を取られた「生けることば(キリスト)」を通して語りかけられます(ヨハネ1・14、ヘブル1・1〜2)。神の権威は、創造の御業を通して、あるいは被造物のすべてに対する裁きや贖いを通して明らかにされています。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

12 中澤啓介

5. 物語としての聖書解釈

神の物語である聖書を読むのに、よいアドバースがあります。旧約聖書のある箇所を読むときには、その部分を窓として旧約聖書全体のストーリーを見るようにします。そしてさらに、その問題が新約聖書において関連することがないかを考えます。新約聖書についても同じです。まず、読んでいる箇所を窓として新約聖書全体のストーリーを見、それから旧約聖書において関連する事項がないかを探します。つまり、聖書の一部を読むとき、それを窓にし、その向こう側に広がっている聖書全体の世界を眺めていくのです。しかも、そのさらに向こう側には、「私たちが生きていく現実の世界」が大きく広がっています。その「現実の世界」を見通しながら神の御心を読み取っていく、それが聖書を読むことにはかなりません。単に字面だけでは、「神の意図」を把握することはできません。

聖書の物語の語り手は神です。聞き手は神の民です。神は、語り手であるだけでなく、物語の主人公でもあります。聖書は、創造の始めから新しい世界に至るまで、アブラハムの召しから新しいエルサレムの完成に至るまで、ただ一人の神を証しています。多神教は、創造されたものの栄光に感動して、創造主ではなく被造物を崇拜していることが問題です。これが発展すると汎神論になり、古代のアジア哲学や現代のニューエイジ信仰の基になります。聖書は、

第2章 聖書について 部分から全体へ世界を見て神の意図を読む

このような多神教や汎神論に厳しい挑戦状をたたきつけています。創世記から黙示録に至る神の全啓示は、唯一の創造主のみを神としています。この世界にあるものは、あくまでも被造物であって神ではありません。

聖書の解釈は、簡単でないこともあります。「イエスの神性」であれ、「信仰義認」であれ、著者やその執筆時代の枠の中で記されています。すべての言葉の意味はその節の中で、その章はその書物全体の中で決定されなければなりません。その言葉の辞書的な意味は、様々な使用例からの確に推測されねばなりません。辞書の作成に必要な言語研究や考古学的な発見は日々新しい情報が加えられています。それゆえ、専門的な学術雑誌を参考にする必要もあります。また、同時に書かれた時代背景の中で解釈されねばなりません。

理性は、聖書を自分勝手に気ままに解釈しないように、聖書本文の言語的な文脈的、歴史的背景をきちんと把握した上で解釈するために使われるものです。特に、聖書本文の(律法か、歴史か、詩歌か、格言か、預言か、手紙か、黙示文学か、といった)文学類型や、散文体が詩文体か、記述文か命令文か、などという問題を見極めることは極めて重要です。旧約聖書と新約聖書の関係にも注意を払わねばなりません。また、理性の営みである生物学、考古学、物理学、天文学などは、神の世界と人間の状況を理解するのに、多くの光を与えてくれます。

す。これらの学問が発見した大量の情報に、聖書を理解するのに有用です。科学は、そのもともとの定義から言っても、繰り返して起こる世界の出来事に対して有効です。歴史は、繰り返して起こらない出来事を扱います。学問によってその性格は違います。

聖書の専門的研究家は、神が教会に与えてくださった偉大な賜物です。彼らは、聖書の深い意味を探求するのに必要な人々です。学問の自由と教会に忠誠を尽くすことの間には、時々耐えられないほどの緊張関係が生じることがあります。教会の中では、純粋な信仰を破壊してしまうものとして学問的成果を否定する「反知性主義」を取る傾向があります。しかし今や、このような対立関係を終える時が来ています。聖書自体を新しく理解するために、自らのみが「聖書的である」とするプライドは捨てねばなりません。聖書は、基本的に読むだけで分かるものですが、聖書全体のメッセージをよく知っている人から解説される必要もあります。使徒の働き8章に登場するエチオピアの政府高官は、イザヤ書53章を読みながら、この記録が何を意味しているのか知りあぐねていました。そんなとき聖霊は、イエスの弟子であったピリポにその聖書を読んでいる高官に近づこうと語られました。ピリポが「あなたは、読んでいることが、わかりますか」と聞くと、高官は「導く人がなければ、どうして分かります」と答えました(30、31節)。ピリポは、読んでいた聖書の箇所からイエスを解き明かしました。このピリポの役目こそ、キリスト者の、教会の役目にはかなりません。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

13 中澤啓介

6. 聖書記者の 意図を読み取る

聖書の著者が言いたい意図を正確に把握するのに、健全な歴史的研究方法は適切なものです。聖書に向かうとき、「批判的現実主義者(critical realism)」になる必要があります。提起されている問題などないかのごとく無視するのはよくありません。むしろ直面している問題に關し正しい疑問の文章を作り、正しく答える努力や努力を惜しまないことです。「実際に起こった歴史(real history)」をそのまま受け止め記述できる「真の歴史家(real historians)」になる必要があります。聖書を正典として受け止め、その記述を新しい視点で洞察して読むことが何より大切です。過去に神がなさったことを適切な方法で神学的に的確に把握することは、「批判的現実主義者」に課せられた使命です。

宗教改革者たちは、「聖書をリテラルに読むこと」を主張しました。「リテラル」とは、著者の意図を正確に把握することで、何でも文字どおりに解釈することではありません。18世紀、19世紀を風靡した合理主義に連動し、聖書を文字どおりに解釈しようとする「ティス・ペンセーション主義」が起りました。しかし、聖書は「フィギュラティブ」(比喩的)に解釈せねばならない箇所もたくさんあります。どこまでがリテラルな意味で、どこまでがフィギュラティブな意味かという問題は、簡単に決められない場合もあります。例えば、ダニエル書8章

第2章 聖書について 批判的現実主義者として聖書に向かう

には、4つの生き物に関する預言があります。一つ一つの生き物がそれぞれ古代の帝国を指し、フィギュラティブな表現であることは間違いない。しかし、4という数字は文字どおりの意味ではありません。そのように、ある聖書箇所においても、リテラルに解釈すべきところもあれば、フィギュラティブに解釈すべきところもあります。

イエスは、終わりの日についてたくさんのお話を残しています。例えば、「これらの日の苦難が続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺動かされます」(マタイ24・29)と言われました。これはエルサレムの陥落、神殿の崩壊を示唆した黙示文学的表現でしょう(マルコ13・24、ルカ21・25〜26も参照)。従ってフィギュラティブに解釈すべきですが、神の国が力をもつてくる(マルコ9・1)とか、来るべきさばきをいかに逃れるかを伝えている聖書箇所(マルコ13・14〜23)は、リテラルに読むべきでしょう。ほとんどのキリスト者は、イテサロニケ4・16〜17は、キリストの再臨とキリスト者の空中擡挙を教えていると思っっていますが、そのようなリテラルな解釈は間違っています。この箇所は、角笛の音とともにシナイ山から十戒を携えて降りてきたモーセ(出エジプト19・16〜25)と、天の雲に乗って来られるという人の子(ダニエル7・13〜14)と、ローマ市民(退役ローマ軍人なども含む)がローマ皇帝の植民都市を訪問する時に

は門の外にまで出迎えた光景(ピリピ3・20〜21)の3つを組み合わせた「フィギュラティブな表現」です。ピリピ3・20の「おいでになる(パルシマ)」は、旧約聖書に由来する言葉ではなく、ローマ皇帝がピリピのような植民都市を訪れる際に使われた言葉です。空中擡挙を意味しているわけではありません。この表現は「フィギュラティブ」とも「リテラル」とも言えるわけで、簡単に一方だけで割り切ってはいけません。

保守派のクリスチャンは、旧約聖書と新約聖書を区別しないで読む傾向が強くなります。両方とも神の言葉であるという前提が強いので、両者の違いを無視して解釈してしまうわけですが。その結果、奴隸制度、人種差別、死刑制度、繁栄の福音などを支持する傾向があります。さらに、現代のイスラエル国家の成立を聖書預言の成就と捉えたり、アメリカの成立と形成を「新しい出エジプト」と理解したり、聖書中の規則の一部をそのまま現代の生活にあてはめたりします。これらは聖書の時代的な背景とテキストの文脈を無視した結果起こる事です。一方、プロテスタント主流派のリベラルグループは、合理的理性によって信仰の世界をすべて割りきり、客観性と中立性を主張します。神の介入や奇跡的な出来事はあり得ないという前提で聖書の歴史を理解します。その結果、信仰もすべては合理主義の範囲内のもに限定されます。聖書の文化は現代には通じないという「文化的相対主義」に陥り、確かなものは何も無いことになります。すべての出来事は、「一般化された道徳」を教えるために記されたことになります。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

14 中澤啓介

7. 物語とは何か

聖書は「神の愛の物語」です。「物語」を意味する言葉は、英語ではストーリー(story)とナラティブ(narrative)の2つがあります。「ストーリー」は、物語を生み出した出来事そのものを強く意識するときに使われます。「ナラティブ」とは、ストーリーに特別な意味を見いだして伝えようとするときの表現です。2つの言葉は常にはっきり区別して使われているわけではありませんが、聖書の物語一に対して両語とも使われます。しかし、聖書は歴史的に起こった出来事に関する情報を提供しているというより、その出来事を通して神が人々に伝えようとしたメッセージを記しているのですから、「ナラティブ」の方が適切でしょう。

この世界には、先祖代々伝えられてきた物語(ナラティブ)がたくさんあります。その物語には、普通「伝承」とか「伝説」という言葉が使われます。その内容は多岐にわたり、人々が子孫に伝えたかったメッセージが象徴的表現で表されています。その共同体の中では、誰でもがその伝承を好み、父から子、子から孫、孫から曾孫へと誇りをもって伝え続けました。クリスチャンも同様で、自分たちに伝えられた「伝承」に特別の関心をもっています。この世界と人間の生命すべては神からの賜物であると説く「ユダヤ・キリスト教の伝承」です。そこには、正しい人ノア、信仰の人アブラハム、屈従を強いられたヨセフ、勇敢な指導

第2章 聖書について 神からの豊かなメッセージを読み取る

者モーセなど、信仰の勇者たちの話(ストーリー)で満ちています。世界の創造者なる神が、彼らをどのように召され、導き育てられたかが明らかにされています。

物語には筋骨き(bone)があります。平穩な日常生活の中で突然思いがけない出来事が起こり、様々な経過をたどりながら最終的に解決されていくという展開をたどります。私たちは、そのような物語が大好きです。私たち自身の生活が緊張に満ちたものであり、その解決を求め探っているからです。聖書には、喜劇もあれば悲劇もあります。叙事詩もあればロマンスもあります。その物語は、読む人々をハラハラ・ドキドキさせながら、直面している自分の問題に真正面から対峙させます。神からの解決の道を探めようという思いに導くのです。

むろん、聖書の話は楽しいものばかりではありません。私には3歳の孫がいます。彼は、イエスが話された譬え話を教会で聞き、「自分がだいたいしていた人が殺されてしまったから、他のみんなを殺してしまおうなんて……」と絶句したことがあります。パウロは「昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれた(ローマ15・4)とか、「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするため(1コリント10・11)だと述べています。確かに聖書には、ダニエルと彼の友人たちのように、異教のプレッシャーの中で勇敢に神

を信じて歩むような模範的な実例もたくさん出てきます。しかし、いつでもそのような話ばかりとは限りません。ノアは洪水後に酒を飲んで醜態を露呈したし、アブラハムは妻サラを妹と偽って自分だけが生き延びようとしてしました。ヨセフは言わなくてもよい夢の話や兄弟たちに言いふらし、モーセは神に不平をつぶやいて目的地に到達できませませんでした。後の教会において「聖母」と言われるようになったマリヤさえ、自分の息子から厳しい叱責を受けました。聖書は、神と世界の狭間で失敗や苦悩を経験した人々の話で満ちています。

クリスチャンは誰でも、エリヤの信仰を模範に生きたいと願います。しかしエリヤは、イスラエルの民に向かって、「バアルの預言者たちを捕らえよ。ひとりのものがすな(1列王18・40)と命じ、キシヨン川でバアルの預言者たちを処刑してしまいます。エリヤには、自分をからかった子どもたちをならみつけ、「主の名によって彼らをのろつた。すると、森の中から二頭の雌熊が出て来て、彼らのうち、四十二人の子どもをかき裂いた(2列王2・24)という話が伝えられています。このような物語をクリスチャンの見習うべき模範だと考える人はいないでしょう。聖書の物語を読むときには、神の道と人の働きに対する賢明な理解力が必要です。物語のあらすじを一言ずつ丁寧に理解し、物語の言わんとする意図を汲み取り、そこから豊かな想像力を働かせることが大切です。そのような努力をしつつ聖書を読み進めるなら、聖書の物語はすべて、クリスチャンにとって神からの豊かなメッセージとなります。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

15 中澤啓介

8. 聖書物語のゴール

「物語(ストーリー)」にはゴールがあり、すべての出来事はそのゴールに向かって展開します。では、聖書の物語のゴールは何でしょうか。それを理解するため、まず聖書全体の流れを確認しておきましょう。

聖書物語は5幕から構成され、第1幕で、神はこの世界を創造され、すべてをよとされました。第2幕では、人間は神とともにこの世界を支配するよう期待されたのですが、神に反逆してその使命遂行に失敗しました。第3幕では、神はそのような人間とこの世界を贖うため、イスラエルを選び育てました。第4幕では、そのイスラエルからイエスが登場し、人間とこの世界の贖いを成し遂げました。そして最後の5幕では、神はその贖いに人々とこの世界を招き、聖霊を注いで新創造の業を進めていきます。

この5幕目は新約聖書が終わると同時に終わったわけではありません。神は今もすべての人々に、キリストの贖いに応答するよう招いておられます。神の招きに応じた人々は、キリストとともにこの世界を治め、「キリストの贖い(福音)」を全世界に伝え、神の民を拡大していく特権にあずかっています。キリストが統治する新しい世界は「神の国」と呼ばれ、その民は「教会」と呼ばれています。クリスチャンである「あなた」そして「私」は、創造時に期待され、墮落によって失われた「人間としての使命」を回復

第2章 聖書について クリスチャンは神の国の完成へと労する

され、神の民としての特権にあずかっています。現代のクリスチャン一人ひとりには、聖書の物語の5幕目の主役を演じているということです。この5幕は、やがてキリストが再臨し、今の世界を「新しい天と新しい地」に再創造される時をもって終わります。その新創造の世界において、クリスチャンは復活の体にあずかり、「王」としてキリストとともに永遠に治めます。これが聖書の物語の最終ゴールです。その後、新しい神の物語が始まることでしょう。

多くの人は、旧約聖書と新約聖書は別の物語を語っているとの先入観をもっています。しかし、それは間違いです。旧約聖書は一つの物語の前半(1幕から5幕)であり、新約聖書は後半(4幕と5幕)です。前者において問題が生じてその解決策が準備され、後者でその問題がすばらしい形で最終したことを伝えます。むしろ両者には違いがありません。前者では、イスラエル民族、周辺国家との戦い、律法、神殿礼拝、祭儀制度、割礼、安息日、祭り、預言者の活動などがキーワードです。後者では、イエス、神の国、十字架と復活、聖霊の注ぎ、教会の誕生、クリスチャンの歩み、再臨、新天地などが主要テーマになります。クリスチャンは、聖書を学び、広め、実践していく人々と考えられています。しかし、それだけではありません。クリスチャンは、聖霊によってキリストとともに神の国の完成に向かって労する神の民であり、物語の最終局面を書き

続けています。5幕の主役を務めているクリスチャンは、イエスと使徒たちの教えに基づき、自分の責務を果たしています。4幕までの登場人物から多くのことを学びますが、そのまま直接的に模倣はしません。舞台が違い、物語の流れは大きく進展しているのですから。5幕において今日まで大きな動きを展開してきたウェスレーやホイットフィールド、ルターやアキナスなどの信仰の先達者たちから、現代の教会は多くのことを学ぶことができます。教会は、いつの時代でも、自分たちの時代に起こった種々の問題に取り組み、神の国を広めてきました。その結果、それぞれの時代の教会は様々な伝統を形成し、次世代に貴重な財産を残してきました。

今日の教会は、その遺産を継承しながら、現代のポストモダンの社会において神の国の動きを前進させています。受け継いだ伝統を無視しては何もできません。いってしまえば、その伝統は絶えず新約聖書のチェックを受けねばなりません。福音派のクリスチャンは、継承された伝統を適切に修正、発展させていく責務を負っています。神は「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたに神である主を愛せよ」(マタイ22・37)と言われています。「知力を尽くし」は、別の箇所では「知性を尽くし」(マルコ12・30、ルカ10・27)とか「知恵を尽くし」(マルコ12・33)と表現されています。神は、私たちが操る人形のようなことを望んではいません。教会は与えられた知恵を用いて、物語のゴールを目指し完走する必要があります。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

9. 物語を理解するために

多くのクリスチャンは、自分もっている世界観(通常、意識することはほとんどない)から聖書を読んでいます。しかしそれは、できる限り避けなければなりません。新約聖書の各書物は、第二神殿時代のユダヤ教の世界観をよく知って理解する必要があります。当時の世界観は、現代のクリスチャンがもっている世界観とはずいぶん違います。世界観は、時の流れの中で集団において形成されるものです。個人が発見したり作ったりするものではありません。世界観はそれ以前の世界観に比べ一度に全く変わってしまうものではなく、非連続性とともに連続性があります。

聖書の物語の意味を十分に理解するには、聖書本文(テキスト)の背景となっている世界観をよく知らねばなりません。普通は物語自身がその世界観を語っているのですが、それがはつきりしないときもあります。その場合は、①現実の世界をどのように理解しているのか、②キーになる象徴的な表現は何か、③主人公は何者か、どこにいるのか、何が悪なのか、その解決策は何か、いつの時代のことなのか、と5つ5つの質問にどのような答えが引き出せるのか、④どのような実践・行動を期待しているのか、などの問いを、テキストに投げかけてみて下さい。すると、そのテキスト(主人公)が主張している世界観は、その物語の著者(聖書記者)の世界観や読者である私たちの世界

観とは違っていることに気づくでしょう。むしろ、その世界観が他の世界観よりも優れているわけではありません。

聖書中のある物語の世界観を理解するためには、その物語を伝えるテキストを徹底的に分析する必要があります。そのためには、A・J・クレイマスの物語構造及び物語分析の研究は役立ちます。彼は、物語の分析はテキストが言うようにしている意味に焦点を当ててではなく、物語の筋書きがどのように展開し、それが読者にどのような効果をもたらしているのかに注目しなければならぬ、と述べています。多くのクリスチャンは、福音書の物語に親しんでいるため、読む前から理解しているつもりになっています。そのような人々には、クレイマスの方法は特別有効です。ただし、彼の議論は歴史を否定的にとらえる傾向が強いので、その点については気をつけねばなりません。

彼の物語の分析方法は、パウロの手紙などを含め、聖書のほとんどの物語において有効です。といっても、すべてのテキストに当てはまるというわけでもありません。福音書の場合には、1つの物語に2つ以上の物語が含まれていることもあるので、木を見て森を見ないことにならないよう、注意せねばなりません。小さな物語の一つひとつのユニットを丁寧に分析し、それを統合していく作業が求められます。そのような場合でも、それが物語批評であるかぎり、物語を土台にし、そこから神学的に考察することが肝

要です。その考察は独りよがりなものではなく、多くの批評の目にさらされ、検証作業に耐えられるものでなければなりません。神学から出発して物語に帰っていくようなことはしてはいけません。それは順序が逆です。

聖書の物語を十分に理解するためには、テキストの世界観だけでなく物語全体の歴史的・文学的・神学的な考察が必要です。特に歴史的な問題については、きちんと扱われねばなりません。どのような歴史的な文書も、著者が意味あると思ったもののみを抽出した「選択された歴史」です。何らかの歴史的な出来事に基づいてはいませんが、「生の歴史」ではなく「解釈された歴史」です。古代の文筆家は、今日では神話とされる「ファンタジー」や「伝説」なども歴史として描きました。そういう時代の文書は歴史的・文学的な研究だけでは不十分で、神学的考察が欠かせません。

聖書の物語についても同様です。聖書全体のモチーフ、シンボルの意味、現代へのメッセージ、実践にあたっての問題などについて、神学的な考察をせねばなりません。しかも、聖書は神の権威に基づいて記され、神からの権威あるメッセージが込められています。神学的な洞察と解釈は不可欠です。その洞察と解釈は、歴史的、文学的な検証作業をバイパスしたものであってはなりません。それは、突拍子もない客観性を欠いたものでなく、あらゆる角度からの批評を受け、修正され、皆で築きあげられていくべきものです。もしさらによいものが発見されたら、そちらを採用していくという「批判的現実主義」の姿勢が大切です。

(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

伝道・牧会を考える

第2章 聖書について 書かれた時代の世界観を知って理解する

N・T・ライトの神学とは

17 中澤啓介

10. 福音派の問題

プロテスタント正統派は、信仰の土台を教会の伝承や人間の理性ではなく聖書に置くべきである、と主張してきました。これは、カトリック教会が自分たちの伝承や制度によって、あるいは啓蒙主義の落として子である自由主義キリスト教が合理的理性によって、「聖書の福音」を曖昧にしたことに対する反動でした。宗教改革者およびその後継者たちは、「聖書のみ」を旗印に、「聖書の福音」に立ち返ろうとしたのです。このプロテスタント運動は、啓蒙主義および産業革命以降の西欧近代社会に瞬く間に広がり、19世紀以降現代に至るまでのキリスト教に多大な影響を与えました。ところが、この「聖書にのみ権威を置く」というプロテスタント信仰の在り方は、20世紀前半の根本主義者や後半の福音派の教会に幾つかの問題を残しました。

その一つは、神の権威を「神ご自身」にではなく、「神が啓示された聖書」に帰してしまっただけです。権威は、本来神にのみ属します。その神は、神ご自身の権威のある部分を聖書の中に投資 (invest) されました。従って聖書の権威は神の権威のごく一部に過ぎません。神は万物の創造者、全被造物の支配者、人間を救出される贖い主です。聖書は「贖い主なる神」が「贖われるべき人間」に「神の贖いの業」を明らかにした文書です。聖書は神ご自身がなされた贖いの出来事を伝えているがゆえに、権威があるのです。

第2章 聖書について 「聖書にのみ権威を置く」ゆえの問題

一番目は、「神の権威」と「人間社会に見られる権威」の違いを無視して、「聖書の権威」を論じていることです。この世の権威は、基本的に「専制君主的な権威」です。それは政治、ビジネス、学術の世界などさまざまな組織に見られるもので、政治的な権力者、会社の社長、大学の理事長、警察や裁判所その他すべての組織のトップがもっているものです。上意下達の命令権であり、従わなければ罰が降るといふ権威 (権力) です。ところが、神の権威は全く異なり、他者の益のために「仕える権威」です (マルコ10:45)。「聖書は神の権威を帯びている」といふとき、人間社会に見られる権威を想定して議論すると、混乱が生じます。

根本主義者たちの間で起った主張でしたが、20世紀半ばには福音派の教会で広まりました。そして20世紀後半の福音派においては、無誤性 (infallibility) 問題が大きな論争になり、世界中の福音派の教会を巻き込むほどの大きな影響を与えました。私は多くの神学生を教えてきました。その経験からいえば、福音派的で保守的な教会出身の献身者ほど自分たちの教会の主張に確信をもち、他の意見には耳をかさない傾向をもっています。彼らは聖書を重んじ、よく学んでいますが、独りよがりなところがあり、自分たちの教会のみが永遠の真理を教えていると信じて疑いません。聖書に忠実であると自認しながら規範的なものを過去の出来事を探したり、自分の信仰体験をより重要視したり、終末の出来事に過度の期待を寄せ、傾向が強くなります。

三番目は、聖書をキリスト教信仰の教理体系を構築するための資料として扱っていることです。福音派は、聖書を「世界のあらゆる疑問に回答してくれる書物」であるかのように考えています。その結果、聖書を自分流に解釈し、信仰、宗教、道徳、生活、世界観、歴史観などに関する教理体系を作りあげました。その体系は仔細な点にまで聖句によって固められているため、聖書を読めば読むほど自分たちがその真理に到達していることを確信するようになり、その結果、小さな教理的違いを認めず、仲間割れを繰り返すようになりました。四番目は、聖書は神の権威を帯びている以上、「間違はない」と考えるグループが登場したことです。この考えは元々20世紀初頭のアメリカの

問題を抱え込むことになったのでしょうか。それは、聖書がどのような性格の書物であるかを見落としたことにあります。聖書は物語である以上、聖書の権威を単純に論じてはなりません。クリスチャンたちはそれぞれが皆、違った背景で、聖書の物語を通して神からのメッセージを聞いています。福音派はそのことに気づかねばなりません。イスラエルの預言者ミカヤは、祈りの中で神のみ心を知り、アハブ王に神のみ心を告げました。ところが、偽預言者ゼデキヤはミカヤの頬をなぐり、このようにして、主の霊が私を離れて行き、おまえに語ったというのか」と詰問しました (1列王22:11)。福音派の中にゼデキヤと同じような傾向があることを認めねばなりません。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

伝道・牧会を考える

N・T・ライトの神学とは

18 中澤啓介

11. 聖書と伝承の関係

福音派は、自分たちの聖書観は高いと自負しています。しかし私には、福音派の教会では、聖書が本来あるべき位置に置かれているように見えません。むしろ、その扱いは低過ぎるようさえ思われます。聖書を伝承と理性に对立させ、聖書をより重要視していることは確かでしょう。福音派がカトリックの伝承を無視し、自由主義者の合理的理性を否定し、聖書にのみ闡こうとしている点はすばらしいことです。ところが福音派は、自分たちの教派が作り上げた教理を「永遠の真理」で絶対守り続けなければならぬという伝承であるように固執しています。その教理は、単純素朴な理性的働きによって聖書を読み、合理的に体系化して構築したものに過ぎないことを忘れていきます。この観点から言えば、福音派もまた伝承と理性の呪縛にとらわれていると言わねばなりません。

宗教改革者たちは、ローマカトリックの世界における比喩的な解釈を否定するため、聖書を文字どおりに解釈すべきだと主張しました。比喩的解釈を用いれば、聖書が述べていないことをあたかも聖書が教えているかのように説き明かすことは簡単です。カトリックがもつ独自の教義は、基本的にそのようにして組み立てられたものです。宗教改革者たちは、そのような教義に徹底的に反論するため、パウロの手紙(特に、ローマ人への手紙やガラテヤ人への手紙)を一語一語丁寧に釈義し、

第2章 聖書について 教派が作り上げた伝承と理性の呪縛

聖書が明らかにしている「福音」を鮮明にしました。パウロは、教会の信徒たちが直面している問題を正しく理解し解決するため、聖書の導きを受けつつこれらの手紙をしたためました。従って、パウロの手紙を厳密に釈義し正確に理解することは「神のみ心」を正しく知る第一歩です。しかし、そのような作業をもって、神がなされたすべての御業と神が知らせようとしている御心を理解したと考えるのは楽観的過ぎます。

宗教改革を継承していると自認する福音派は、自分たちの教理と道徳、教会の在り方を聖書そのものから導き出していると言っています。そこにはいかなる伝承や理性も入る余地はないと確信しています。ところが、同じ聖書本文を読みながら、違う見解に到達している人々はたくさんいます。福音派のクリスチャンたちは、そのような人々に出会うと、彼らは聖書をきちんと読んでいないので神の御心を誤解していると批判します。にもかかわらず、自分たちの教派的な教理を無意識のうちを持ち込んで聖書を読んでいることには気づいていません。たとえ気づいたとしても、その教理が生まれた背景や論理構造(ある時代を背景にして使われた聖書の言葉や抽象的な神学的概念にまとめ、それを二つの教理にまで構築していく作業のこと)を、批判的に検証しなければならぬとは考えていません。

福音派の教会では、「自分たちは、聖書から正しい教理、道徳、教会の在り方を導き出

している。そこから外れるようなことがあってはならないし、外れていく仲間がいれば批判しなければならぬ。自分たちはそのことを次世代に継承していく責任を負っており、その努力を怠ってはならない」という伝承が、暗黙の了解になっていきます。しかし聖書は、守るべき規則が集められているわけでも、信すべき信条がリストアップされているわけでもありません。信仰の歩みでぶつかる様々な疑問や難問に対し、すべての答えを用意しているわけでもないので。新約聖書の記者たちもまた、旧約聖書をそのような観点から読んではいけません。テモテへの手紙第二や、ペテロの手紙第二などの書簡は、次世代のことを強く意識して書かれています。けれどもそれは、福音の核心部分に関するもので、福音派が問題にしているような特殊な問題ではありません。

現代の福音派の教会に所属するクリスチャンの多くは、聖書を「信仰生活のマニュアル」であるかのような読み方をしています。聖書を、日々のデポジション、カルヴァンのキリスト教綱要、ウェストミンスター信仰告白の教え、4つの霊的法則などを教えている書物として読んでいます。創世記から黙示録に至るまでのすべての書物は、抽象的で命題的な記述によって書かれたものではなく、ある特定の時代の特定の神の民に、具体的な必要に応じて記された物語形式の啓示的な書物です。この点を忘れて、聖書を読んではいけません。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

19 中澤啓介

12. 聖書批評学に対して

聖書批評学は18世紀後半に始まりました。それは、聖書本文が今日の形になる以前に存在したと考えられる「資料の分析」からスタートしました(資料批評)。20世紀初頭には、その個々の資料がどのような「生活の座」を背景にして作られ伝承されたのかという問題が論じられるようになりました(様式史批評)。1960年代になると、それらの資料が今日のよつな文書にまとめられた「編纂者の神学や意図」が問題とされます(編集史批評)。さらに70年代後半には、聖書66巻全体が「キリスト教の正典」として独自の書物であることが強調されるようになります(正典批評)。そして20世紀終わりの90年代には、聖書全体は「神の贖いの物語」として読まれるべきだという認識が広まります(物語批評)。

聖書批評学は緻密な学問的方法論によって進められているように見えたため、科学的で客観的な文献学であるかのように評価されてきました。ところが最近100年間に発見された古代中近東や1世紀前後のユダヤ教の文献は、従来の方法論とその研究成果に大きな疑問を投げかけました。批評学は特定の哲学的前提や歴史観に左右されていることが鮮明になってきたのです。例えば、聖書批評学者たちは、病人を癒やし、奇跡を行い、復活して神の子と宣言されるといふイエス像は初めからあり得ず、初代教会の信仰が作り出したものであると公言し

第2章 聖書について 最近の批評学の健全な研究成果

てははかりません。このことは、新約学者フルトマンとその信徒たちが「歴史のイエスと信仰のキリスト」を区別し、「聖書の意味は時空を超えた信仰に対し実存的に決断することにある」と主張したことに端的に表れています。20世紀後半にアメリカで盛んになった「イエスセミナー」の研究者たちは、イエスが語られた言葉や行動から超自然的な要素をすべて取り除き、色分けによって区別した福音書(トマス福音書を含めた5つの福音書)を出版しました。

聖書批評学は、超自然的な事柄を認めず、キリスト教信仰を特別扱いすることもなく、聖書は空想にあふれたものという前提で発展してきました。福音派は、この種の学問を受け入れることに長い間拒否反応を示してきました。むしろそれは、賢明なことでした。現在の私たちは、100年前に比べ、はるかに優れ信頼できるリソースを利用できます。その結果、批評学の矛盾を暴くことができるようになりました。といつても、批評学以前の前近代的な聖書の読み方に戻ればよいというわけではありません。聖書が言及している時代の歴史的状況は日ごとに明らかになりつつあります。しかも、そのことによって批評学自身が大きく変わってきています。闇雲に批評学を批判することは慎まねばなりません。

実際、最近の福音派の聖書学者は、聖書批評学を不信仰者の学問と断せず、信仰者にとつても有益な情報が多数存在していることを認めるよう

になっています。これまでも耳にしたことのない事柄も、聞きたくないと思つてきた問題も、謙虚に耳を傾け慎重に取り扱うようになってきています。オルガンで曲を奏するとき、主旋律の和声の部分だけではとても単調な音楽になってしまう。足でペダルを踏み、曲の幅を大きく広げる必要があります。もし旋律だけなら、表面的で薄っぺらな演奏で終わるでしょう。福音派の敬虔なクリスチャンは、これまで旋律部分だけにしか興味を示していませんでした。ペダルによって広げられる部分に当たる聖書批評学を正當に評価してこなかったため、基本的な土台を欠いた、歴史の深みをもたない、貧弱な聖書理解に留まっていた。

「聖書が真実であることを証明すること」と「聖書の權威のもので生きる」との間には大きな違いがあります。前者は、今まで真実だと思ってきたことに安堵して聖書を読み、新規のものを期待することはありません。後者では、これまで聞いたことのない未知の事柄にも喜んで胸襟を開きます。もし後者の姿勢を取るなら、最近発見された多くの資料によって、従来の批評学が到達した結論は単なる憶測に過ぎず、信頼に値しないことを確信するでしょう。と同時に、最近の批評学が論じている二つの問題の重要性に気づき、真摯に検証作業をする必要に迫られるはずで

す。実際、最近の福音派の聖書理解は批評学の健全な研究成果を受け入れ、従来とは比べ物にならない進歩を遂げています。特に、聖書を物語として読むスタンスと技法は、今後の福音派の聖書理解に大きな影響を与えることになるでしょう(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

伝道・牧会を考える

N・T・ライトの神学とは

20 中澤啓介

13. 福音の真理に立つ

現代のクリスチャンは、ポストモダンの風潮の中に生きることを余儀なくされています。ポストモダンは、「宗教や霊的な事柄は現実逃避的なもので、子どもじみた迷信や誤解から生じている。組織化され制度化された教会は偽善に満ち、教会が説く教義体系や神学は真理ではなく、すべての言明を疑わねばならぬ」と主張します。この思潮は、今の社会全体を覆っています。クリスチャンは、このような思潮に対した右往左往するだけであってはなりません。ポストモダン社会をよく理解しつつ、もう一度福音の光に照らされた「真理」を回復し、ポストモダンの時代思潮に勇敢に立ち向かわねばなりません。

イエスは、パリサイ人の律法主義を批判して「神の国」を明らかにしました。パウロは、ユダヤ教の儀式制度を否定して信仰義認を説きました。この世界とそこに生きる人類は、神の愛の中に存在しています。完全に崩壊してしまつてはなりません。神がもっているこの世界と人類に対する期待は、客観的とか主観的と言われるいわゆる「知識」ではありません。むしろ、愛において愛を通して実現していく「真理」そのものです。クリスチャンは、この聖書が語っている「真理」を明らかにし、宣べ伝える責務を負っています。

「真理」は聖書では「知識」とか「王国」のようなボビュラーなテーマではありません。

第2章 聖書について ポストモダンの時代思潮に立ち向かう

ん。パウロはしばしば「真理」に言及しますが、一般に言われる「知的な真実の知識」という意味ではありません。「神の真理」(ローマ3・7、15・8)、「福音の真理」(ガラテヤ2・5、14、コロサイ1・5)という表現から明らかかなように、パウロにとっての「真理」は、神がキリストの贖いの業においてユダヤ人も異邦人もなく全人類を神と和解させた出来事を指しています。

共観福音書は、イエスが「真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもほばからない方(マタイ22・16)と述べています(マルコ12・14、ルカ20・21)が、何といつても真理を強調しているのはヨハネの福音書です。ヨハネは、イエスについて「恵みとまこと(1・14、1・17)に満ちている方と述べています。バプテスマのヨハネが証言した「真理」(5・33)、クリスチャンを自由にする「真理」(8・32)は、イエスが自身です。ヨハネは、イエスが語られた言葉を真理としているだけでなく、イエスが自身「真理そのものである」と証言しています(14・6)。

さらにヨハネは、もう一つ別の「真理」を明らかにしています。それは、「真理の御霊」(14・17、15・26、16・13)です。イエスとともに、神の御霊もまた「真理」なのです。この世は、神の御霊について理解できません。しかしヨハネは、「真理の御霊」は父から遣わされ、クリスチャンの内に住み(14・17)、イエスを証し(15・26)、クリスチャンを真理に導き入

れ、やがて起るついでに、このことを示す方である(16・13)と述べています。

さらに、イエスとピラトの会話を通じ、読者に「真理」について問いかけます。イエスは、「わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います」と言われました。するとピラトは、「真理とは何ですか」と問い返します(18・37、38)。ここでピラト自身は「真理」をどのようなものとして捉えていたのでしょうか。おそらく、皇帝を頂点とするローマの支配体制、それを統括するローマ法、さらに地中海一帯に広がるローマの秩序などが念頭にあったでしょう。それに対しイエスは、「真理をあかすするために」この世に生まれてきたと言われました。ここで言及されている「真理」とは、どのようなものだったのでしょうか。イエスが語られている文脈から、おそらく、神が自身が存在すること、神の創造のご計画とその御業、神が人類の歩みを支配していること、イエスを通して神の贖いのご計画が実現されたこと、御霊の派遣によって神の国の業が進められていることなどを想定していたでしょう。人間の知的な作業で理解される抽象的、概念的な真理や、教義的な真理でなかったことだけは確かです。

ポストモダンの社会に生きるクリスチャンは、この世が説く「相対的な真理」を問題にしません。教会が説く「キリスト教教義の真理性」にこだわる必要もありません。神がなされた贖いの業全体に関わる「絶対的な真理」を信じ、その真理に自分の全存在をかけたいくのです。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

21 中澤啓介

14 寛容の精神で

ポストモダン社会とは、すべてに懐疑的であり、真理は相対的なものであると見なします。そのような時代思潮の中で、クリスチャンが聖書の伝える「神の福音の絶対的な真理性」を主張するとき、気をつけねばならないことがあります。それは「寛容の精神」で聖書を読み、聖書を解釈し、聖書を告白することです。真理と寛容は車の両輪のように大切です。

2001年9月11日の惨事は、ポストモタンを象徴する典型的な出来事でした。以来、世界のどの場所であっても日常生活の平和は脅かされ、戦争に巻き込まれる危険性にさらされています。宗教は、どのような宗教であっても、自分たちだけが真理を保有し、他はすべて否定するという不寛容な精神を特質にしています。その点は、キリスト教もまた変わりません。クリスチャンは、根本主義に堕したり、世俗主義に退却したりしないよう気をつけなければなりません。他宗教との平和共存の在り方を探らねばなりません。さらにクリスチャンは、どのような教派に属していても、教派の違いを乗り越え、神の国が一つであること」を世界に示す責任があります。第5幕の主役を演じている教会が、内部のほろほろであっては、聖書物語の最終ゴールは遠のいていくばかりです。「福音の真理」を高く掲げて生きると同時に、寛容な精神をもって賢く振る舞うことが求められています。

第2章 聖書について 寛容のない「愛」は聖書の愛ではない

近代のプロテスタント正統派は、キリスト教リベラリズムが合理的な考えを強調し始めた途端、それはわざによる救いを説いていると誤解し、聖書解釈、教理、倫理的な課題において感情的に反応して非知性的になってしまいました。さらに、中世の教会の歩みすべてを無意味なものに見なし、いっさいを否定してしまいました。従って、宗教改革からいきなりアウクスティヌスに飛び、アウクスティヌスから聖書時代に直行します。啓蒙主義思想も、カトリックスコラ哲学も、古代の東方神学も、皆バイパスしてしまいました。しかし、現実の歴史は線であって、点ではありません。常にそれまでのものを継承しつつ、その上に新しいものを付け加えてきました。ある時点ですべてを一扫して再出発することなく、実際にはあり得ません。

2013年に辞任した教皇ベネディクト16世は、全世界の司教たちへ送った最初の回勅において、福音の中心テーマは「愛」だと述べました。そのとおりです。ところがポストモダンの社会では、愛はセンチメンタルなものに成り下がり、権力、性、富に屈服した何の力もない幻想的なものと見なされています。しかし、聖書が説く「愛」はそのようなものではありません。パウロは、「愛は寛容であり」(1コリント13・4)と述べています。愛と寛容は全く同じではありませんが、違うものでもありません。寛容さのない愛は存在しないのです。ポストモダンの社会において

最も必要とされているのは、「寛容を含む愛」なのです。この寛容の精神は、すべての物事の背後に神の支配があり、神の秩序が貫かれているという信仰に立つとき、生まれてくるものです。

パウロは、「キリストの柔和と寛容をもって、あなたがたにお勧めします」(1コリント10・1)、「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い」(エペソ4・2)、「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい」(リピ4・5)、「忍耐と寛容を尽くし」(コロサイ1・11)、「あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい」(コロサイ3・12)、「すべての人に対して寛容でありなさい」(1テサロニケ5・14)などと、寛容について述べています。クリスチャンが、他の人と生きた適切な関係を築くためには、相手のことばに耳を傾け、関心を払い続ける寛容が必要で、福音派のあるクリスチャンたちと会話をしているとき、しばしば耳の聞こえない人と会話をしているのではないかと、錯覚に陥ります。異なった意見には決して耳をかそうとしない不寛容さを、しっかりと身に着けているからです。これは、福音派が伝統的に継承している欠点の一つです。しかもこの100年間、少しも変わっていません。「寛容」という言葉は今日ほとんど死語になっています。意味のない単なる愛のパロディへんにしか聞こえませんが、しかし、寛容のない「愛」は、聖書の愛ではありません。クリスチャンは、どのような人や事柄であっても、神の御霊が私たちの内に形作ってくださる寛容さをもって接していくのです。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

22 中澤啓介

これまでライトが「時代思潮をこのようにとらえ」(第一章)、「聖書についてこのように考えているのか」(第二章)を紹介してきました。ライトが、ポストモダンという現代思潮の真ったた中で、聖書を「神の物語」として理解していることを明らかにするためでした。これらはいずれもライト神学を特徴づけるものですが、ライト神学にはさらにもう一つの特色があります。それは、神学を展開するにあたっての「神学プロレゴメナ」(神学構築のための方法序説)です。この問題について、これから14回にわたって紹介しましょう。

皆さんは、自然科学系や社会科学系あるいは人文科学系を問わず、その学問方法論は、学問である限り確立していると思われるでしょう。確かにある分野では、100年あるいは200年の歳月をかけ、その学問方法論はほぼ確立されてきました。しかし、最先端の研究分野ではしばしば学問のパラダイムシフトが求められ、その方法論も大きく変わることが要求されます。キリスト教神学においては、教会史を背景にした教派的な信仰基準、教理、聖書解釈などは、パラダイムシフトの起こる余地はほとんどありません。しかし、時代思潮に心えるような(耐えられるような)神学や聖書理解を模索しようとするとき、従来の方法論では間に合わないのが普通です。

ライトは歴史的・正統的キリスト教信仰を忠実に守り続けている福音主義者ですが、現代のポストモダンの思潮に心

第3章「神学プロレゴメナ」について ポストモダンの思潮に心え得る方法論

え得る神学を提供しようとする、懸命な努力を重ねています。長い教会史上において守られ続けてきた聖書解釈や過去200年間に発達した聖書批評学に行き詰まりを覚え、新しい道を模索しているのです。その体系は、ライトの名著『キリスト教の起源と神の問題』シリーズ(全6巻の内4巻目まで既刊)という学術書に詳しく論じられています。

今年1月、その名著の1冊目『新約聖書と神の民』(上巻)(1992年出版)が日本語に翻訳され、ライトの神学方法論を日本語で読めるようになりました。この方法論については、主著のみならず、クリスチャン向けのポピュラーな書物においても随所でふれられています。ライト神学を理解する「鍵」だからです。むろん、この種の基礎的な事柄をバイパスしても、ライト神学を楽しむことは十分にできます。しかし、ライト神学を本格的に評価するには、この主著シリーズを徹底的に読みこなすことは不可欠です。表現が少々凝り過ぎるくらいがある、複雑な事柄を明快に割の切りすぎる、問題意識の広さは神学を超えている、などという批判も聞かれます。ですが、基本的には極めて分かりやすく書かれています。特にこの度の日本語訳のセンスは短く明快で、著者の意図がよく汲み取られ訳出されています。私も20年前サラッと読んだことはありましたが、この度改めて日本語で読み、ああ、こういうことが書いてあったのか」と初めて読むような感動を味わいました。

ライトは、自らの学問的方法論を「批判的実在論」と呼んでいます。「批判的」という言葉から分かるように、ライト自身は、自らの学説を無批判に受け止め、追従するようなことを読者に求めてはいません。徹底してクリティカルに読み、自分が納得できるところを踏襲し、そうでない部分については納得できるくらいによいものを求めて葛藤してほしいと望んでいます。ポストモダンの最もよい理解者である神学者がポストモダンの真ったた中に生きるクリスチャンに語りかけているのですから、このような神学姿勢は当然のことです。ライト自身、次のように述べています。信奉者であれ批判者であれライトの書物に近づく者は皆、心に留めておくべき言葉です。

「私は、多くの点で失敗をし、間違いを犯してきました。学問の世界でも、私は間違っただけでないと断言できるわけではありません。私が誰かを傷つけたら、道を踏み外してしまったような場合は、その間違いに気づくことは難しくありません。しかし、学問の世界では、自分の間違いに気づくことはそれほど簡単なことではありません。私たちが皆、間違いを指摘されると自分の見解を変えずに批判的なコメントに対処する術を身に付けています。しかし私は、決してそのような対応をしたことは思っています。私は、自分の主張の中には必ず誤りが含まれているであろうと自覚しています。証拠の扱いの不適切さ、論理の運び方の矛盾、結論づける方法論などについて間違いを指摘されるなら、そのような批判にきちんと対峙し、真剣に反論する責任を負っています。このことは、学問の世界の生命線であり、不可欠なものです」

1. 素朴な実在論(実証主義)

人が物事をどのように知
 るのかという問題について
 は、いろいろな理論がありま
 す。その第一は「実証主義」
 (Positivism)です。この立
 場は、物質的な世界には客観
 的な真理が存在し、その真理
 は観測や計測などにより検証
 可能である、と主張します。
 検証不能なものについて語る
 ことはナンセンス、というこ
 とになります。啓蒙主義時代
 までは、人間はこの世界に起
 こるすべてのことを直接的に
 知ることができると考えてい
 ました。それは常識的な実証
 主義であり、「素朴な実在論」
 (Naïve Realism)とも呼ば
 れます。正しい科学的なプロ
 セスをとおし、五感を通じて
 ありのままの対象を観察する
 ことができ、正確に記述する
 ことができるという考え方で
 す。そこには自然科学的な問
 題に限らず、形而上学や神学
 的なテーマも含まれます。む
 ろん、このような分野につい
 ては検証する手立てはなく、
 プラトンが遙か昔に論じたよ
 うに、「知識」ではなく「信念」
 と言ってもよいものでしょ
 う。アルフレッド・エイヤー
 は、「無意味でナンセンスな信
 念」と論じていますが。

この実証主義は、啓蒙主義
 以降の20年にわたる支配的な
 考え方に位置づけられ、西欧
 の「近代合理主義」(モタニズ
 ム)と呼ばれます。この考え
 方は現代の哲学界では概ね捨
 て去られています。物理・
 化学など自然科学の分野では
 今なお健在です。科学哲学や
 言語学、人間学、社会学など

第3章「神学プロレゴメナ」について 神のような中立的な視点で観察？

の知識を通じ、自己認識に関
 する研究が長足の進歩を遂げ
 ているにもかかわらず、多く
 の科学者はいまだ「科学とは
 物事を客観的に観察すること」
 と信じて疑いません。実証主
 義によって強い確信が得られ
 ないものは主観主義か相対主
 義に属し、真に実在するもの
 ではないと主張します。

ところが、最近50年間に発
 達した様々な分野の研究世界
 では、このような「素朴な実
 在論」では間に合わず、しば
 しば機能不全に陥ってしまう
 ようになりました。その結果、
 「ポストモダン」(モタニズム
 の後に来るもの)といわれる
 思想がとって代わるようにな
 りました。実証主義は「人は
 神のような中立的視点で対象
 を客観的に観察できる」と主
 張してきましたが、このよう
 な考えは手厳しい批判にさら
 され、エイヤーを含む提唱者
 たちさえ、大幅な修正を迫
 られる事態になりました。そ
 れでも、実証主義は科学的な
 知識や技術の世界では有効で
 あり、大衆レベルの日常生活
 においても問題なく受け入れ
 られています。

この素朴な実在論は、人類
 が始まって以来今日に至るま
 で、人々がごく自然に身に着
 けてきたものです。ところが
 啓蒙主義は、素朴な実在論を
 拡大し、「人間理性は、(神、霊
 的あるいは精神的なものを含
 む)すべての世界を把握する
 ことができる」と考えました。
 こうして、聖書の啓示するキ
 リスト教信仰もまた人間理性
 の枠内で説明できるものと
 し、19世紀から20世紀に一世
 を風靡した「自由主義キリス

ト教」を誕生させたのです。
 では、自然科学ではなく、
 美学や倫理学の領域ではどう
 なるのでしょうか。ある神学
 者は「美しい」とか「よい」
 ということは、単に「私がそ
 う感じる、好きである」とか
 「私はそう思う、判断する」
 というレベルの事柄によって
 「偏見や気まぐれによって
 左右される問題」であると述
 べています。本当にそう断定
 してしまってもよいものでし
 ょうか。そのような神学者は、
 他の人々はある種の「前提」
 に囚われて聖書を読んでいる
 けれど、自分は聖書本文その
 ものを何の前提ももたず客観
 的に読んでいると断言しま
 す。果たしてその言明は真実
 なものでしょうか。

歴史上起こった問題を扱う
 のは、簡単ではありません。
 歴史とは「客観的な知識」で
 しょうか、それとも「主観的
 な知識」でしょうか。あるい
 は、このような二分法的な議
 論そのものが間違っているの
 でしょうか。シーサーが渡っ
 たのはルビコン川だと信じら
 れていますが、他の川であっ
 たかもしれません。ピリビで
 最初に教会を建てたのはパウ
 ロだと信じられています。が、
 他の誰かが教会を建て、パウ
 ロは後からそこに行っただけ
 ということもあり得ます。歴
 史的な出来事を「確実な証拠」
 によって証明することなど、
 普通はできません。

大抵の場合「絶対的に正し
 いとはいえないが、役立つな
 いほど不確実でもない」とい
 う程度の話で我慢しなければ
 なりません。ある新約聖書の
 批評家は、イエスの生涯や復
 活は「科学的」に証明するこ
 とは不可能だと主張します
 が、他の出来事についても似
 たり寄ったりであることを認
 識していません。(本稿は筆者
 によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

24 中澤啓介

2. 構造主義（現象論）

人間はこの世界があるがままの姿で正しく認識している、と考えるのが素朴な実在論です。伝統的なキリスト教神学は、この素朴な実在論を「この世界を創造された神が人間を、神のかたち」に造られた」という事実（創世1・26〜28）を根拠に受け止めてきました。古代ギリシャ哲学を基にした教父たちの哲学、中世のアリストテリコ・トミズムに沿ったスコラ哲学、近代の西欧合理主義思想は、基本的にこの立場の上に築かれました。素朴な実在論は18世紀後半から20世紀にかけて多くの批判にさらされましたが、今日でもなお人間行動の基底になっており、一般の人の日常生活では最も自然なものの見方です。

この素朴な実在論を脅かしたのは、より穏健な経験主義を経て発展した「現象論」（Phenomenalism）でした。現象主義者は、外部の対象物は見えているままに存在しており、すべて実証可能だと考えたのですが、現象論者は違う対応をしました。「これは正しい」という代わりに「私はこれが正しいと論じようと思う」という言い方をし、断定的で高慢な印象を与える表現を避け、ものごとを自分自身と関係づけながら穏当で謙虚な発言へと変えていきました。

ある人が望遠鏡で星を眺めているとします。もし実証主義者なら、自分は星そのものを見ていると思っており、望遠鏡のレンズを意識することはないでしょう。ところが、

第3章「神学プロレゴメナ」について 哲学的な前提に基づいた聖書理解

もし現象論者であれば、自分が見ているのはレンズが結んだ画像に過ぎず、星そのものではないと言ってしまう。素朴な実在論は、テキストの中で語られている出来事や対象は直接近づくことができると思いますが、現象論者には「確かなものは作者の視点だけ」ということになります。

ドイツの学者シュトレッカーは「山上の説教はイエスが語られたものではなく、マタイの神学を表明したものである。従って、イエスについて問題にするのではなく、マタイの心の中にあつた事柄を問わなければならない」と主張しています。このような考えは、テキストの釈義や歴史的な判断から出てくるものではなく、シュトレッカーがもつ哲学的な前提に基づいた聖書本文の理解に過ぎません。ここでは、素朴な実在論（イエスが語られた説教）から離れ、経験主義的な読み方（マタイの描いたイエスの印象）を通じて、現象論的な理解（マタイの心の中にあつた事柄）に到達します。シュトレッカーは19世紀の歴史にはほとんど興味はなく、20世紀後半の心理学的傾向や解釈を当然の前提にして論じています。

19世紀に現れた多くの詩人たちは、自分の心の内側にあるものや自分が抱いている感情を表現しようとしていました。そのため多くの文学研究者は、詩人の内面奥深くにあるものを発見することこそ文学批評の規範的な仕事である、と考えました。その結果、詩こそが全人類の思想の深層構造を知るための最善の手が

りになるという考えが、一般の人々にも浸透するようになりました。これは聖書の研究にも大きな影響を与えます。聖書記者の真意は聖書本文に深層構造的に隠されているはずであり、読者はそれを探り出さねばならない、とされます。テキストの字面を表面的になぞるようなものではなく、聖書本文を現在のテキストのよつな形に編纂した著者の心の深層に迫らねばならない、というのが、それは「構造主義（Structuralism）」の一種にはかたまりません。

構造主義的な聖書解釈は聖書記者の意図を読み取るために有効な側面が多々あり、北米を中心に多くの聖書学者の間で広まりました。しかし、著者の思想の深層構造を探ることで得られた「聖書本文の意味」を検証すると、疑問視しなければならぬ解釈がたくさん出てきます。読者の主観に依存するので、客観性の乏しいものが多くなることは避けられません。著者の意図を完全に理解する手段はないので、重要な点について理解不能であることが重要ではない、という判断を下してしまうことがしばしばあります。

この読者中心の純粹で主観的な聖書解釈を推し進めていくと、確かなことは何も言えなくなります。客観的な研究は不可能ということになり、熱烈な構造主義者であっても、自ら著した書物に関して、たとえ読者のオープンな解釈を受け入れても、自分の書いたテキストが特定の事柄を意図しており、他の意味ではないと主張するはずは、従って、この立場に立つても、作者以外の読者が作者の意図を読み取ることは可能であると考えていることは間違いないと断言できません。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

N・T・ライトの神学とは

25 中澤啓介

3. 批判的実在論

私は今日まで、パウロとイエスに関して集中的に研究し、原始キリスト教の起源に迫ろうとしてきました。その際、実証主義的な「素朴な実在論」でも、現象論的な「構造主義」でもなく、「批判的実在論 (Critical Realism)」という立場を進めてきました。批判的実在論は、「知られる対象」は「知る人とは別の何物か」であるとして、明確に区別します (実在論)。ある観察者が対象物を観察すると、別の観察者が最初の観察者に対し様々な角度から批判的な別の観察結果、情報、考察、疑問などを投げかけます。すると最初の観察者は、投げかけられたすべての問題に応答しながら、すべての疑問を満足させ得る理論にまで立上げてあげていきます (批判的)。このようなプロセスを繰り返しながら、物事の認識を深めていく方法論を「批判的実在論」と呼びます。

すべての出来事の記述は、それが起こったとおりに描かれているわけではありませんが、多くの点を歪められているのが普通です。むしろ、歪みの程度はいろいろです。大切なのは、歪みが起こった出来事全体を曲げていないか、出来事を読者にとって意味あるものとしているか、それとも台無しにしてしまっているのではないか、という点を見分けることです。批判的実在論の立場で見ると、ある情報が他の情報に比べよりの有効であるとか、こちらの情報が歪められているがこちらの情報

第3章「神学プロレゴメナ」について 歴史を批判的に検討し全体像を描く

はそれほかにではない、などと判断できるようにあります。例えば、批判的実在論に立つて考えると、トマスの福音書がマルコの福音書よりイエスの生涯を歪めて記述していることは明らかにあります。

すべての歴史は知識のスパイラル (質問と応答が繰り返され、らせん状に問題の本質が明らかになっていく) から構成されています。そのスパイラルは、解釈者と歴史情報との間に延々と続く相互作用のプロセスです。解釈者がある情報を手にしたとき、これはどのように伝えられたのか、意味は何か、信頼してもよいのか、意図はこの辺にあるのか、背景に何があるのか、他の関連情報はないのか、もっと信頼できる解釈はないのか、バイアスは潜んでいないのか、他の人はどのように解釈しているのか等々、無数の質問と応答が繰り返されていきます。歴史の出来事を確かに起こったものと確信しながら、それを批判的に検討しつつその全体像を受け止めていくのが「批判的実在論」です。

知識とは、神が創造された世界と人間との相互関係を扱います。人間は創造主のイメージに創造され、創造された世界の秩序の下で賢明に自己の責任を果たすことを求められています。知識は、その任務遂行のため神が備えてくださった賜物です。人間は、この世界に対して、客観的で第三者的な立場に立つ観察者でありません。客観と主観という区別は無理で無益なことです。と云っても、客観的な知識がないわけではありませ

ん。複数の世界観を比較してその相違点を明らかにすることも、その主張の中で妥当なものを見分けることも、一つの世界観から他の世界観へと考えを変換することも、すべてこのことは可能です。このような批判的実在論は、孤立した認識論の対極にある「リレーショナルな認識論」です。

神学者は長い間、観念論の世界に閉じている傾向がありました。ところが最近では実在論の重要性を発見し、そこに喜びの声をあげる研究者たちが増えてきました。しかし私に言わせれば、観念論と実在論の区別そのものが的外れであり、主観的と客観的という区別や自然と超自然という区別も啓蒙主義思想の産物に過ぎません。さらに、保守的であることとリベラルであることとの区別も、イエス研究とパウロ研究を分断することにも、意味を感じません。時々、私が提唱している研究方法はどの程度ポストモダン主義的かと質問されます。そういう事柄について、私自身は全く関心をもっていません。

現代の文学批評では、作者よりのテキストに、テキストよりの読者の方に強調点が置かれ過ぎていきます。そのため、テキストが字面を超えたことを語っている場合でも、それは著者の意図ではなく、読者が自分の思いに基づいて読み取っているという理解される傾向があります。しかし、歴史の研究と執筆を日々の関心事としている者にとっては (私もその一人ですが)、このようなポストモダンの姿勢はあまりにも疑い深いもので、慎重過ぎ、内向過ぎるようには思いません。人は過去に起こったことをきちんと認識できますし、歴史を記述することも可能なはず (本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

26 中澤啓介

4. 新しい学問方法論

新約聖書の研究分野には、3つの学問領域が含まれます。新約聖書神学、原始キリスト教神学、原始キリスト教史です。「新約聖書神学」は原始キリスト教神学の一部です。「原始キリスト教史」は原始キリスト教史の一部です。ところが多くの研究者はこの3つを区別せず、混同して論じています。その結果、新約聖書の研究に多くの混乱が生じ、クリスチャンの歩みを豊かにする方向に進んでいくとはいえない。しかも、新約聖書の個々の記者たちが皆同じ神学を持っていたわけではなく、一括りにして論じるなど愚かなことです。

クリスチャンは、原始キリスト教時代から「自分の生き方、信仰内容、行動基準は新約聖書に一致させるべきだ」と考えてきました。宗教改革者たちは、カトリックの気まぐれな寓意的解釈を排除するため、聖書本文の字義通りの意味と解釈を強調しました。宗教改革運動の「聖書のみ」という旗印は、聖書（事実上は新約聖書のこと）に最高の権威を付与しました。聖書を読むことがクリスチャンの出发点で、信仰と生活の基礎を整え、自分の歩みを見直し強めていくことを強調しました。しかし、啓蒙主義の時代になると、「聖書記述の歴史性は怪しいけれど、時代を超越した神学上の真理は証しされている」と主張する人々が現れました。特に18世紀のレッシングから20世紀初頭のブルトマン、60年代に流行した「聖

第3章「神学プロレゴメナ」について 聖書解釈の歴史と世界観の変遷

書神学学派」は、聖書は創造主である神の力強い贖いの御業を証言している、と主張し始めました。彼らは、教会の歴史の黎明期は純粹で、原始キリスト教は規範形成のための研究対象になり得ると考えたのです。むしろ彼らが成功しているとはいえません。過去2世紀にわたって西欧世界に影響を及ぼし続けてきた「歴史と神学は異なる」という考え方は、今や内側から崩壊し始めています。このような有害な三元論に陥ってはいけなし、一方が他方の陰に隠れてしまうような疑わしい一元論もいけません。このことは新約研究のみならず、あらゆる分野について言えます。聖書本文の解釈や歴史再構築の試みはすべて、その人が持っている特定の世界観の中でなされます。そして今日の聖書研究者は、合理的で近代的な西歐的世界観とポストモダン主義的な世界観のどちらを取るのかという選択を迫られます。前者はキリスト教を単なる私的な宗教上の意見にすぎないと考え、本来のキリスト教から逸脱したものをキリスト教と見なしました。

しかし、キリスト教の出来事とその結末は、本質的に公共のもの（人の目から秘匿されたものではなく、誰もが認識でき、公開で論じることのできるもの）です。歴史家は出来事の内幕を知りたいと願うものですが、出来事そのものは公共のものであり、もし出来事が公共のものであれば、それを論じることは可能です。たとえおかしな陰謀論が横行しても、証拠はきつんと集められ、その類の理論は自然に消滅していくでしょう。この20年間の聖書批評学は、今日私たちが手にしている新約聖書の記者や伝承の伝達者たちの意図を歴史的に分析することに集中してきました。それには個々の聖書箇所断片的な資料（ペリコーペ）がもともとどのような文脈に属していたのかを究明する「資料批評」、資料を伝承してきた共同体がどのような状況（Sitz im Leben＝生活の座）の中でその資料を生み出したかを研究する「様式史批評」、その資料を最終的にまとめた聖書記者がどのような編集意図（神学）をもって取り扱っているのかを解明する「編集史批評」などが含まれます。ところが、この学問分野の風景は、過去30年の間に見違えるほど変わりました。ポストモダン主義者による「文学批評」が登場し、福音書研究は、伝承過程や福音書記者ではなく、聖書本文そのものに関心を移しました。ある人が聖書を読むとき、その読者は何を読み取るのか、読者の中に一体何が起るのか、読者にとつてどのように役立つのかなどが中心的な関心事になったのです。

むしろそうになると、未解決の新たな問題がたかきん浮上します。不朽の「使信」を得るためには聖書でなければならぬのか、聖書だけで大丈夫なのか、同じような価値があるかに見えるトマススの福音書や父祖たちの教訓（ピルケ・アポット）では駄目なのか、他の芸術や芸術作品ではどうか、主観主義の誤りに陥らないか、従来の歴史研究の方法と成果には何の意味も無いのか、古代の修辞学や文書の表現法の研究はこれまで役立つのか等々。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

伝道・牧会を考える

N・T・ライトの 神学とは

27 中澤啓介

5. 正しい神学は「プロレゴメナ」

新約聖書を熱心に学んでいる人たちの中には、違った考え方を持つ2つのグループがあります。一つは、新約聖書は徹頭徹尾歴史的な書物であって、神学的な規範として読むべきではないと考えるグループです。彼らはこの200年間に有名大学の教授職や出版社を傘下に置き、学問的な研究をリードしてきました。従来の前近代的で単純な聖書の読み方と解釈を退け、時に高慢にも見えるほど自らの力を誇示しながら、学問的な方法論を徐々に確立してきました。

もう一つは、それとは真逆に、新しい解釈学の侵略に対して不退転の決意で抵抗する人々です。彼らは聖書記者たちがテキストに込めた意味を深く考えず、これまで慣れ親しんできた精神風土や生活様式の中で聖書を読むことに固執します。典型的な例としてプロテスタントの根本主義者をあげることができますが、彼らに限られているわけではありません。聖書を典礼の一部として断片的に詠唱するだけとか、聖書を自分の霊を養うために読むだけという人々も同じです。彼らは、第一のグループが占領軍のように入り込んでくるのを警戒し、彼らと同じような高慢な姿勢で立ち向かおうとします。学者たちの暴挙の数々をあげたら、自らの土気を奮い立たせるだけで、聖書の未知の真理を研究したいという意欲など微塵もありません。

歴史を大切にすることも、歴史だけでは不完全だと主張

第3章「神学プロレゴメナ」について 学者たちの高慢、抵抗する人々の高慢

すくなくとも、両方とも正当性があります。それは啓蒙主義運動に続いて登場した合理主義と反啓蒙主義運動に立つ超自然主義がもたらしたもので、それぞれの言い分にはそれなりの理由があります。双方とも現代的な思想潮流を代表していますが、18世紀のように二者択一を押し付けるのは間違っています。単純化の裏に陥り、あなたたちは間違っている」と互いに非難しあうことはやめるべきです。そのような指摘には正しい面もありますが、健全な議論を妨げ、よのよい聖書の理解に到達させるものではありません。

自分は聖書をよく理解しているを決めつけず、聖書本文を文脈に沿って読み、豊かなニュアンスを読み取ることが大切です。気に入った聖句や文章を拾い読みするだけでは不十分です。新約聖書は思いつきで羅列された書物ではなく、旧約聖書とともに神の一つの大きなストーリーを構成しています。聖書には神の贖いのドラマが隠されています。単なる個人的な啓蒙のためとか、学問的な満足感を満たすためではなく、より大きな「神の国」を拡大し前進させるための総力を上げて研究せねばなりません。これまでのいわゆる聖書学は、紀元30年から150年までのキリスト教史を、イエスやパウロについて真正面から論じないで記述しようとしてきました。それは、モーツァルトとベートヴェンにふれずに1750年から1850年までの西洋音楽を論じるようなものです。

聖書学は神学を必要としま

す。パウロの書物を研究するためには、世界観、ものの見方、基本的または帰結的信仰、実際の活動の目的や意図などを問わずして進めることはできません。聖書の登場人物が何を考え、企て、目指そうとしていたのかを理解するには、聖書本文の神学的な意義は不可欠です。自分は予断を持っていないとか、自分が問うていることは中立的だなどと考えるはいけません。それは思い違いです。その誤りに気づかせてくれるのは、世界観や神学の研究によります。

・批判的な釈義のプロセスを迂回した「出来合いの答えに基づく神学」を持ち出してはいけません。そのような神学は大抵場当たり的に証拠聖句として探し出した「断片的な聖句の寄せ集め」から成り立っています。このように言う

と、それでは聖書の権威を認めないことになってしまおうと反論してくる人がいます。そのような人は、聖書を本来あるべきものとは違う読み方をしても、そのような使い方が聖書の権威を認めることになるとのかという点を、よく考える必要があります。

聖書主義者と言われる人々は、神学的なテーマを研究するとき文脈を無視して証拠となりそうな聖句を寄せ集めて議論を展開します。気持ちは分かれますが、そのような方法論は聖書が本来持っている性格とは相いれません。真のキリスト教神学は、聖書が語るストーリーとサブストーリーに基づいて構築すべきです。イエスやパウロ、原始キリスト教会のストーリーを踏まえないで、自分勝手な都合主義の神学を作り上げ、振り回すことはやめるべきです。(本稿は筆者によるタイトルの主張の要約)

N・T・フライットの 神学とは

28 中澤啓介

6. 聖書本文の読み方

聖書は神の靈感によって啓示された神の言葉です。それは、書物として神の民に与えられました。書物である以上、読書に関する基本的な事柄は聖書にも当てはまります。まずテキストと読者の関係です。テキストは読者にある特定の効果をもたらすことを狙って記されたものですから、読者が気ままに操れるようなものではありません。読者は中立的な観察をするのではなく、作者の意図を読み取ることが求められています。

次にテキストと作者の関係です。テキストは作者独自の視点から観察された物事が記されています。作者について多くのことを語り得るのですが、作者の内面を完全に映し出しているわけではありません。テキストは、それ自体がある種の生命を持っていて、作者の意図を読者に明らかにします。しかも、作者が意図しなかった他の要素(エコー、喚起、構造など)を読者にもたらします。

最後に出来事と作者の関係です。作品中の出来事や対象は、単に作者の心の中に生じたものではありません。特定のアンクルから観察された物事の二側面です。どのような作品も「ありのままの出来事(bare event)」が記されていることにはありません。

私たちは読書を通じて作者の意図や心情に出会い、それに共感したり納得したりしながら自分自身の本当の姿(隠されていた部分を含め)を見いだします。作者の心を論じ

第3章「神学プロレゴメナ」について 作品と作者の意図を読み解くには

ることは簡単な場合も、そうでないこともあります。作家は、自分の作品が読者の心の中を反映するとか、作者の頭の中にあるものを読者の心に映し出してほしいと期待しているわけではありません。作品は読者や作者を映し出す鏡や万華鏡ではありません。むしろ、望遠鏡か顕微鏡のようなものです。それは、新しい視点から外の世界の現実やそれを超えた実在さえ眺めることを可能にしてくれます。新たな光に照らされた外の世界やそれを超えた実在に対し、読者が抱いている思いが符合するとき、読むという行為が意味あるものとなります。

歴史家にとって、テキストの意味を読み解くことは難しい作業です。まず、言葉の意味を確定しなければなりません。言葉は普通多くの意味を持っていますが、その意味の中のどれがよいかは、文章の中に置かれて始めて決まります。例えばbookは、「ケックトをbookする」といえば「予約する」の意味となり、「机上のbookがある」といえば、「本」という意味になります。「本」という意味しかない場合でも、それが比喩的に使われることが多々あります。

聖書の研究においては、「be」ある(being)という記述的解釈(being's kind)「ought」という規範的解釈とは、区別しなければなりません。記述的解釈から規範的解釈に移行することは「過去」起こった出来事の記述「から」現在の問題に対して権威ある声明」を導き出すことです。それは歴史的課題から逸脱すること

になり、聖書学では間違っていると見なされます。しかし、本当にそう言い切つてよいのでしょうか。クリスチャンは、聖書に対し特別な権威と意味を原初から認めてきました。単なる歴史の書物とみなしてきたわけではなく、神が神の民のためになされた御業が明らかにされている書物として読んできました。聖書から歴史を読み取ろうとするだけの従来の聖書学のパラダイムは、今や行き詰まりと不確実性にさらされています。これまでの歴史理解や神学体系の枠内で聖書を論じて、新しいものは何も出てきません。

人間は、創造主の似姿に形づくられ、被造世界の中で賢明に行動する責任を求められています。聖書は、そのような目的を遂行するために神から備えられた書物です。私は、このような物事理解の仕方「愛の認識論」とか「愛の解釈法」と呼んでいます。クリスチャンは新約聖書の「アガペー」の思想によって現実を認識し、他の人と関わります。愛とは、「目を向けること」です。自分の関心を対象に注ぐことです。愛は、愛する人をその関係の中で押しつぶしはしません。他者が他者であることを喜んで受け入れます。たとえ愛する人のために自らの命を失つても、それは見いだすことにつながることを知って喜ぶます。他者のために自分を失うことは、本当の自分になることです。

このような生き方をもたらしてくれるのが聖書です。こういう生き方をしようとする人は、分かりにくい聖書本文でも十分な敬意を払い、それを理解しようとする。聖書のテキストとともに歩み、喜んで、その語りかけに耳を傾けようとしています。(本稿は筆者によるフライットの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

29 中澤啓介

7. 文学的センスの必要性

キリスト教神学は、聖書の意図を十分に読み取ったうえで構築される神学でなければなりません。聖書を十分に理解するには、文学、歴史、神学の3つの方向からアプローチしなければなりません。クリスチャンは、文学的、歴史的、神学的なセンスをもって聖書本文に近づき、総合的な解釈モデルを提供する必要があります。

聖書は、多彩な文学ジャンルを含んだ文書(例えば、律法、詩歌、格言、劇文学、手紙、黙示文学等)です。読者が文学的センスをもって読む必要があるのは当然です。聖書はまた、歴史上起こった出来事を報じた文書(歴史書、預言書、福音書、使徒書等)です。読者は歴史的センスを必要とします。そして、聖書が伝えようとしているメッセージは「神が人のために行われた贖いの御業」です。神学的なセンスがなければ、その意味を十分読み取ることができないでしょう。しかも、これらの3つを別々に論じるわけにはいきません。それぞれの分野における研究事項を徹底的に解明すると同時に、そこで浮き彫りになってくる広い意味での関連事項を統合して考えることが大切です。この関連性を的確に統合しながら読み進まないと、全体の議論の方向感を見失ってしまいます。

文学的なセンスをもって読むとは、聖書を物語的(ストーリーとして)に読むということです。物語であれば、物語全体の構造、プロット(筋

第3章「神学プロレゴメナ」について 文学技法を知り歴史物語を理解する

書き)、登場人物、ナレーター(劇中の登場人物の場合もあれば、すべての出来事を見通している第三者としての語り手の場合もあります)などを考慮する必要があります。また、メタファー、アイロニー、詩歌の平行法、キアスムス構造(逆順法)、葛藤、寓意、隠喩(直喩、暗喩、明喩などを含む)などの表現技法を究明していくことも求められます。また、物語をどのような枠付けから見るとかという「フレーミングの問題」はとても重要です。文学が創出する効果と、その効果を生み出す方法を研究する必要があります。聖書記者たちが、古代の人々が身につけていた修辭的な技法に無知であったとか、無視したなどと考えることは間違っています。

1970年頃から、聖書本文の構造や表現技法を理解するためには、昔話の分析者の研究を利用することが効果的である、と主張されるようになりました。聖書の個々の文書の成り立ちや資料などの分析に關心を集中するのではなく、聖書本文があるがままに受け取り、そこで語られていることをそのまま素直に読み取っていくとしたのです。この読み方には読者が深く関わってきますので、ある程度のチェック・アンド・バランスが必要です。しかしこの方法は、聖書の歴史的解釈や神学的理解をも豊かに発展させたので、諸手を上げて歓迎されるようになりました。

聖書は、多くの歴史的出来事を扱っています。特別な視点から様々な文学的手法をも

って記された歴史物語と規定するのが正しいでしょう。物語といっても、その歴史性が疑わしいわけではありません。多くの人は、次のように言います。古代の人は、現代の私たちのような「批判的な精神」を持っていなかった。權威に依存せず、主観と客観の違いに気づき、物事を批判的に見る精神を身につけたのは、啓蒙主義以降の私たちだけである。従って、私たちのみが観察者の解釈や視点を含まない、ありのままの出来事を記録できる」と。しかし、これは高慢で現実合わないことではありません。古代人も現代人も、自分たちのイデオロギーを過去の時代に投影して「歴史を創作してしまっ」物語手法を身につけています。この点に関しては、現代の新しい聖書研究者たちも例外ではありません。というより、その最たるものといえるでしょう。

物語にとって一つの重要な側面は「結末(sequence)」です。現代史研究における一つの問題は「結末」がいまだないことです。普通は、出来事が進んでいくに従ってある種の結末が見えてきますが、そうでない場合もあります。出来事に関わっていた人たちが意図していたものが実現する場合もあります。全く異なることもしばしば起こります。

出来事の結末は、通常、次世代かその次の世代になるまで不明です。結末の部分を埋めるため、多くの場合イデオロギーに基づいてアピールさされますが、それが正しいとは限りません。ベン・メイヤーは、イエスについての伝承の中にイエスの活動の原動力を探そうとしています。それは本末転倒と言わねばなりません。(本稿は筆者によるタイトルの主張の要約)

N・T・フレイトの 神学とは

30 中澤啓介

8. 歴史的センスの必要性

身の回りに起こったことは報告、思い出、エピソード、物語、逸話、日記、家族の話など様々な形に巧みに編纂され、他の人々に伝えられていきます。出来事の中から、作者が知らせたいと思っただけを少しばかり選り出したものです。その話には当然の事ながら、作者の解釈が含まれます。話の聞き手は、そこから話し手が言いたい意図を汲み取ります。その際聞き手は、自分の世界観を背景にして解釈しながら聞きます。実証主義者であれば、ある出来事は「純粹に客観的なもの」です。すべての人が同じように認識できる事実だと考えます。しかし、実際はそうではありません。ありのままの歴史的記述と想っているものでも、幾重もの解釈上の決定を経て生まれたものです。解釈が加わって論理化されたり、組織化されたり、編纂されたりすることは、歴史の改ざんではありませんが、歴史とはそういうものだというのです。

歴史とは、知識の一形態です。「歴史」という言葉は通常、「現実世界において実際に起こったこと」について人々が書き記したものと定義されています。ここで重要なのは、「現実世界において実際に起こったこと」が含まれていることです。現代の新約聖書の歴史家たちは、この部分を横に置き、「人々が書き記したものの」にのみ注目し、論じようとしています。歴史家は、自分が歴史を超えた存在であるのかのように錯覚し、どのような視

第3章「神学プロレゴメナ」について 歴史はそれだけでは存在し得ない

点からでも自由に歴史を記すことができるや考えがちです。歴史を観察すればするほど、歴史はそれだけでは存在し得ないことに気づきます。例えば、「原始キリスト教の起源」という問題を研究しようとするとき、神についての疑問に向き合わざるを得なくなる。歴史は「ありのままの事実」でも「主観的な解釈」でもなく、「出来事や意図についての意味深い物語」です。歴史は神学を排除するものではありません。むしろ歴史は神学を必要とします。福音書は神学的な書物ですが、歴史性が否定されるわけではありません。

歴史家は、「事実」という小さな断片を集め、それらをつなげて一連の出来事として提示します。また、出来事の内幕を考察することによって、物事がどのように関連しているのかを示します。あるセンテンスの意味（言及されている事柄のニュアンス）は、その文章の背景のストーリーによって違ってきます。「イエスが十字架にかけられた」という文章も、百人隊長が総督ピラトに報告した場合と、その晩弟子たちが互いに語り合った場合と、パウロが宣教の中で言及した場合とで、ニュアンスが相当違つことは言うまでもありません。一つの文章であっても、人間の様々な活動を視野に入れ、他のすべての学問分野と結びつけ、直感や想像力を働かせ、検証プロセスを経て、一つの全体像を把握する努力をしなければなりません。その際、歴史家自身の直接または二次的な体験

がそのストーリーの情報源になっていることを忘れてはなりません。どのような小さなあるいは単純なストーリーであろうと、歴史家を全くバイパスしたストーリーというものはありません。

新約聖書の専門家の多くは、歴史に付随する様々な問題についてはほとんど考慮しません。特定の聖書本文とそこに想定される問題に対しては注目しますが、それを1世紀の歴史に結びつけて考察しようとしません。新約学分野では、J・B・バリーの『ギリシャの歴史』やバートランド・ラッセルの『西洋哲学史』に相当するような書物はありません。第一次世界大戦以降の新約聖書の研究は、特定の文書について考察するか、特定の聖書本文についての注解的な論評をするとか、より小さなスケールの問題について研究していくことに留まっています。

すべての真摯な歴史家は、一連の出来事が実際に起きたことを証しています。連続した出来事には、「外観」と同じように「内幕」が存在しています。良い歴史的な説明は、全体的に調和の取れた扱いを提示します。むしろ、調和が取れた説明がいつでも正しいわけではありません。例えば過去15年間に、メイヤー、ガーベイ、ホーク、サンダース、ホースン、クロッサン、その他多くの人々が、一般的なトレンディに抗して、イエスについての内的に調和の取れた説明を執筆してきました。しかし、それらは多くの点で互いに食い違っており、それらすべてが正しいというわけにはいきません。調和が取れていないと主張されても、他の仮説と同様に検証されねばなりません。(本稿は筆者によるフレイトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

31 中澤啓介

9. 神学的センスの必要性

神学とは、神々 (gods) あるいは神 (a god) に関して研究する学問です。ところが最近では、よりの広い意味で使われています。多くの思想家、政治家、聖書学者でさえ、「神学」とは、型通りの抽象的な、ほとんど意味のない堂々巡りを繰り返すような、ドグマ的な一連の議論であるかのようなものに見下しています。神学を中世時代のように「万学の女王」と見なすことは行き過ぎですが、今日のように低レベルなものと貶めるようなことも間違っています。

神学は文学や歴史とともに聖書を理解するのに必須のもので、神学は人間と世界についてのストーリーなのです。その際、神は存在するの、か、神と私たちの住む世界とはどのような関係なのか、現在及び未来においてこの神は世界を正すために何をなすのか、と問うことから始まります。神学は「シンボル」についての特定の解釈を提供します。また、ある種の「実践」を示唆したり、批判したりします。さらに世界観が影響を及ぼす実際のアクションとの関わりで、不可欠なものです。多くの人は神からの啓示を通して神の真実に到達することなどあり得ないと考えています。マルクス、ニーチェ、フロイトはすべての人々に啓示を疑わせ、啓示が指し示しているのは神的現実ではなく、個人あるいは集団のある側面だと説いています。それは、神そのものの啓示ではなく、個人あるいは集団が期待

第3章「神学プロレゴメナ」について 歴史・物語に焦点を当て、複合的に

した神の行動に過ぎないとして、疑念という強力な解釈法を現代人に注入しました。その結果、権力、セックス、お金が神に取って代わりました。しかし、新しい動きもあります。ポスト・ニーチェ、ポスト・フロイト、ポスト・マルクスの立場に立つ芸術家、作家、音楽家、宗教家たちです。彼らは、批判的でありつつも、「啓示」と呼んでよいような何らかの存在を私たちが認識するように語りかけています。

神学は人間学を通してなされます。人が神に関して言及するとき、その観察者との関係を考慮せずに語ることはできません。純粹に客観的、また純粹に主観的なものはありません。幸運にも人生はもっと複雑です。2項対立を受け入れる必要はありません。福音書の記者たちは独自の視点を持ち、自らが意図したことを読者に伝えようと様々な工夫をしています。彼らは第三者的な立場の観察者ではなかったし、読者がそのようになることを期待していません。といっても、彼らの記した出来事が実際には起こらなかったわけではなく、起こった事柄を彼らの神学でまとめたというだけです。

キリスト教神学は、クリスチャンが信じる神とその神が創造された世界に対し、どのように見、どのように関わり、どのように語るのかを問題にします。何が信じられているかを記述するだけでなく、何が信じられるべきかを扱います。それは見えるもの、見えないものすべてを含み、私

的ではなく公共的な事柄です。パウロが手紙の中で展開している神学的議論は、彼が直面していた状況の中で生じたものです。多くの新約学者たちは、パウロの純粹な神学的考えや世界観ではないと軽視しますが、だからといって、そのような状況はなかったとか、パウロの考えではないなどというのは間違いです。相対主義者はそう聞くと、あまりに高慢ではないかと反応するでしょう。それに対してキリスト教神学は、そう言う以外に道はないのだとしか答えようがありません。相対主義者でさえも、時に伝道者のような熱意をもって「相対主義は普遍的な真理である」と広めようとします。キリスト教神学もまた、他のすべての世界観とそれに付随する信仰体系がしているように、現実全体を語ろうとします。

過去20年に2つの方法によるキリスト教神学が人気を博してきました。一つは過去の研究を、時間を超えた真理や命題の題材を集め、新たに秩序立てて再整理した形で提供するという方法でした。もう一つは、世界の中で起こってくる今日の課題に、対決あるいは融合という方法で積極的に関与しようというもので、この2つとも、それぞれ有用性があり、何らかの意味はあるのですが、私が提案し推し進めようとしている「神学」ではありません。私自身は、批判的実在論に立ち、近年提唱されている「物語神学 (narrative theology)」と共同して展開すべきだと考えています。とはいえ大部分の物語神学とは異なり、文学的、歴史的、神学的に複合的なアプローチを取り、特に歴史に焦点を当てながら進めねばなりません。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

伝道・牧会を考える

10. 世界観の役割

世界観は人間存在の礎であり、人は世界観というレンズを通して世界を見つめます。人は世界観そのものを見るわけではなく、世界観は人がどう生きるべきかの青写真を示すものです。もし世界観を無視して人間の活動を観察するならば、私たちの文化や他の文化の研究はひどく薄っぺらなものになってしまいます。世界観は、人間が世界を認識するためのグリッド(網目状の枠)となり、それによって人間は現実を体系化するのであって、現実の断片が自ら組織化されるわけではありません。世界観は、通常は意識に上ったり議論されたりすることはありません。しかし一度その正当性が疑われたり監視されたりすれば、由々しき事態に陥ります。物事を広がりとお興行きをもつて見ることはできなくなります。

世界観は、「個人や集団としての人間が、この世界の現実を認識するための枠組み」です。自分の目を使わずにものを見ることができないうように、自分の世界観を用いずに他の世界観にふれることはできません。聖書を読むとき、世界観の違い、矛盾、緊張関係にしっかりと目を留めねばなりません。歴史の書物に登場する人物は皆、一人ひとりが異なる世界観を持っています。他の人の世界観に挑むことや互いの世界観を議論することは可能です。また、ダメスコ途上のパウロのように、世界観の劇的な変化を経験することもあります。他の人の

第3章「神学プロレゴメナ」について 人間が世界を認識するための枠組み

世界観を把握するには、起こった出来事を外観から内面へと考察する必要があります。世界観は単なる理論ではなく、その人の全存在を含んだ世界に関わるものです。クリスチャンにとっては、神は存在するのか、その神はどのような方か、世界とどのような関わりを持っているのか等の重要な問いを発するところから始まります。無神論者にとっては、このような神学的な問いは全く無意味です。世界観は家屋の土台のようなもので、人目にふれることはありませんが、もっとも重要なものなのです。

世界観は人間存在を決定する次の4つの「根本的な問い」に答えることで構築されます。まず「私たちは誰なのか(アイデンティティー)に対する意識」。人間は創造主のイメージに従って造られました。人種、性別、社会的地位、地理的な場所などによって規定される存在ではありません。決定論者たちが主張する「チエスの駒」ではないのです。人は「神のかたち」をもち、神が支配されているわけに共にあずかる存在です。

第2は、「私たちがどこにいるのか(周囲の世界への認識)」という問いです。創造主なる「神のイメージ」に従って造られた人間は、神がすべてをよしとされた美しい世界のただ中に置かれました。人間は、グノシス主義が考えるような疎外された世界にいたるわけでも、汎神論者が示唆するような神的な宇宙に生存するわけでもありません。

第3に、「何が問題なのか

(世界の現状についての問題意識)」という問いです。人類は創造主に逆らひ、創造主と被造世界の間には宇宙論的な離反が起こりました。その結果、この世界は創造の目的から逸脱しています。キリスト教世界観は、悪を創造性や身体性に関連づける二元論を拒否します。また悪を、環境に十分適応できない単なる人間の問題に帰す二元論にも与しません。キリスト教世界観による悪の分析は、もっと微妙で広範なものです。マルクスやフロイトのように半分だけの真実を全体的な真実にまで高めようとする不完全な分析も受け付けません。

第4は、「その解決策とは何か(この世界に存在する問題から抜け出すための方法)」という問いです。創造主はこの被造世界の中でかつて行動し、今も行動中であり、これからも行動するでしょう。人間の反乱によって引き起こされた悪の深刻さに対処した神は、神の臨在と栄光を世界中に満ちあふれさせる目的で活動しておられます。

人生の根本に関わる4つの問いに対する以上のような答えは聖書が解き明かすメッセージであり、キリスト教世界観の土台になっています。ところが驚くべきことに、多くのキリスト教のグループ(教派)がこの明確な土台を正しく採用してはいません。特に(福音派及び主流派の違いに関係なく)啓蒙主義思想後のクリスチャンたちは「神の贖いを信じる」とは、物質的なこの世界から逃れて純粋にスピリチャルな領域(天国)に行くことである」という信念を共有しています。これは、3番目と4番目の問いに対する答えとはかなり違うと言わねばなりません(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

33 中澤啓介

11 キリスト教世界観

クリスチャンが聖書を研究したり、テキストを解釈したり、歴史を再構築する試みは、特定の世界観の中で行われます。20世紀半ばまでのキリスト教神学は、啓蒙主義後の「西欧的近代合理主義の世界観」の中で進められてきました。それは、宗教的なものは私的な意見に過ぎず、公共的な世界（誰でも関われる白目の下）にさらされているごく普通の世界（）に関わるものではない、という世界観でした。このような世界観に取り込まれたキリスト教は、聖書が解き明かしている信仰とは違っています。それは間違っていると言わねばなりません。啓蒙主義後の西欧的近代合理主義やキリスト教を含むすべての世界観は、公共的であり、かつ包括的です。

ある世界観に立つ者（例えば、西欧的近代合理主義）は、他の世界観の信奉者（クリスチャン）が実際に何を信じ、何を行っているのかについて説明することも、議論することも、反対することも、評価することもできるはずですが、その反対（クリスチャンがノンクリスチャンに対して同じことを行うこと）もまた可能です。それらの世界観は、ある程度ですが、互いに重なり合っているからです。キリスト教が歴史に全方で取り組むのであれば、それを啓蒙主義が要求している形で満たすことは可能であるはずですが、そうしななければならない。キリスト教は、歴史へのアピールについて何も

第3章「神学プロレゴメナ」について 聖書の世界観が物語として語られる

恐れる必要はありません。キリスト教自体がそのようなアピールを行っている信仰だからです。キリスト教世界観は、教会の建物、そびえ立つ石塔、備え付けの調度品、装飾されたグラスなどを通じて、神の超越的な臨在を明らかにし、創造主に帰せられるべき威光を反映しています。典礼と準典礼（プロセッションから祈禱会まで）は、キリスト教世界観を祝い実演するもので、多様な規範的役割を果たしています。さらにアイコンを描くことから路傍伝道に至るまで、聖書の研究から社会的な犠牲者のための避難所建設に至るまでの活動は、キリスト教世界観のシンボリック的反映と見なすこともできます。それらのシンボルは信仰者の生活を整えて正しい方向に導き、世界に対してクリスチャンの役割を筋の通った形で理解させることに役立っています。

キリスト教世界観は、創造主は人類に世界の世話をさせ、クリスチャンには世界にいやしをもたらすことを期待しています。しかしクリスチャンもまた、他のすべての人と同じく混乱し、間違いを犯し、愚かで気まぐれです。本質的に重要ではない伝統的教義を基本的な信仰と見なし、議論を展開するという間違いも度々犯してきました。とはいえ、それだけではありません。キリスト教世界観は、宇宙の創造者が歴史の支配者であるとの信仰に立ち、その神は万物の刷新によってその活動を完成させると解き明かしてきました。18世紀以降の啓

蒙主義者たちは、歴史にアピールすることによって「ドグマ的キリスト教神学」に挑戦しました。歴史に訴えること自体は主流のキリスト教神学の世界観にも受け入れられるもので、そこでは対話が成立するはずですが。

私は、決して孤立主義を促す者ではありません。クリスチャンとユダヤ人の間には大きな亀裂も、多くの共通項もあります。同様に他の信仰を持つ人々との間においても、クリスチャンは多くの共通点を持っています。それは相互理解と交流の基盤となり、コミュニティ同士の間で行動を促すでしょう。と同時に、世界観の異なる部分を丁寧かつ正直に示し、それぞれの世界観を分かち合っていく努力を積み重ねていかねばなりません。世界観は、筋の通ったものとして体系化されるもので、文化または社会の形成に大きな影響を与えます。

最近の文化・思想研究者たちは、世界観を「ストーリー」として提示するのがよいと考えています。それは聖書についても言えます。聖書の世界観を理解することは、聖書において神が語りうとするメッセージを理解するのに不可欠です。否、神からのメッセージは、神が持つておられる世界観そのものであると言えます。すると、聖書の世界観は、「聖書のメッセージをストーリー」という形で語ることになります。現代の聖書研究において「物語」の重要性が叫ばれている理由は、単に文学類型の一つとしての「物語」が聖書の中に含まれているからではありません。聖書の世界観は聖書のメッセージそのものであり、そのメッセージがストーリーとして語られることにあるのです。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

N・T・ライトの神学とは

34 中澤啓介

12. 世界観とストーリー

人は、自分の持つ世界観というレンズを通して対象を観察します。世界観は、信仰に属する事柄、世界の存在理由、人間が生きているときに直面する様々な問題にぶつかるとき、人の意識に上ってきます。その世界観は、出来事を認識している人の内側に構成されますが、出来事そのものは公共のもの（誰の目にも見え、論じたり確認したりすることができるもの）です。その世界観は家屋の土台のようなもので、通常は人の目にふれません。しかし、必要であれば掘り起こされ、調査され得るものです。

どの分野の思慮深い思想家も、優れた作業仮説が知覚情報だけで構築されるとは考えません。仮説の構築にはもっと大きな枠組みが必要です。その枠組みになるのが世界観です。今日の社会は複雑であり、社会に影響を及ぼしている世界観はたくさん出回っています。その多くは断片的であり、歪められています。意図的あるいは無意識の内に人を欺くものもあります。私たちは、そのような世界観の中から自分に合うものを選択し、自分の世界観を形成しています。その世界観は、自分が属している幾つかの「コミュニティ」からも大きな影響を受けています。例えば、私の家族、属している特定の地域集団、友人のネットワーク、職種やアマチュアの音楽団体など。人間のすべての共同体は、特定の了解事項、問題意識、価値観、規則、目標、伝統、期

第3章「神学プロレゴメナ」について ストーリーこそが基本的な枠組み

待、不安感といったものを共有していますので、その構成メンバーの世界観に影響を与えるのは当然のことです。

ここで、世界観とストーリーの関係を明らかにしておきましょう。ストーリーといえども、一般には子どもたちや文学を愛好する人々が読む「物語」を指すのが普通です。ところが、近年の聖書学者たちが使っている意味は、かなりニュアンスが違います。それは、聖書そのものの中に物語的な文書が存在することに注目するところから出発しました。それがやがて、その聖書の物語の背景にある世界観や信仰内容を論議するように発展しました。つまり、聖書の物語的な出来事（ストーリー）と、物語を生み出す基になった枠組み（世界観）とは切り離すことができないと考えられるようになったわけです。その結果、世界観が「ストーリー」という言葉で表現されるようになったのです。

一般には、ストーリーは抽象的な真理やありのままの事実より劣ったものと考えられています。しかし、そうではありません。人類の始めからストーリーこそが語り継がれたものであり、人間の文化継承の基本の一つでした。ストーリーが、人類の包括的な世界観の形成に大きな影響を与えました。世界観を生み出させたのがストーリーだとすれば、ストーリーは神学的信条のような定式化された信仰よりも、さらに根源的なものとして位置づけられます。ストーリーが世界観を生み出し、生み出された世界観が新たな

ストーリーを生み出していく、という循環が聖書の世界にも起こりました。今日の聖書学の世界では、「物語（ストーリー）」という言葉が流行語のようになっています。しかし、ストーリーという言葉は文学ジャンルの「物語」という意味で使うだけなら（例えば創造物語、洪水物語、アブラハム物語等々）、この言葉の意味を全く理解していないと言わねばなりません。

自分のストーリーを語ることは、自分と世界の認識を整理するための最善の方法です。人は自分のストーリーを語り始めるなら自分がこの世界をどのように認識し、実際にどのようなように歩んでいるのかを自覚させられるようになります。人は、自分自身あるいは互いについて知ろうとして、仲間とそれぞれのストーリーを分かち合います。ストーリーなしの人間の交流など、この世界にはありません。ストーリーこそ私たちの生活を規定する基本的な枠組みです。私たちの振る舞いや人柄はすべて、そのストーリーの中に集約されています。

批判的な実在論における知識とその検証は、「人間の知識、思考、行動は本質的にストーリーである」との認識のもとで行われます。世界一般あるいは具体的な事象について説明するストーリーを仮説とし、その仮説的ストーリーが目の前の現象と「適合するかどうか」を観察し、検証します。もし適合すれば、その仮説的ストーリーは正しいこととなります。適合しなければ間違いです。ストーリーと豊かな意味で使うとき、クリスチャンの信仰と歩みは実に豊かなものになります。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

N・T・ライトの神学とは

35 中澤啓介

13. ストーリーの成立

歴史とは、ある特定の種類の実際の知識です。それは、ある出来事が起こると、その出来事に何らかの形で関わった人（人々あるいは共同体）がその出来事をストーリーとして語る（あるいは記述する）ときに生じます。この場合のある出来事は、人々の目にとまり知覚できる（つまり公共的な）事柄です。それがストーリーになるには、出来事に巻き込まれた人々やそれを語った（記述した）人々が、その出来事の中に何らかの目的、意図、動機を見いだす必要があります。それは出来事の内幕に属するもので、すべての知識と同じように「認識のスパイラル」を通じて得られます。認識のスパイラルとは、「あることを問い、それに答えるという形で表面的には知覚できなかったことを明らかにする」作業です。

目的とは、ある人の人生の航路またはその一部が本質的にどこに向かおうとしているのかを問題にすることで、それは個人のものの見方（mindset）における方向性に関係しています。個人のものの見方とは、その個人が社会全体の世界観を自分の内に独自の形で落とし込んだものです。それが、どちらの方向に向かっているのか、という点が「目的」に深く関わっています。目的を尋ねることによって、出来事の内側に踏み込み、方向性を見極めることができます。

意図とは、あることが起こる特定の状況下において、目

第3章「神学プロレゴメナ」について 出来事の内にある「認識のスパイラル」

的がどのように具体化されるかに関係します。従って、目的（aim）と意図（intention）とは、切り離すことのできない置き換え可能な言葉です。例えば、次のような用例を考えてください。地中海一帯の諸都市や町に「イエスは主である」と宣言伝えることはパウロの目的でしたが、その帰結としてエーゲ海の沿岸部での働きを終えたならローマに向かう、というのがパウロの意図でした。あるいは、イエスが過越の祭りのためにエルサレムに向かわれた意図は、イエスの生涯の目的から熟慮しなければならぬ、など。

動機とは、ある目的や意図に基づき、それにふさわしい適切な行動を取るようにと、内側から強く働きかける力のことです。それは、その人の内に自然に突き上げてくるものです。たとえふさわしい機会が備えられても、適切な動機づけに基づくと行動がなければ、目的や意図は真実なものかどうかは疑われます。

目的、意図、動機の間には微妙な違いがあります。同時に、大きな意味での一致もあります。この点について、次の例を考えてみてください。イエスは「神の国」を公式にスタートさせることを目的にガラリヤで宣教活動を展開されました。イエスは、その目的のために、生涯の終わりにエルサレムに赴くことを意図されました。そのような目的と意図に基づき、イエスは過越の祭りの時期に神殿のきよめを行うよう動機づけられました。もう一つの例を挙げましょう。パウロは地中海一帯への宣教という目的と意図に基づき、あるときはテネの広場で哲学者たちと論じるように、他のときには非常に修辭的な手紙をコリント教会に送るようになり、さらに別の機会にはエルサレム教会のために募金を集めるようにと、動機づけられました。

聖書の研究家は、聖書のストーリーの中に明らかにされている「ものの見方」や「世界観」をよく踏まえ、ストーリーの目的、意図、そして動機について深い考察をし、そのストーリーが語ろうとしているメッセージを読み取っていかねばなりません。例えば、ダビデ王がエルサレムを首都に選んだのは、イスラエルの12部族を結束させることが目的であり、その意図は12部族のどの部族にも属さず不公平感を抱かせないことにありました。それはまた、明らかに好立地であるエルサレムを獲得するという動機に基づいていました。

ストーリーの成立にとって目的、意図、動機はどれも重要です。これらの3つは、個人の「もの見方」に関係するだけでなく、社会のレベルに浸透している「世界観」と深い関わりがあります。ストーリーとは実のところ心理学である、などと言いたいわけではありません。カウンセリングの現場ではこの3つはほとんど並行的に進められていますが、歴史上偶然残された資料を通じてしか知ることのできない人々や出来事に関しては、関係者の心理分析をするわけにはいきません。歴史家は歴史家として、出来事のストーリー性をよく理解し、目的、意図、動機の3つを的確に考察する必要があります。フロイトやユングを持ち出してはいけません。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

N・T・ライトの神学とは

36 中澤啓介

14! ストーリーの意味

キリスト教は、全世界に開わりのある出来事（ストーリー）を提供しています。それは公共的な真理です。ところが皮肉にも、現代社会の多くの人々は、キリスト教とは個人的な世界観であり、一連の個人的なストーリーだと見なしています。しかも、あるクリスチャンは明らかにこの畏に陥っています。土台になるべきキリスト教の公共のストーリー部分はほとんど無視し、個人の部分のストーリーのみを語る傾向が強くなっていきます。これでは本来のストーリーとは言えません。

ストーリーは、問題や葛藤が生じ、それを解決するための様々な手段が試みられ、その結果最終的な結末（良いものであれ悪いものであれ）を迎えるというパターンを持っています。喜劇であれ悲劇であれ、良質のストーリーは、世界が「葛藤と解決の場」であることを想定しています。聞き手（読者）は、ストーリーの世界観を体現し、しばしば自らの世界観を強化し修正しようとしています。

一つのストーリーは、別のストーリーとその世界観を修正するのに大きな威力を発揮することができます。預言者ナタンは譬え話によってバビロンの過ちを指摘しましたが、もし忠告の言葉で戒めたら、ただ怒りを買っただけでしょう。たとえテレビがその忠告を受け入れたとしても、ただ一日の変化を見るだけで、彼の生涯を変えるものとはならなかったでしょう。

第3章「神学プロレゴメナ」について 全世界に関わる公共的な真理

ストーリーの意味は、それを語る人（個人であれグループであれ）から切り離してはあり得ません。しかし、その人自身の中ですべてが完結してしまうものでもありません。むしろ、ストーリーとそれを聴く（読む）人との対話が起これば初めて意味が生じます。一つのストーリーは他のストーリーが重ね合わされることによって、聞き手の信念や世界観を変えることがあります。イエスの十字架のストーリーの意味は、復活のストーリーが加わることによってトマス（マテウ）の生涯を変え、サウロをパウロに変えてしまうほどの衝撃的な出来事をもたらしました。

一つの間違ったストーリーが「違った世界観を持つ聴き手の間では異なる意味を持つ」のは普通のことです。良いサマリヤ人の話は、ユダヤの熱心な律法学者たちと熱烈な国粋主義者であるサマリヤ人とは全く違った意味を受け止めたはずですが、ベルリンの壁の崩壊は、資本主義世界では自分たちの世界観の勝利と受け止められていますが、新マルクス主義者たちは古いマルクス主義理論は覆されたと宣伝しています。歴史家たちは、それぞれの世界観からストーリーを見るものです。

さらに、最初に語られたストーリーも、後半のストーリーの展開次第で意味が全く違ってくる場合があります。AD70年のエルサレム陥落のストーリーは、第四エズラ書の作者にとっては全くなりの大惨事でしたが、ヨセフスにとってはイスラエルの神がローマ人

のどこかに行ってしまった出来事です。マルコの福音書13章の記者は、それを新しいバビロンの崩壊と受け止めた。いずれにしてもストーリーの「意味」は、究極的には公共の場に現れてきます。

人々は、ストーリーを通して、自分が直面した出来事の意味を明らかにしようとしています。ところが、そこで出会う出来事やその意味は多種多様です。全く正反対の見解も、あるストーリーが他のストーリーと衝突することもあります。人はそれぞれ自分のストーリーに忠実であろうとするので、ストーリーの相対化という現象が起こります。ポストモダンの社会において、この現象は顕著なものです。

ところで、ストーリーの交換は起きるのでしょうか。私が観察する対象やある人の行動または出来事（ストーリー）が、自分の世界観に当てはまる場合には、私のストーリーに変換が起こればなりません。その必要が無いからです。ところが、自分の抱いてきた世界観と矛盾する場合には、「根幹となるストーリー（the controlling story）」を捨て、現状をうまく説明できる新しいストーリー（the challenging story）を見つけておかないならなりません。通常このような新しいストーリーは、知覚情報を通じて自分で構築することはできません。どこか他の共同体のストーリーから探し出して、以外にありません。しかも、そのストーリーがすべての関連したデータを明快で単純な枠組みの中に含めるのに成功し、さらに従来のストーリーに取って代わることが一番ふさわしいと確信させるべきのみ、ストーリーの変換は生じます。（本稿は筆者によるライトの主張の要約）

N・T・ライトの神学とは

37 中澤啓介

ライトは、1世紀のユダヤ教を背景にするパウロとイエスに関心を持つ歴史家です。しかし彼は、単なる歴史家にとどまらず、神が聖書を通して神の民に語られたメッセージを現代人に届けたいと願う聖書学者であり、神学者であり、牧会者です。これまで、ライトが「時代思潮」(1章)、「聖書」(2章)、「神学プロレゴメナ」(3章)という問題についてどのように考えているのかを見てきました。

ライトは、現代人がポストモダン的な人間に形成されていくのに大きな影響を与えた人物として、マルクス、フロイト、ニーチェを挙げています。これまでのキリスト教界では、彼らは「反キリスト教の典型的な思想家」と見なされてきました。しかしライトは、彼らの表面的な反キリスト教的言辭にとらわれず、彼らが提唱した主張の「根源的な意図」を積極的に評価します。加えて、自らの聖書学や神学に対し、フランスのソシユールを始祖としフリードマン・バルト、レヴィ・ストロース、ラカンたちが発展させた「構造主義的な思考」を大胆に取り入れます。

むしろ、このような先駆的な方法論を試みた聖書学者や神学者が、プロテスタント主流派の中にはいなかったわけではありません。しかし福音主義者の間では、ほぼ例外なく、彼らの哲学的、思想的、学問的方法論は理解されることなく、拒否反応が示され、伝統的な福音派の聖書学や神学に影響をあたえることはありませんでした。つまりライ

第4章 創造について 聖書は創造と再創造に至る贖いのストーリー

ト流の表現を使えば、「批判的实在論」に立たず、「素朴な实在論」から一歩も抜け出すことはできなかったということです。

ライトはむしろ、「聖書は神からの啓示の書である」と固く信じています。その点では、明白な福音主義者です。しかし、その聖書の本質を、信仰生活のルールブックとか、教理や歴史の教科書あるいは霊的歩みを向上させるデボシヨナルな書物とは見なさず、「神が神の民と関わられたストーリー」と考えます。この点がライト神学の中核であり、ライトらしさが最も如実に現れているところです。そこで私たちは、今後はライトが描く「聖書のストーリー」の全貌を丁寧に追いかけることにしましょう。そのストーリーは、ライトによれば、創造、墮落、イスラエル、イエス、教会の5幕より構成されています。その流れは次のようなものです。

まず神は、この世界を「すべてがよい」という状態で造られました。特に人間は、「神のかたち」に造られ、「王なる祭司」として全被造物の管理を委ねられました(第1幕、創造)。ところが人間は、神の戒めに背いて罪の性質を帯び、死すべき者となってしまいます。その結果人間は、神の特別保護下にあったエデンの園から追放され、神が期待されていた被造物管理の使命を全うできない存在に化してしまいました(第2幕、墮落)。そこで神は、アブラハムを選び、その子孫を「神の民イスラエル」として訓練し、育て

られます。ところがそのイスラエルもまた、神の期待に応えることができず、捕囚という神の裁きを受けることになってしまいます(第3幕、イスラエル)。そのような神の民に対し、神はイエスを「真のイスラエル」としてこの世界に派遣されます。イエスは「神の国」を明らかにし、十字架上で死なれ、三日目によみがえり、全人類の贖いの業を完成しました(第4幕、イエス)。神は、そのイエスを「主」と受け入れた人々に「聖霊」を注がれ、教会を生み出されました。その教会は、やがてくる「神の国」の先取りとして、全被造物の完成のために労するものとなりました(第5幕、教会)。

以上が、ライトの説く「聖書全体のストーリー」です。といっても、何か特別新しいものが主張されているわけではなく、何が分かるでしょう。聖書を「ストーリー」としてとらえ、「創造と再創造に至る贖い」をメインテーマに据えたところが、目新しいといえは自新しいかもしれません。あるいは、20世紀のプロテスタントの神学がバルトの「キリスト中心主義」をめぐって展開されてきた教義学にあったことと比較するならば、福音主義者たちによる聖書神学運動の復興として特筆されるのかも知れません。聖書批評学の行き詰まりを打破する新しい聖書学の勃興とか、旧約聖書と新約聖書とを密接に結びつけた一つの書物として扱った点を評価することもできるでしょう。どのように評価するにしても、まずは、ライトが主張していることに謙虚に耳を傾けるところから出発することが肝要です。彼が現代の欧米の神学者の中で話題の中心人物であることは間違いないのですから。(つづ)

N・T・ライトの神学とは

38 中澤啓介

1. 創世記の創造記述

書物を読む人は、その書物を最初から読み始めるのが普通です。聖書の場合も同じです。聖書の初めには、「世界の創造」が記されています。そこには六日間の創造の業が、まるで美しいスライドショーのように一日ずつ描かれています。それを読む人は、神の雄大な御業に圧倒され、ただただ沈黙して神のみ前にひれ伏す以外にないでしょう。

神による創造のストーリーこそが、神が人に知ってほしいメッセージの「第一幕」です。といつても、読者すべてが創造の記述をそのまま受け止めるわけではありません。人はそれぞれ違った仕方です。聖書を読んでいます。聖書を研究する学問は大きく二つに分けられます。一つは所与のテキストの文脈や表現技法を分析してその構造を探り、テキスト全体が言わんとする趣旨を把握する方法です。もう一つは、所与のテキストが現存の形に至るまでには何段階もの編集のプロセスがあったと考え、その経緯をたどる方法です。前者を「聖書解釈学」、後者を「聖書批評学」と呼びます。聖書解釈学は、実際の内容はすいぶん異なりましたが、原始キリスト教の時代から今日まで常に盛んに論じられてきました。ところが聖書批評学は、18世紀の近代合理主義とともて起こった「最近の学問」です。特に創世記という書物は、その批評学の暴風の真ん中にならされてきました。つまり古代中近東の様々の宗教的・文学的な作品と

第4章 創造について 伝承の過程よりストーリーそのものに聴き入る

比較され、現在の聖書本文には、原形だったはずの口頭伝承、初期段階の文書化された資料、現存の形に編集された段階があったと考えたのです。このテキストの前史を訪ねる旅は、テキストを取り巻く宗教史的な背景を探ろうとする「純粋な歴史的関心」に動機づけられたものでした。

ところがその旅は、20世紀初頭のアイヒロットとフォン・ラートの論争が行き詰まるに及んで、崩壊の道をたどります。その結果、テキストの成立過程を探求するより、現存のテキストを全体としてあるがままに捉え、そこからメッセージを引き出すことが重要だと考えるようになりまし。つまり、聖書のテキストは神がこの世界にどのように関わられたのかを明らかにする「神学的ストーリー」とみなされるようになったのです。ここに至って、教会共同体と学術共同体の双方が聖書理解における合意に達した、ということができるとでしょう。

実際、現存するテキストの内容と表現形式から、口伝伝承の段階や断片的な文書段階の資料を抽出する試みは成功したとはいえません。仮にそのような想定される資料が存在していたとしても、それに特別な意味を見いだすことはできません。ヘブル語旧約聖書が七十人訳ギリシャ語聖書に翻訳された紀元前2世紀以降のユダヤ教及びキリスト教の世界では、見事に推敲され完全な芸術作品にまで仕上げられた現存のテキストを神の言葉と受け止めてきました。どのような芸術作品も、

制作過程が問題にされることはほとんどありません。鑑賞者は完成作品をあるがままに眺め、評価するのが普通です。聖書についても、テキスト成立の過程を「ああだ、こうだ」と問うより、現存のテキストの統合性、表現の卓越性、全体の構造や文体論的特徴などに注目し、ストーリーそのものに聴き入る方がはるかに重要なのです。

創造の記述が様々な伝承素材によって構成されていることは間違いないかもしれません。多くの研究者が指摘するように、この物語の中心にはバビロニアのエヌマ・エリシュという名で知られる古代中近東のテキストに近い伝承層があったと思われれます。そのような資料に洗練された神学的な解釈が重ね合わされ、拡張されたことを疑う余地はないのですが、その伝承史的变化の各段階を明らかにすることは今日ではほぼ不可能です。創世記の最終編者は、伝承された素材を新しい文学形式に投入し、その素材をすっかり改変してしまっただけです。

実際、創造の記述は形式と内容が固く融合しており、極めて気品豊かな美しいストーリーに構成されています。したがって、テキストそのものを文体論的に研究し、イスラエル礼拝共同体の内側から解釈する方がはるかに実り豊かなものとなります。主の御ことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって、主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる。全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ(詩篇33・6〜9)。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

39 中澤啓介

2. 神話が科学的な記述か

多くの人々が、創造物語は神話であると考えています。「神話」とは民族や共同体の中で代々語り継がれてきた話ですが、現実には起こったことではなく歴史的には全く無価値と見なされるのが普通です。しかし神話は、自分たちの祖先や世界がいつどのように生じたのかを明らかにしたいという気持ちから生まれた話です。したがって、自分たちの起源や身の回りの世界の秩序をどのように捉えていたのかを知るためには、極めて貴重な歴史的資料です。

それは独特な神話詩的な言語で表現され、そこで語られている出来事の描写は、西欧市民社会を支配してきた推論的思考とは異なるジャンルの文学です。彼らの意識では歴史的事実として起こったこととして伝えようとしたのであり、詩を越える詩の様式、推論を越える推論の様式、儀式的振る舞いを越える儀式文の様式として念入りに仕上げられたものです。だから神話的テキストを文化人類学的な背景や文学的な文脈から切り離し、現代的な教義や哲学的な思考による推論をぶつけて解釈するような愚かなことをしてはいけません。

「神話」に以上のような注釈を加えれば、聖書の創造記述を「神話」と呼んでも差し支えないでしょう。しかし、神話に對しすべての人がこのような深い理解をしているとは限りません。ほとんどの人の認識は、神話とは古代の人々が自分たちや世界の起源と

第4章 創造について 科学に信頼しつつ聖書を矛盾なく受け入れる

秩序を説明するために作り出した「空想的な荒唐無稽なお伽話」という程度です。とすれば、聖書の創造のストーリーには「神話」という言葉を使わない方が賢明でしょう。

聖書が明らかにする世界創造の描写は、現代科学が明らかにする宇宙像（138億年前にビッグバンによって生まれ、今も拡大し続けているという宇宙観）ではありません。むしろ、聖書が書かれた時代の人々の目にこころ自然に映ったそのままの姿が描かれています。それは、イスラエルを取り巻く古代中近東の人々の宇宙観の影響を受けていたでしょうし、天と地と陰府から成る素朴な「三層構造の宇宙観」(例えばリビ・10など)だったでしょう。それゆえ、現代科学が問題にする答えを聖書の中に探そうとするのは愚かなことです。聖書はそのような意図を持って書かれた書物ではないからです。

と云っても、聖書と科学の間には鋭い二項対立があるわけではありません。クリスチヤンは、天文学、物理学、生物学、地球形成学、その他の科学的方法論と成果を信頼しながら、聖書が明らかにしている「神と神の民のストーリー」を矛盾なく受け入れることができます。今や不可知論を標榜する科学者たちと信仰を告白する神学者たちが、異なる形態の知識を支持しながらも実際に出会い、握手し、共に語り合い、共通の関心事を分かちあうことのできる時代になっていきます。

モーセは、出エジプトの際に「私が町を出たら、すぐに

主に向かって手を伸ばさなければなりません。そうすれば雷はあなたを打ち、雪はあなたを降らなくなるでしょう。この地が主のものであることをあなたが知るためです」(出エジプト9・29)とパロに語りかけました。また、「見よ。天と地とすべての天の天、地とそこにあるすべてのものは、あなたの神、主のものである」(申命10・14)と神の民に説きました。それに対してイスラエルは、神が自然界の支配者であることを神との実体験から知り、神への礼拝において「地とそれに満ちているもの、世界とそこに住むものは主のものである」(詩篇24・1)とか、「地の深みは主の御手のうちにあり、山々の頂も主のものである。海は主のもの。主がそれを造られた。陸地も主の御手が造られた」(詩篇95・4、5)など応答しました。

科学的な学問を探索するだけでは、聖書の説く「神による創造の奥義」に到達することはできません。イスラエルの礼拝共同体の内側に入り込んで解釈する努力が大切です。パウロが「地とそれに満ちているものは、主のものだからです」(1コリント10・26)と記すことができたのは、礼拝で告白し続けてきた先の詩篇の言葉を日頃から身につけていたからです。王イエスにあって、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れていると認める人にとっ

ては、それは汚れたものなのです」(ローマ14・14)というパウロの言葉もまた「神は、お造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」(創世1・31)という言葉を反映したものに他なりません。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

40 中澤啓介

3. 現代人の神理解

創世記冒頭の「初めに、神が天と地を創造した」という文章は、神の存在を当然の前提にしてストーリーを始めています。ところが現代のポストモダン社会では「創造者なる神」という唯一の神概念には厳しい疑義がもたれています。唯一神教は批判の対照で、西欧社会の多くの人々にとって躓きであり、人気のない信念の一つになっています。

今の世では、英語の「神」(God)という語は、必ずしも良い意味で使われているわけではありません。感情を込めた感嘆詞的な用法で、「My God!」(おやおや、これは驚いた)というように使われ方もされます。ギリシャ語「セオス」は、どこか優しい人物をイメージさせる詩的な表現です。ヘブル語「エロヒム」は、より神秘的な方を想像させますが、多くの人々にとっては、忸えない危険な存在を意識させます。

「神は怒りの神であるが、イエスは恵み深い方である」と考える人も大勢います。イエスは神の愛を説かれたが、その神とこの世界を支配している神とは一致しないと、2者を対立的に捉えるのは間違いです。そのような思想は、人間にとって悪であるものがこの世界に「われはごめん」であるのは、神がこの世界とは無関係な存在だからだとの考えが背景にあります。ある哲学者は、これらの神々は1人の神の違った側面を表していると考えます。しかし他の人は、神は遠くにおられ、私た

第4章 創造について「唯一神」が敬遠、危険視される時代思潮の中で

ち人間には興味を持っておらず、この世界に介入されることとはないと考えています。

17世紀から18世紀の啓蒙主義者たちは、人の歩みに深く関わる神を階に引き上げ、理神論を主張しました。メソジストのグループは、イエスの死は神の怒りをなだめるものだったことを強調しました。そしてほとんどの人々は、この2つを一つに結びつけ、この神は自分を好いていないし、自分の言うことを聞いてはくれないと思っています。もし神がいなければ、自分はリラックスでき、自由な生涯を築くことができるかと断言してははかりません。

「神」をどのように考えたらよいのか、という問に答えることは簡単ではありません。人類の英知を結集しても答えは出ないでしょう。数年前イギリスで無神論者たちが、「たぶん神はいない。誰にも遠慮しないであなた自身の人生を築きめ」という活動を展開しました。そのとき「たぶん」(probably)という言葉を用いるかどうか議論が生じました。「神はいない」と断言すると、証明できないものを宣伝していると訴えられるだろうと心配し、付け加えるという結論に達しました。まさに、イギリスらしいやり方です。

このキャンペーンでは、神はどのような方であれ、もし神を信じるなら自分を喜ばすことはすべてやめなければならぬという前提で、すべての議論が展開されました。イエスは自分のしたいことにことごとく反対しているとか、クリスチャンたちが話し

ている神は「殺す」ことを喜ぶ(SN神) (the killjoy type God)であり、そんな神はいるはずがないと公言されました。この種の考えは今始まったことではありません。紀元前5世紀の哲学者たちは、「この世界は、神の介入なしにそれ自体で動いている」と主張しました。彼らこそ、ポストモダンの思想的ルーツだと言うこともできるでしょう。

作家のキングスレイ・アミスは「私は神を信じない。否、神を憎んでいる」とさえ述べました。彼が語る「神」はどこか天の高いところに座し、専制君主的にすべてを支配している存在で、人間に風変わりな要求を突きつけ、人々がそれを無視すると危険な憤りを示す方です。多くの人にとってそのような神の存在は良いニュースではありません。もし神がそのような方であるなら、存在しないほうがよいでしょう。否、実際のそのような神は存在しません。

彼らの中にはリチャード・ドーキンスのような怒った闘争的な無神論者や、作家のジュリアン・バーネスのようなよりソフトで悩める無神論者もいます。彼らはキリスト教会の講壇から話される説教のあらゆるうちの文章をつぎはぎし、それらを彼らの思考体系に組み込んで自分たち流の異教的な神概念を作り上げ、論争を有利に展開しようとする策します。それは、彼らの意図や意識はともかく、聞く人たちに与えるには無益な論争にしか思えません。このキャンペーンでは「神」が公共の討議事項 (Public agenda) になることを見越して、1、2のクリスチャン団体が資金集めに協力しています。面白い話ですが、とても危険なことでもあります。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

41 中澤啓介

4. 希望をもたらす神

人類は皆、歴史の初めから、自分たちを生み出し、守り育て、困難な時に助けてくれる神々を信じて歩んできました。宗教を持たない民族は基本的にはないと言っても過言ではないでしょう。ところが、人々の考える「神概念」は、聖書が解き明かす「神」とは異なります。この点はとても重要なことです。神概念次第で、その神の民の歩みは大きく変わってくるからです。

聖書の神は、人を「神の私たち」に造り、「王なる祭司」としてこの世界を統治させようとしてきました。そのためにアブラハムとその家族を導き、「イスラエル(神に勝つ者)」（創世32・24〜29）として育てます。その民はエジプトの圧政の下で奴隷の苦悩を味わいますが、神はそこから解放し、カナンの地を備えます。さらに神は王・預言者・祭司を立て訓練しますが、彼らは神の期待に応えることができませぬ。それでも神はあきらめず、再び異邦の民の捕囚民の苦悩を味わわせ、神の召しに応えさせようと励まし続けられます。これが旧約聖書に啓示されている神の姿でした。

神の民は、このように取り扱われる中で、神を理解できず、神がなすべきことを忘れ眠っているのではないかと誤解します。そして、「起きてください。主よ。なや眠っておられるのですか。目を覚ましてください。(イシマ)を拒まないでください(詩篇44・3)と、神に呼びます。それに対し神は、「やがて偉大な解放の日が

来る。それは義と平和が打ち立てられる時だ」とお応えになりました。

神の民は、失望のただ中で神から希望のメッセージを受け取ります。神が希望であることの根拠は二つあります。一つは、神が創造者であるという事実です。彼らは「まこと、国々の民の神々はみな、むなし。しかし主は天を造りになった」(Ⅰ歴代16・26)、「天と地とお造りになったイスラエルの神、主はほむべきかな(Ⅱ歴代2・12)と創造者なる神に期待を表明しました。詩篇の作者も、「主の栄光を国々の中で語りあげよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。まことに、国々の民の神々はみな、むなし。しかし主は天をお造りになった。尊厳と威光は御前にあり、力と光栄は主の聖所にある」(96・3〜6)と創造者なる神を高らかにほめたたえています。

神が世界の創造者であることは、偶像の神々と決定的に違います。イザヤ40章は、「鑄物師は偶像を鑄て造り、金細工人はそれに金をかぶせ、銀の鎖を作る。貧しい者は、奉納物として、朽ちない木を選び、巧みな細工人を捜して、動かない偶像を握える」(19・20節)と、偶像を作る人や祭る人の愚かさを指摘し、「あなたかたは、神をだれになぞらえ、神をどんな似姿に似せようとするのか(18節)と民に語りかけます。万物の創造者なる神もまた、「わたしを、だ

れになぞらえ、だれと比べようとするのか(25節)、「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ(26節)と神の民に語りかけます。まことの神とは全宇宙の「万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる方」(26節)です。人間が考え、作り出した偶像とは本質的に異なる存在なのです。

神が希望であることのもう一つの根拠は、神が未来のことを予告できる方だということです。神は偽りの神々に対し、「後に起ころうとする事を告げよ。先にあつた事は何であつたのかを告げよ。…来たべき事をわたしたちに聞かせよ。後に起ころうとする事を告げよ。そうすれば、われわれは、あなたがたが神であることを知ろう。良いことでも、悪いことでもしてみよ。そうすれば、われわれは共に見て驚こう。…だれか、初めから告げて、われわれにこのことを知るようになせたらうか。だれか、あらかじめ、われわれに『それは正しい』と言つようになせたらうか。告げた者はひとのみならず、聞かせた者もひとのみならず、あなたがたの言つことを聞いた(イザヤ41・22〜26)と宣告します。さらにまた、「わた

しのような神はいない。わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていないう事を昔から告げ、…わたしが語る時、すべてそれを行い、わたしが計ると、すべてそれをする」(46・9〜11)と述べています。

聖書の神は、イスラエルを選ひ、「王なる祭司」として使命を全うさせ、希望の神です。その希望は、万物を造られた創造者、未来を予告できる歴史の支配者であることを根拠にしたものでした。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

伝道・牧会を考える

第4章 創造について 希望の源は万物の創造者、歴史の支配者に

N・T・ライトの神学とは

42 中澤啓介

5. 正しい神概念とは

2013年12月、ネルソン・マンデラが死んだとき、新聞に「白い衣を着た2人のひげを生やした老人のような人物」が彼を迎えたことを示す時事風刺画が掲載されました。その人物が神を示唆していることは明らかでした。このような神の描写は、現代人が持つ「神のイメージの典型的なもの」でしょう。

1世紀のクリスチャンも多くの神々に囲まれて生活していました。ギリシャではゼウス、ポセイドン、アルテミス、ローマ世界ではジュピター、ネプチューン、ダイアナなどの神が祭られていました。クリスチャンたちは、海の神、街の神、健康の神、婚礼の部屋、戦いの神、お金の神、芸術の神、音楽の神など、あらゆる神々に囲まれていたのです。人々は行く先々で神であるいは女神に出会いました。このような神々の世界は聖書のそれとは全く異なります。聖書の物語の主役である神は唯一の神であり、創造者、審判者、愛なるお方です。贖いの御業のために人となりましたが、本来人間とは全く隔離された存在です。

初期クリスチャンの多くはユダヤ人でしたから、旧約聖書が啓示する神をよく知っていました。彼らにとっては、世界の創造者である神を信じることで、自分たちが外国の地で悲惨な捕囚状態にあること(当時のユダヤ人はローマ皇帝の支配下にあった)とは矛盾することでした。むしろそのような矛盾は、イスラエ

第4章 創造について 神は人が論じることのできる客体ではない

ルが神に対して反逆し続けた結果生じたことを知っていました。カール・マルクスは、「世界を理解することが問題なのではない。世界を変えることこそ重要である」と述べていますが、クリスチャンにとっては、神を理解することが問題なのではなく、神を信頼することが大切です。私たちが神をどのような方として描くのかということより、神が私たち人間をどのように考えているかが重要です。

聖書の神は人間との関係において常に主体です。神が論じることのできる客体に貶めてはなりません。私たち人間こそ、神のみ思いの中で客体となるべき存在です。パウロはクリスチャンについて、「神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに」(ガラテヤ4・9)と述べています。彼が福音を語る

とき、自分の知恵には頼らず神の知恵により頼みました。『わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。』知者はどこにいますか。学者はどこにいますか。この世の議論家はどこにいますか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです(1コリント1・19〜21)。

実際コリントのクリスチャンたちは、「この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、

強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選びました(1コリント1・26〜27)と語られている人々でした。パウロにとってクリスチャンになるとは、「天と地と海と

その中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返る(使徒14・15)ことでした。彼は、使徒の働き17章のアレオパゴスの説教で、次のように述べています。「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません」(24節)。「また、何かに不自由なこともあるかのように、人の手によって作られる必要はありません。

神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになられた方(25節)で、「ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とお定めにな」(26節)った方です。しかも、「神は、私たちがひとりひとりから遠く離れてはおられ(27節)ず、私たちが、神の中に生き、動き、また存在して」(28節)います。

クリスチャンの信仰生活にとって、神概念は重要なものはありません。神概念は、その人の歩みに対し、とても大きな影響を与えます。クリスチャンが神の違った側面を知ることが、自分の違った姿に気づくことに通じています。自分の違う姿が見えてくると、他の人もまた違って見えてくるのです。聖書の神は万物の創造者です。そして、終わりの日にはすべての悪を滅ぼし、約束された事柄をこごとく成し遂げるお方です。このような神は、イスラエルの周辺諸国の神々とは全く異なるお方です。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

伝道・牧会を考える

N・T・ライトの 神学とは

43 中澤啓介

6. 卓越した表現技法

神による創造の出来事は、古代中近東の文化的な背景の中で啓示されました。表現形式には様々な工夫が施され、今日見ても美しさに圧倒されてしまう描写が続きます。当時の人々ができる「最高の表現技法」が用いられ、古今東西を問わず「世界最高峰の文学作品」としてそびえ立っています。その最高に工夫されている表現技法の代表的なものを紹介しましょう。

まず、創造の出来事は、「安息日神学」に基づいて記されています。出エジプト記20章には、「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」という十戒の第四戒が記されています(8節)。この安息日の戒めは、「主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれた」ことに基づいています(11節)。しかもこの命令は「六日間仕事をしてもよい。しかし、七日目は、主の聖なる全き休みの安息日である。安息の日に仕事をする者は、だれでも必ず殺されるなければならない」(出エジプト31・15)と、大変厳しいものでした。さらに「記33章3節は「六日間仕事をしてもよい。しかし七日目は全き休みの安息、聖なる会合の日である。あなたがたは、いっさいの仕事をしてはならぬ。この日はあなたがたがどこに住んでいても主の安息日である」と述べています。七日目は「主の安息日」であり、「主の聖なる全き休みの安息日」なので、イスラエルの民

第4章 創造について 創造ストーリーの崇高さを表す様々な工夫

は単に仕事を休むだけでなく「聖なる会合」を守るように命じられました。イスラエルの民にとって仕事と安息の関係は、神の世界創造のパターンに基づいていました。

次に六日間の創造は、一日目と四日目、二日目と五日目、三日目と六日目とが対応する形で記述されています。まず空間が設定され、その空間を埋めていく形で創造は進められました。日毎の神のわざは、

①神が語りかけたこと、②語られた言葉の化身、③語られた被造物の誕生、④被造物に対する神の是認、⑤神の区別のわざ、⑥神が名づけたこと、

⑦一日の終わりを示す定型句の七段階に分けて記されています。この七つすべてに言及しているのは、一日目だけです。最初に完全なパターンを例示し、その後の日々については、適宜に省きながら繰り返しが行われました。

3番目は、創造のプロセスでは神の語りかけが最も重要視されていることです。それぞれの創造は、「神は仰せられた」という定型句をもって始められました。この定型句は、

一日目、二日目、四日目、五日目はそれぞれ一回、三日目は二回、六日目は四回と、合計10回登場します。10は「ひとめぐる」を意味し、「十分性」を表します。すべての創造は、完全に「神のことは」の支配下でなされたことを強調しています。この神の語りかけには、神の崇高な希望、希望を現実化する遠大な計画、計画を執行する強い意思、意思を100パーセント成就する力など、神が創造に注がれた全能

力が含まれています。ヘブル人への手紙11章3節は「信仰によって、私たちは、この世界が神のことは造られたことを悟り」と述べています。クリスチャンが「神のことは」による世界の創造を受け入れることができるのは、信仰によってなのです。

4番目に、「7」という数字が巧みに使われていることです。例えば神が創造にあたって語りがけた言葉は7回(創世記1・4、7、12、16、21、25、27)でした。その結果を表す「そのようになつた」という表現も7回繰り返されています(3、7、9、11、15、24、30節)。創造の段階が終わるたびに表された神の満足感も、7回の「よしとされた」という言葉に示されています(4、10、12、18、21、25、31節)。地(エレツ)、「21、25、31節」。天(シヤマイム)を表す表現も21回(「大空」を含む)、「神」(ロヒーム)は35回出てきます。いずれも7の倍数です。

この7という数字は、ヘブル語聖書で使われる文字数にまで反映されています。1章1節は7語で構成されています。2節は14語なので、序論部分(1・1〜2)の合計は21語(7×3)になります。それに対し結論部分(2・1〜3)は35語(7×5)。1章1節から2章3節までは全部で49語(7×7)です。

このような工夫された「表現技法」は、他にもたくさん指摘できます。しかし、創世記1章の「創造のストーリー」の崇高さを確認するには、これくらいで十分でしょう。これらの優れた美しい表現技法は、神の啓示の証拠とはいえませんが、神の啓示の痕跡を残しているとはいえるでしょう。(本稿は筆者によるライ

トの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

44 中澤啓介

7. 創造以前の状況

聖書の冒頭は、「初めに、神が天と地を創造した(1節)」という崇高で荘厳な言明で始まります。これは創造の記録全体(1・1〜2・3)の表題です。ところが、この句は表題ではなく、「初めに神が天と地を創造したとき」と従属節に訳すべきだと主張する人々がいます。中世のラシ・イツハクの子、ラビ・シエロモ(以来の解釈で、今日でも信奉者は後を絶ちません。もしそう理解するならば、創世記1章1〜2節は3節以降の一目目の創造に含まれることになり得ます。しかし創世記には「トレドート」(由来)という言葉が11か所あり、11のストーリーを構成していますので、1節を表題とすれば全体で12のストーリーになり落ち着きがよくなります。七十人訳ギリシャ語聖書も独立文として訳していますし、今日ほとんどの学者は、従属節ではなく独立文と解釈しています。すると、表題に続く2節の「地は混沌として何もなかった。やみが大水の上にあがり、神の霊が水の上を動いていた」という描写は、一目目の「光(3節)の創造以前の状況を述べていることになりました。」(註)として何もなかった」とは、闇や水がそうであるように、定まった形のない、無秩序・無目的な状態を指しています。とすれば、この創造記事は「無から有への創造」ではなく、「既に存在しているものがある目的に向かって整えられていく過程」(ジョン・

第4章 創造について 古代中近東の枠組みの中で示された創造の啓示

ウォルトンの見解)を描いたものとなります。

預言者イサヤは、神は「天を創造した方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、すなわちこれを堅く立てた方、これを混沌としたものに創造せず、人の住みかこれを形造った方(45・18)である」と述べています。イサヤは、創世記1章2節の「混沌」に言及し、続く3節から31節までの創造を「人の住みか」にこれを形造った」とまとめました。つまり創世記1章は、世界創造以前に存在した「混沌とした地(2節)を、神が六日間かけて「人間の住むことができるすばらしい世界」に整えられたことを明らかにしているのです。

預言者エレミヤもまた、「私が地を見ると、見よ、混沌として何もなく、天を見ると、その光はなかった(エレミヤ4・23)と語っています。この「混沌として何もなく」という表現は創世記1章2節の「トーフー、ボーフー」と同じ語なので、神の裁きとは創造以前の混沌とした状態に帰させることだということになります。ヨナは、「水は、私のおどを絞めつけ、深淵は私を取り囲み、海草は私の頭からみつきました(ヨナ2・5)」と、神に背いた結果受けた自らの苦悩を創造以前の「やみ(創世1・2)に結びつけています(深淵)と「やみ」とは同じ言葉です。

このような創造以前の情景描写は、シュメール、バビロニア、エジプトなどの古代中近東に見られる「創造観」とよく似ています。それらの文

献においては、この世界は初めから存在しており、そこにたくさんのお神々が誕生します。そしてその神々は、既に存在していた世界のどの領域を支配するかをめぐって争い、最終的に勝利した神が他の神々に担当場所を分配するというストーリーになっています。中でも天候を支配する神は重要な存在で、人々は天候に関することは必ずその神に祈らねばなりません。もし違つ神に祈るならば、神々からひどい怒りを買ってしまうと信じられていました。

イスラエルは神の民です。彼らは時代を超越した無色透明の神の民だったわけではありません。イスラエルは古代中近東の宗教あるいは文化的状況の中で、真の神「ヤハウエ」の世界創造の記録を啓示されました。彼らはもともと古代中近東の思考の枠組み、言語表現、世界観、宗教観、創造観の中で生きていたので、現代に生きる私たちは、幼い頃から物理学や天文学、生物学や地学などの知識に囲まれて育ちました。従って科学的・歴史的な関心から創世記1章を読むとするのはごく自然なことです。しかし、創世記1章の著者や最初の読者たちは全く違います。彼らにとっては、今年も適度に太陽が照り、雨が降り、農作物が豊かに実り、放牧している家畜がよく育つことが最大の関心事であり祈りでした。そのような状況にあった神の民が世界創造の啓示を受けた事実を踏まえ、創世記1章の創造ストーリーをきちんと解釈しなければなりません。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

45 中澤啓介

8. 最初の五日間の創造

「創造のストーリー」(創世1・11〜2・3)は、六日間で世界のすべてのものが造られ神は七日目に休まれたことを伝えています。イスラエルの民は、エジプトを脱出した直後に安息日の戒めを与えられ(出エジプト20・11、31・15〜17)、その「安息日神学」に基づき、世界創造のストーリーは描写されています。

六日間の「創造ストーリー」は、前半部(3〜13節)と後半部(14〜31節)に分けられます。前半は最初の3日間の創造で、「光と闇の分離」、「上の水と下の水の分離」、「地と海の分離」の3つに「植物」が加わります。後半は続く3日間で、「天体」「魚と鳥」「野の獣」の3つに「人間」が加えられます。前半後半とも天(6〜9節と14〜19節)から水(9〜10節と20〜31節)へ、水から大地(11〜13節と24〜25節)へという流れが繰り返され、クライマックスは大地に置かれています。つまり、前半は地とそこに生える植物のストーリーで「大地の豊穡」が、後半は地の生き物と人間のストーリーで「人間の多産と地の支配」が強調されています。日を追ってもう少し詳しく追ってみましょう。

一日目(3〜5節)は神が「光があれば」と語られると光が生じました。その結果、「光」が2節の「やみ」の中に輝くようになります。神は光とやみを区別し、「光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられ」ました。その結果「夕」があり、朝が生じます。一

第4章 創造について 人間にとっての世界を描写する創造のストーリー

連のストーリーは「人間が朝を迎えて働き始め夜を迎えて休息する」という日常体験を基に語られています。つまり、人は「朝夜の時間の流れ」の中で生活しており、その「時間」そのものが一日目に造られたということです。

二日目(6〜8節)は上の水と下の水が分けられ、雨をもたらす「大空」と様々な生命が育まれる「地」が出来上がります。雨の少ないパレスチナ地方で農牧業を営んでいたイスラエルの民にとって、降雨量は死活問題でした。彼らは「雨を降らせる雲が神の御手の中にある」ことを繰り返して告白しています(1列王18・45、ヨブ28・26、38・37、詩篇135・7、イザヤ5・6、エレミヤ10・13、51・16など)。二日目の創造は、人の生存を左右する天候に関わりがあるストーリーです。

三日目(9〜13節)には二日目の「大空の下の水」が、一か所に集められ地球上に「陸」と「海」とが出来上がります。神は「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせ」ました。「種がある実を結ぶ果樹」とは、人間が食物にする果実を指します。まず時間(一日目)、天候(二日目)が造られ、三日目になって食物が備えられたのです。「種類にしたがって」とは、ブドウの木にはブドウの実がなり、オリーブの木にはオリーブの実がなるという意味です。それぞれの生命は、神が定められた秩序のもとで継承されていることが示唆されています。

四日目(14〜19節)には「二つの大きな光る物が造られ、「大きいほうの光る物」が昼を、「小さいほうの光る物」が夜をつかさどることになりました。この記述が一日目の「時間の創造」に対応しており、昼間輝く「太陽と夜光る月」を指していることは明らかです。古代中近東の文化圏では、太陽や月は人間の生存を左右する神々と信じられていましたが、聖書のストーリーでは、これらの天体が「しるし」のため、季節のため、日のため、年のため(14節)に存在していることが強調されています。「しるし」とは「時の移り変わりのしるし」です。「季節」とは「種まきや収穫の季節」を指します。「日のため、年のため」とは「毎年定期的に催される祭り」と関わりがあります。太陽は地上に光を届けて収穫をもたらし、月は夜の休みを備えます。なお、この太陽と月に続き、また星を造られた」と、星がおまけのように付け足されています。古代中近東の文化圏では、「星」は人間の運命を左右する存在であり、先頭に置かれるのが普通でした(星座占いは紀元前4千年以上前から盛ん)。この創造のストーリーは、太陽や月だけでなく、星もまた恐れる必要がないことを語っています。このような記述は、古代中近東の人々にとっては驚愕的なメッセージとして響いたことでしょう。

五日目(20〜23節)に神は、「水には生き物が群がれ、鳥が地の上、天の大空を飛べ」(20節)と命じました。海の魚や空の鳥は人間の食物です。これらの生き物もまた、人間が生きていく上での喜びや楽しみを味わえる存在であり、人間のために造られたことが分かります。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

46 中澤啓介

9. 神のかたちとは

創造ストーリーの五目目までを概観したうえで、創造の最後の六目目(24~31節)を見てみましょう。六目目はまず、「家畜や、はうもの、野の獣」の創造から始まります(24、25節)。すべての被造物は神の創造の秩序の中でそれぞれに固有の位置を割り当てられ、与えられた役割を果たすことが求められました。これらの動物もまた例外ではなく、人間の支配下であって共存しつつ、被造世界の豊かさを現し、創造者の栄光を表すために造られました。

そして最後に、被造世界の主役である「人間」が創造されます。人間は他の被造物とは異なる特別な存在として「神のかたち」に似せて造られ、「地を支配せよ」と命じられました(26~28節)。ユダヤ教の文献では、「地を支配する」は、出エジプトを経験したイスラエルが先住民を打ち破ってカナンを征服したことに関係づけられて解釈されてきました。人間(マダム)は、神が意図された真の人間性を持つ神の民イスラエルの典型と見なされていたのです。

「神のかたち」という句は、動物物が「種類に従って」造られたことに對比されています。人間は生物学的観点から見れば「homo sapiens(賢い人)」に分類されます。しかし創造のストーリーは、人間を他の動物物の延長線上に捉えるのではなく、神との関係において見るように励ましています。人間は、生物の進化の過程を基にして捉えられるのではなく、神との契約や

第4章 創造について 人間は神のよき意思を地に実現するエイジェント

神から与えられた使命との関係から「homo divinis(神の人)」とも呼ばれるのがふさわしいでしょう。

「神のかたち」に付随している前置詞「へ(英語で)」は、人間の機能について言及しています。従来のキリスト神学では、「神のかたち」について、次のような「人間の機能(能力)」が提唱されてきました。

- ①人間に特有な知性、感情、意志などの働き、②神に背くことさえできる自由意志、③自意識や様々な人格(ペルソナ)、④道徳性や倫理性、⑤神と交わることで祈りや礼拝などの宗教的能力や霊性、⑥永遠性をもつ霊、魂不死性、⑦男女の関係などに見られる愛の交流能力や社会性などです。確かにこれらの人間の特性は人間を人間たらしめている特質です。しかしこのような人格的な機能の一部を論じるより、人間が持つ全能力を含めた総合的なものを想定する方が適切でしょう。それは27節の「地を治める」という表現から、全被造物を治める能力のことを指していると言っています。

創造のストーリーにおいて「神のかたち」という表現は人間に対してのみ使われています。動物には用いられていません。人間と動物は同じ六目目に造られ、多くの点で共通点をもっていますが、「神のかたち」を持っているという点では、動物とは全く異なる存在と見なされています。従って「神のかたち」は、人間を動物から区別するときの重要な言葉(キーワード)になります。人間は、この「神のかたち」を持っているので、

神との特別な関係、つまり神との交わり(神への賛美や神への祈り)を持つことができず。また、「神のかたち」には想像力、自由であること、責任と罪の意識、知的探究心、芸術的鑑賞力など、人間が動物から区別される特質も含まれています。人間は、この地に対して、神のよき意思と平和な支配を実現するエイジェントとしての役目を果たすようにと命じられました。

古代中近東文献学者のホイートン(Whiston)や、ウォルトン(Walton)は、北メソポタミア(上シリア)地方に出土した紀元前9世紀頃の「テル・ファクハリエ」という碑文について詳細な報告をしています。そこには、創世記1章26節の「神のかたち」という句に使われている「かたち」(ツアラム)と、「似せて」(ダムト)の2つの言葉が並列的に出てきます。両語とも神々の代理者として「地上を治める王の彫像」を表す意味で、交換可能な言葉として使われています。しかもこの2つの言葉は、古代中近東のすべての文獻において「王」や「支配者」に対してのみ使われ、普通の人間に使われることはありません。

つまり、「神のかたち」という語句は、人間が全被造物を王として支配することを示唆しているのです。

この事実は、聖書から神のメッセージを聴きたいと思っ

て、見逃してはならないことです。なぜなら、聖書全体が展開しているストーリーは、人間が「王なる祭司(Royal Priest)」として全被造物を治めることをめぐって繰り広げられる物語だからです(Iペテロ2・9、黙示1・6、5・10など参照)。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

47 中澤啓介

10. 地を支配せよとは

人間と動物が同じ日に創造されたように記されているのは、両者が特別な関係にあることを示唆しています。とはいえ人間は「神のかたち」に似せて造られ、「他の動物をも含めた」地を支配することが託され、特別な祝福を与えられました。動物は大地に束縛される存在ですが、人間は自然の秩序に完全に拘束されることなく、創造者と対話しながら使命を遂行する存在として造られました。神は、この世界を人間とともに統治することを望まれたのです。まことに驚くべきことでした。

人間による「地の支配」の使命は、「原初史」(創世記1章から11章)の中で捉えるのがよいのか、それともフォン・ラートが提唱するように「創世記からヨシユア記までを含めた6書の救済史」の中で理解するのがよいのか。あるいは中間時代のユダヤ人の文献は、世界はイスラエルの民のために創造され、イスラエルこそ神が意図された真の人間であると解釈しているのか、そのように旧約聖書全体の中で解釈するのがよいのか。

近代の聖書学は、聖書を細かく分析し、その狭い資料の範囲内で解釈する傾向があります。しかしキリスト教会では、その初めから今日に至るまで、現に今私たちが手にしている旧約聖書全体から神のメッセージを読み取るという伝統を継承しています。この伝統こそ、神が人類に語りうとされた「神の贖いの物語」を最も包括的に理解し得る手

第4章 創造について 自然の気ままな搾取でなく、よき管理者が真意

法です。クリスチャンは、その物語が様々な段階において語ろうとしている意味を大切にしますが、そこに留まらず、聖書全体を射程に置いて理解することを最終目標としなければなりません。

人間は何もない世界にポツンと造られたわけではありませんが、人間が分かち合いの経験をするため、神はこの世界を創造されました。人間以外の動物、人間の仲間、そして神ご自身との分かち合いです。「地を支配せよ」という命令を、被造物を勝手気ままに利用することが許されている、と考える人たちがいます。しかし、それは間違いです。

近代の経済システムが中世の社会に取って代わった時、西欧のキリスト教はそのシステムに乗って発展する道をたどりました。その結果キリスト教は、自然を消費の対象とし、産業の手段とする道をよしとしてしまいました。それは結局、利潤追求の技術や生活を追従する歩みとなり、自然のよき管理者になるより自然の破壊者になってしまつという側面をもっていたことを否定できません。この問題を鋭く指摘したのが、リン・ホワイトでした。彼の批判は全面的にあたっているわけではありませんが、ある種の条件付きで認めねばなりません。

自然に対し素朴でロマンチックな見方をする人は大勢います。しかし、人間がこの世界の管理を委ねられていることを自覚し、その使命に真剣に取り組んでいる人はほとんどいません。むしろ、啓蒙主義以降の知的な成果が生み出

した「近代以降の資本主義」は、自由気ままな経済活動を助長し、現代の生態学的問題をもたらしました。人間は、自然を搾取し破壊する無制限な力の行使を許されているわけではありません。「支配せよ」とは「最もよい状態に管理せよ」という意味であり、人間は細心の注意を求められました。動物と人間とは相互依存の関係にあるかのように六日目に造られ、共に草と果樹を食物にすることが許されました(創世1・29~30)。

両者とも、ノアの洪水後は、青草だけでなく「すべてのもの」(9・3)を食することが許されました。その時でさえ、創造時と同じように、人間と動物は共に神の聖性に「あずかっています」(4~5節)。

イスラエル法のあるものは、自然を不注意に傷つけ損なうことを厳しく制限しています。例えば母鳥を獲ること(申命22・6)、脱穀している牛にくつこをかけてはならないこと(申命25・4)などです。また、「長い間、町を包囲して、これを攻め取ろうとするとき、斧をふるって、その木を切り倒してはならない。その木から取って食べるのはよいが、切り倒してはならない。まさか野の木が包囲から逃げ出す人間でもあるまい。ただ、実を結ばないとわかってはいる木だけは、切り倒してもよい。それを切り倒して、あなたと戦っている町が陥落するまでその町に対して、それどりのでを築いてもよい」(申命20・19~20)という戒めもあります。現代の政治家や経済人、軍事家たちがこのような戒めを注意深く守り続けてきたなら、私たちが直面しているエコロジーのような問題を避けることができただでしょう。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの 神学とは

4 中澤啓介

11 良しとされた自然

古代の占星術祭儀では、諸々の天体は人間生活を支配する存在でした。ところが創世記1章の創造の物語では、天体は昼夜を分け、季節を生じさせる「神のしもべ」に過ぎません。自然の創造は、安息日を頂点とする神礼拝に参与する形態で描かれています。諸々の天は、声は聞こえなくても、創造者に向かってその栄光をほめたたえている存在です(詩篇19・1〜4)。

ところが現代の私たちは、自然は死んだものと考えています。人間と共に神をほめたたえる活力に満ちた存在として造られたことを忘れていきます。神の創造のわざが人間の創造をもつてすべて終わったとき、神は被造物のすべてを「驚になり」「それは非常に良かった」(創世1・31)と満足を表明されました。これは、すべてのものは神をほめたたえる存在であることが確認されたことを暗示しています。創造された世界のすべてについて神が「非常に良かった」と言われたのは、どのような意味でしょうか。それは、画家が自分の描いた絵を満足して眺め、思わず感嘆の言葉をあげたというふうなものではないでしょうか。被造物のすべてが神の意図「おの」に完成し、その一つ一つは目的とおの機能を果たしていることを確認されたということです。時に人間には、創造に欠陥部分があるかのように見えることがあります。その場合でも、問題は自然あるいは宇宙環境の中にあるわけではありませ

第4章 創造について 自然は人間とともに神をほめたたえる存在

ん。神は、神の創造の御業を全面的に承認されたのですから。ただし、人間の墮落の結果、この世界が人間にとって不都合な状況を呈することが多々あります。そのことを取り上げ「欠陥」と見なす人がいますが、実際はそうではなく、神の戒めをさえ破ることのできる最高の傑作物(人間)がもたらしたものであることを知らねばなりません。

神は人間を造る以前に、人間の活動する場所として自然界を創造されました。それは、人類史以前の出来事として語られている被造世界は「神の贖いのストーリー」の舞台であることを意味します。といっても、この「贖いのストーリー」の中に、人間と自然、自然と歴史、精神と物質、宇宙的なものと実存的なものといった、西欧の伝統に由来する「哲学的な視点や関心」を持ち込んで読んではいけません。聖書は、自然を「ニュートンの世界観における機会的な作用の領域」と見なしていません。それは人間とともに創造者をほめたたえている存在です。自然は、創造者のために直接依存しながら、人間と共に感でける領域内にあり、機会的に単純に応答するといふより、ダイナミックに神に対して活動しています。

この世界の創造自体も「よきおとすれ」です。私たちは、この世界を見渡すとき、造られたもののすばらしさに圧倒されます。自然環境の不思議さに心躍らない人はいないでしょう。昔の賛美歌に「これは父の世界である」という歌詞で始まる歌があります。広

大な宇宙の広がり、太陽が沈んでいく夕焼けの美しさ、神秘に満ちた星の美しい光、山の雄大さや小さな花や昆虫の完全さや美しさ、これらはすべて創造者の作品です。詩篇の作者は創造の御業を見て、「わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません(40・5)と神をほめたたえています。また、「私は、主のみわざを思い起こそう。まことに、昔からのあなたの奇しいわざを思い起こそう。私は、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを、静かに考えよう(77・11、12)と述べています(86・10等参照)。

さらに聖書の創造ストーリーは、全被造物の中で特に人類の尊厳と優越性を強調しています(詩篇45・4、5、110・3等)。人間は、神の代理者として被造物を支配しています。詩篇8篇は、王の戴冠式をイメージさせるかのように「栄光と誉の冠」が人間に与えられ(5節)、被造物のすべてが戦利品のように人間の足下に置かれていることを述べています(6節)。しかしもう一方では、創造者と被造物の間には歴然たる境界線が引かれ(33・38、2・7等)、人間は被造物の一部にすぎないことが強調されています。人間とその他の被造世界の2つは、神の創造の秩序に完全に依拠しています。現代の科学的な世界観だけで両者を見るのではなく、神と人間と被造世界の間には繰り広げられている「神の贖いのドラマ」から創造のストーリーを読み取っていくことが大切です。(本稿は筆者に下すライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

49 中澤啓介

12. 七日目の安息とは

六日間の創造を終えた神は、七日目には何をしたのでしょうか。「神は第七日目」にならっていたわざの完成を告げられた。すなわち第七目にならっていたすべてのわざを休まれた。神は第七目を祝福し、この日を聖であると言われた(創世2・2,3)と言われています。神は七日目(3)のわざをします。まず「ならっていたわざの完成を告げられた」(2節前半)。(わざ)(ヌラカー)という言葉は、普通の労働者の働きに対して使われる「アボタ」ではなく、特殊な技能をもつ熟練工が全神経を傾けて最高の作品を作り上げたときに使われます。それに続く「完成(カーラー)」も、作品がこれ以上手の入れようのないほど完全に仕上がっていることを示唆しています。神は七日目に、この世界が神による完成品であることを全被造物に宣言されたのです。

二番目に、神は「七日目を祝福し、この日を聖である」(3節)と宣言しました。神は六日目には人と動物を祝福しましたが(創世1・22,28)、七日目には「日」を祝福しています。「日」が祝福されるのは、他ではこの記述の基にならっている出エジプト記20章11節のみです。この「日の祝福」は「聖とする」と結びつけられています。「聖とする(カドーシユ)」の語源は「切断する」で、聖書にのみ出ている特異な表現です(出エジプト28・38,29・1,27など)。それは、神以外のすべてのものから切

第4章 創造について「安息」は休息ではなく 神の祝福があふれた日

り離され、神にのみ属することを強調した言葉です。七日目は神が主体となる日であり、神の祝福があふれた日になります。

そして三番目は、神は「ならっていたすべてのわざを休まれた」(3節後半)。これを、神は六日間の創造のわざを終えて疲れたので七日目は何もせず(ゆくり)休息した、と理解してははいけません。それでは、七日目に「被造世界の完成を告げたこと」と「日を祝福して聖別したこと」との関連性が出てきません。3節後半に再び「それは、その日」にならっていたすべてのわざを休まれたからである」と繰り返されている意味もなくなってしまう。

「休息(シャバット)」というハブル語は、旧約聖書に27回出てきますが、そのほとんどは「休息する」とか「休息する」という意味です。しかし、人間であれば仕事をすると疲れ、休みを必要としますが、神はそのような方ではありません。「イスラエルを守る方は、まぢろむこともなく、眠ることのない」(詩篇121・4)方です。「シャバット」には、「やむ」(ヨシユア5・12)とか「やめる」(ヨブ32・1)という意味もあります。実は、出エジプト記20章11節の「七日目に休まれた」という文章も「やめた」あるいは「終わった」と理解するとすんなり意味が通じます。出エジプト記31章17節は、「主が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれた」と述べています。そこでは「休む(シャバット)」と「いこわれた(イ

ナファッシュ)」の2つが相互補完的に使われています。「いこ」は「いこ」(イナ)と訳されている「イナファッシュ」は「安全、保護、強固な状態の中で心を安んじている状態」を指します。すると、「神が休まれた」は「神は創造の働きをやめ、平静で安全に保護された状態の中で、全被造物を支配している状態を語っていることになり(ジョン・ウォルトン)。

神はダビデに「わたしはあなたをすべての敵から守って、安息を与える」と約束しました(IIサムエル7・11)。その「安息」とは「休息」ではなく「敵から守られる」とでした。この個所の「安息(ヌヌーアッハ)」の語源は、先の出エジプト記31章17節の「(イナ)イナファッシュ」(イナ)と同じです。つまり、安息日の「いこ」は、ダビデに約束された「安息」に通じています。ソロモンもまた、「主は、周囲の者から守って、私に安息を与えてくださったので、敵対する者もなく、わざわいを起す者もありません」(I列王5・4)と告白しています。ダビデにとってもソロモンにとっても、「安息」とは戦いの無い平和で繁栄を享受した状態において国を統治することでした(申命12・10、I歴代22・9、22・18、II歴代14・6、15・15、20・30)。「安息を許された」(ヨシユア21・44,22・4)という表現も、イスラエルの民がカナンの地の先住民を滅ぼし、平和で繁栄した国家を形成することを意味していました。とするなら、神は七日目に休まれたのではなく、六日間で造られた全被造物を平和で繁栄の中で「円滑」に活動できるように支配し続けておられるという意味であることは明らかです。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

50 中澤啓介

13. 七日目はいつまで？

創世記2章1〜3節には、「夕があり、朝があった。第七日」という二日を締めくくる定型句が出てきません。七日目が終わったとは宣言されていないわけですが、紀元前二世紀のユダヤ人哲学者アリストプロスはこの点に注目し、「七日目は未だ終わっていない。現在までずっと続いている」と解説しています。今日の聖書研究者たちの中にも、このような解釈に賛成する人たちはたくさんいます。

「イスラエル人はこの安息を守り、永遠の契約として、代々にわたり、この安息を守らなければならない。これは永遠に、わたしとイスラエル人との間のしるしである。それは主が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれたからである(出エジプト31:16〜17)という言葉は、安息日が永遠の契約である理由は、神が六日働いて七日目に休まれたことにある」と述べています。この言明は、「神は六日働いて七日目に休み」という行動パターンを永遠に繰り返してはいる、という意味でしょうか？

もしそうだとすれば、この宇宙のほかにも別の宇宙がたくさん存在しないと辻褃が合わなくなります。そして、なぜ神は六日間ですべての創造のわざを成し遂げ七日目は休まれた、その七日目の休みは今日に至るまで永遠に続いているので、安息日の契約も永遠に守らなければならない、と解釈する方が自然です。つまり、神が休んでいる七日目は、

創造のわざが終わってから今日まで続いているのです。

聖書全体も、この解釈を支持しています。旧約聖書は、神がエルサレム神殿を通して全世界を治めていたことを繰り返して述べています。詩篇47篇は、「まことに神は全地の王。巧みな歌をほめ歌を歌え。神は国々を統べ治めておられる。神はその聖なる王座に着いておられる」(7、8節)と歌っています。この歌の「神は全地の王」と「神は国々を統べ治めておられる」とは並行句で、「聖なる王座」とはエルサレムの神殿のことです。つまり、神は神殿から全地を治めている方です。

詩篇132篇もまた、「これはどこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。わたしは豊かにシオンの食物を祝福し、…そこにわたしはダビデのために、一つの角を生えさせよう。わたしは、わたしに油そがれた者のために、一つのともしびを備えている。わたしは彼の敵に恥を着せる。しかし、彼の上には彼の冠が光り輝くであろう」(14〜18節)と述べています。

ここでは、シオンの丘に建てられた「神殿」が「神の安息の場所」と言い換えられ、神がそこからダビデを通してイスラエルの民を統治していることが明らかとされています。

さらに、ヘブル人への手紙3、4章に展開されている「神の安息」に関する論議を検証してみましょ。著者はまず3章で、クリスチャンに対し「心を頑なに立て、神の安息に入れないようなことが起

らないように」と警告します(6〜15節)。このように「神の安息」とは、出エジプト時代のイスラエルの民に提供された「カナンの地」のことです。ところが、イスラエルの民はエジプトの荒野で不従順だったため、実際にはカナンの地における「神の安息」を味わうことができませんでした(16〜19節)。

続く4章では、この「神の安息」は、出エジプト後のカナンの地の約束に限定されていたわけではないことを明らかにします。もし限定されていたのであれば、ダビデ王が同時代のイスラエルの民に詩篇95篇7、8節のような警告をわざわざ語る必要はなかったはずですが、ヘブル4章3、4節の「みわざは創世の初めから、もう終わっているのです。というのは、神は七日目について、ある個所で、『そして、神は、すべてのみわざを終えて七日目に休まれた』と言われました」という言葉は、創世記2章の「七日目に神が休まれた」という記述が出エジプト時代やダビデ時代に留まらず、クリスチャンに対する「神の安息」への招きを含んでいることを明らかにしています(9〜11節)。

多くのクリスチャンは、神は六日間の創造を終わると疲れてしまい、七日目は安息に入られたと勘違いしています。七日目は神がすべての被造物を統治している日のことです。贖われたクリスチャンは、「王なる祭司」として復活されたキリストと共に統治するよう招かれています。それは、新しい天と地が創造される時まで続きます。つまり、創世記2章初めの「七日目」は、創造が終わって新創造の時までの期間を述べていると理解するのがよいでしょう。(本稿は筆者にF・T・ライトの主張の要約)

第4章 創造について 神が休まれた7日目は今日まで続いている

N・T・ライトの神学とは

51 中澤啓介

14. 世界は神の神殿

七日月は、神が休まれた日ではなく、六日間の創造を終え、完成された被造物との新しい関係に入られた日です。ではこの七日月、神は被造物にどのように関わっているのでしょうか。解き明かすヒントは、イスラエルを取り巻く人々の世界観にあります。

ジョン・ウォルトンによれば、古代中近東の文化圏では、宇宙創造の話は神殿と結び付けられています。例えば、マルドゥク神が創造を終えたと、彼のために神殿が建てられました(「エヌマ・エリシ」5.113-5.121, 24など)。神殿のない宇宙は秩序がないと見なされ、宇宙創造後にエリドゥ神殿が建てられました(前17世紀の「エリドゥ創世記」)。シュメールでは、太陽の昇る所に神殿が建てられ、神殿は宇宙の機能に仕えるもの(または天と地を分けるもの)と考えられました(グデア神殿の建設文書「グデア」B.x.8.11)。「エンチャラ(宇宙の家)」「エテメナンキ(天と地間のプラットフォーム)」など、宇宙を表す名前が神殿に付けられることも一般的でした。エジプトでは水の湧き出る場所が創造の開始地点と見なされ、神殿が建てられました。ある神殿は、床は地球、天井は空、四柱と壁は植物を表すなど、宇宙をモデルに建造されました。神殿を「遍在する神の宇宙支配の場所」と歌う賛美歌もあります(「神殿賛歌」80.1)。そのような神殿では毎年新年祭が祝われ、その年どの神がどの領域を支

第4章 創造について 民の文化圏の思考法を用いて神は御旨を伝えた

配するかを確認する儀式(王の即位式)が行われました。イスラエルの民は、このような文化圏の中で生活していました。それゆえ神は、彼らの思考法、伝承文学形式、宗教的風土などを前提として、ご自身の御旨を啓示する必要があります。そうでない限り、神と民のコミュニケーションは成り立たず、神への信仰は育成されなかつたでしょう。むしろ、神の啓示内容が古代中近東の文化圏の影響を受けたと言いたいわけではありません。イスラエルの民は、彼らと共有する(世界観などの)伝達様式を通して神の啓示を受けたということです。

それゆえ神は、エジプト脱出の時代には「幕屋」を通してイスラエルの民を導き、ソロモン王朝の時代には「神殿」を通してイスラエルの民と全世界を統治していることを啓示されたのです(「列王6・11-14, 8・13, 14」。創世記2章自体の中に、宇宙を神殿に見立てるとか、神が神殿から全被造物を支配していることが述べられているわけではありませんが、創造のストーリーを読んでいる私たちが、古代中近東の人々の宗教的状况を真摯に受け止め、他の聖書箇所参照し合わせて推測しているに過ぎません。

例えば、詩篇132篇は、「よあ、主の住まいに行き、主の足台のもとにひれ伏そう。主よ。立ち上がってください。あなたの安息の場所に、お入りください。あなたと、あなたの御力の箱も(7, 8節)と述べています。この箇所では「主の住まい」(「ミシユフノー」

と「安息の場所」(「ヌアアツ」)は並行句で、「主の住まい」は神殿、「安息の場所」は神が平和のうちに統治している場所を指しています。つまり、神殿こそが神の統治場所です。さらに、「足台」(「ハドーム・ラクライフ」)と「御力の箱」(「アローン・ウゼー」)も平行句で、「足台」は神が統治するために王座に着座する時の踏み台、「御力の箱」は神殿の至聖所に安置された「契約の箱」のことです。つまりこの聖句は、神が神殿の至聖所から神の民を統治していることを述べています。

イサヤ書66章において神は、「天はわたしの王座、地はわたしの足台。わたしのために、あなたがたの建てたる家は、いったいどこにあるのか。わたしのいこの場所は、いったいどこにあるのか。これらすべては、わたしが造ったもの。これらすべてはわたしのものだ(1, 2節)と宣言しています。天はわたしの王座は神が天から統治していることを、「地はわたしの足台」はその統治対象が地(世界)であることを意味しています。「わたしのために、あなたがたの建てたる家」と「わたしのいこの場所」も平行句で、両方とも「神殿のことです。」「いったいどこにあるのか」とは、地上の神殿は神の住居としては小さすぎ、不十分であることを強調しています(「列王8・27, 歴代2・6, 6・18」。これらすべては、わたしが造ったもの。これらすべてはわたしのものだ)は、宇宙が神による被造物であり、神の所有物に過ぎないことを繰り返し強調しています。これらの聖書箇所は、この世界が神の統治場所(神殿)であることを示唆しています。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

15. 詩篇の創造描写

古代イスラエルにおいては、多くの創造伝承が伝えられています。自然を通して神を知り、その創造者をほめたたえることは、信仰にとつて最も基本的なことだったからです。詩篇には、19、33、74、136篇など、創造のすばらしさをほめたたえる歌がたくさんあります。そのすべてを紹介するとはできませんが、創造を歌った詩篇の中で最も有名な104篇を取り上げることにしてしまおう。この詩篇と創世記1章との間には、創造の順序あるいは言葉遣いに多くの類似性が見られます。しかし、相互のテキストの依存関係までは認められません。

詩篇104篇は「わがたましいよ、主をほめたたえよ」(1節)という言葉で始まり、同じ言葉で締めくくられています(35節)。その間に7つの長い連詩が続ぎ、1つ1つの創造のわざが神をほめたたえているものとして描かれています。谷に湧き上がる泉、木々の枝でささざる鳥たち、牧草地で草をはむ家畜、険しい山々に住みつく野山羊、季節を刻む月と太陽、日々仕事にかける人間たち等々、すべての被造物は固有の場所と時間が割り当てられ、驚くべき創造の秩序の中に活動しています。その中心に、「主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょうか。あなたは、それらを見な、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています」(24節)と神をほめたたえる言葉がそびえ立っています。

第4章 創造について すべての被造物が神の創造をほめたたえている

創造とは、神が被造物を存在させた時点の出来事を指すだけではありません。すべての被造物があるべき姿で順調に活動できるようにと、神が支え続けている事実をも含めた大きな概念です。この宇宙はそれ自身の法によって治められている自主的な総体ではなく、創造者の力が停止されれば混沌の世界に戻ってしまふ存在です。彼らはみな、あなたを待ち望んでいます。あなたが時にしたがって食物をお与えになることを。あなたがお与えになると、彼らは集め、あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足りります。あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑い、彼らの息を取り去られると、彼らは死に、おのれのちりに帰ります。あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます(27〜30節)と歌われているとおりです。

詩篇の作者にとつては自然の諸法則こそ堅鉄壁の法ではなく、創造者が真実で信頼に値することを表しているものにすぎません。それゆえ「主の栄光が、どこしえにありましますよ」。主がそのみわざを喜ばれますように(31節)との祈りがささげられています。それは、人や被造物そのものが神をほめたたえるだけでなく、神の自身が創造を喜ばれるようにとの祈りです。

この104篇は、神がソアの水後にすべての被造物と結ばれた契約に基づいて歌われています。神はソアに、「地の続くかぎりの、種時きり刈り入れ、寒さと夏の、夏と冬、昼と夜

とは、さむいとはない」(創世8・22)とか、「すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない」(9・11)と約束されました。このような約束は、自存する自然の法則がもたらすものではなく、神が人間及び生き物と結ばれた契約に基づいたものです。創世記9章には、「わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたつて結ぶ契約」(12節)、「わたしと地との間の契約」(13節)、「わたしとあなたがたとの間、およびすべて肉なる生き物との間の、わたしの契約」(15節)と神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約(16節)、「わたしと、地上のすべての肉なるものとの間に立てた契約」(17節)など、神が被造世界と結ばれた多くの契約について言及されています。宇宙の瞬間瞬間の動きは、創造者の主権的な意思に支配されているのです。

詩篇104篇の中心的な関心事は、被造世界の現象的なものにあります。人類の歴史に見られる特質とか、モーセ伝承に見られる救済史的な問題には一切ふれません。宇宙に現れる天体の秩序、古代社会を保っている法、神からの祝福の媒介を担う王などについても、一言の言及もありません。創世記1章は、人間を独自の存在として造り、被造物に対する管理責任を与え、神の支配を代行する存在として描いています。ところがこの詩篇104篇では、全く異なる人間の姿を描写しています。聖書の創造のストーリーであつても、一様ではないことを心に留めておきましょう。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

N・T・ライトの神学とは

53 中澤啓介

16. 創造と救済の関係

イスラエルと世界の救済の希望は、神は創造者であるという信仰に基づいています。救済は創造があつて成り立つ出来事です。しかし信仰者の認識においては、いつでも創造から救済へと展開していくわけではありません。逆の場合が多いのです。申命記26・5〜10には、イスラエルの信仰告白の最も初期の形が残されています。そこにイスラエルがエジプトから救済されたことが告白されていますが、世界の創造にはふれられていません。救済が創造に先行しています。創造信仰は、救済信仰を経験した後、行きつく真理です。人間が自らの存在に関する歴史的な意味を問う中で、世界の創造者という問題が浮上してきます。

創造は、救済から切り離されたストーリーではありません。創造信仰は救済信仰の基盤ですが、信仰者の認識においては、救済信仰があつて初めて創造信仰に至ります。これはほとんどのクリスチャンにとって経験的な事実です。神が宇宙を創造された時、創造の神祕を証言できる人はいませんでした。それは人間の理解を超えた始まりであり、神からの啓示なくしては誰も近づけない「極秘の出来事」です。ヨブ記で神は「わたしが地の基を定めるとき、あなたはどこにいたのか。あなたは何を悟ることができたら、告げてみよ。あなたは知っているか。だがその大きさを定め、だが測りなわをその上に張ったかを。

第4章 創造について 救いを経験した後、創造者なる神に行きつく

の台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。そのとき、明けの星々が共に喜び叫んだ(38・4〜7)と述べています。詩篇の著者は、神を創造者と呼ぶことは、礼拝においてなされることを明らかにしています。主のことはよびよって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによつて。主は海の水をぎきのように集め、深い水を倉に収められる。全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ(33・6〜9)。

旧約聖書の中でイザヤ書40・55章ほど至高の神を明らかにしている書はありません。ヤハウエは比類なき唯一の神です(45・5)。始めであり、終わりです(48・12)。イザヤは、この神が万物の創造者でありイスラエルの創造者であると強調しています。

まず「神は万物の創造者」。「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもつて、呼ばれる(40・26)。「主は永遠の神、地の果てまで創造された方(40・28)。「わたしは主、わたしがこれを創造した(45・8)。「このわたしが地を造り、その上に人間を創造した。わたしはわたしの手で天を引き延べ、その万象に命じた(45・12)。「まことに、わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を引き延べした(48・13)。

イザヤは、神が地を人の住む場所として整えられた事実を明確に述べています。「天を創造した方、すなわち神、地を造り、これを任上げた方、すなわちこれを堅く立てた方、これを莽漠としたものに創造せず、人の住みかこれを形造った方(45・18)。」と。

次にもう一つ「イスラエルの創造」について明らかにします。神は「あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる(43・1)。「わたしは主、あなたがたの聖なる者、イスラエルの創造者、あなたがたの王(43・15)。「わたしの選んだイスラエルよ。あなたを造り、あなたを母の胎内にいる時から形造つて(44・1、2)。「あなたを贖ひ、あなたを母の胎内にいる時から形造つた方、主はこう仰せられる。わたしは万物を造つた主だ。わたしはひとりて天を張り延べし、ただ、わたしだけで、地を押し広げた(44・24)。「イスラエルの聖なる方、これを形造つた方(45・11)。「天を引き延べ、地の基を定め、あなたを造つた主(51・13)。「天を引き延べ、地の基を定め、『あなたはわたしの民だ』とシオンに言う(51・16)など、万物の創造者が同時にイスラエルの創造者である事実が強調されています。

つまり創造の神の延長線上に救済の神が展開されているわけです。これに対しイスラエルの民は、「知れ、主こそ神。主が、私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である(詩篇100・3)と応答しました。これは新約聖書の「クリスチャンは新しい創造の始まり(IIコリント5・17参照)という教えに関係します。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

17. 新約聖書の創造

神は「創造」に関わる事柄を漸進的に啓示されました。創世記1章は、その始まりに過ぎません。そこから旧約聖書ではユブ記、詩篇、イサヤ書などを中心に、創造の様々の側面が明らかにされます。ここでは新約聖書に飛んで、「創造」に関する新しい側面を7つほど紹介します。

新約聖書はまず、創造者がキリストであったことを明らかにしています。ヨハネの福音書は「すべてのものは、この方(キリスト)によって造られた」(1・3)と記述しています。パウロは「万物は御子にあって造られたからです。…すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ…(コロサイ1・16)と述べ、ヘブル人への手紙はキリストの神性を明らかにした後、「御子によって世界を造られました」(1・2)と宣言しています。

2番目は、キリストは全被造物の創造者であるのみならず、目的者であり、保持者であり、相続者です。パウロは、万物は「御子のために造られた」(コロサイ1・16)と、あるいは万物は「御子にあって成り立つて」(同1・17)いることを強調しています。ヘブル人への手紙1章2、3節もまた、「神は、御子を万物の相続者」であるとか、「御子は…その力あるみことばによって万物を保っている」と述べています。

3番目は、「無から有への創造」を明らかにしています。パウロは、「天にあるもの、地

第4章 創造について 御子により御子のために造られ 新創造へ完成される

にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られた」(コロサイ1・16)と、述べています。ヨハネもまた、「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」(ヨハネ1・3)と、キリストによる創造には万物が含まれ、例外のないことが強調されています。これは、創世記1章が既に存在したものを人の住み家に整えていく様子を描写しているのとかなり違っています(ウォルトンは、古代中近東の文献に基づき、創世記1章の記述は機能を割り当てることに重点が置かれている、と記述しています)。

4番目は、キリストの贖いには「全被造物の贖い」が含まれています。人間の墮落は被造物全体に及びました。パウロは、神が「御子によって万物を、御子のために和解させ」(コロサイ1・20)たと述べています。さらに、「いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められる」(エペソ1・10)とも明言しています。「一つに集められる」とは、一つに統合される、完成されることを意味しています。それは、全被造物の贖い(ローマ8・18〜25)に深く関わっています。

5番目は、復活されたキリストは、神の右の座で万物を支配しておられます。キリストは「天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」(マタイ28・18)と宣言されました。ペテ

ロは、「キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられる」(1ペテロ3・22)と述べます。「神の右の座」とは、神に代わって全被造物を統括していることを意味します(エペソ1・20、21、ヘブル10・12、13など)。

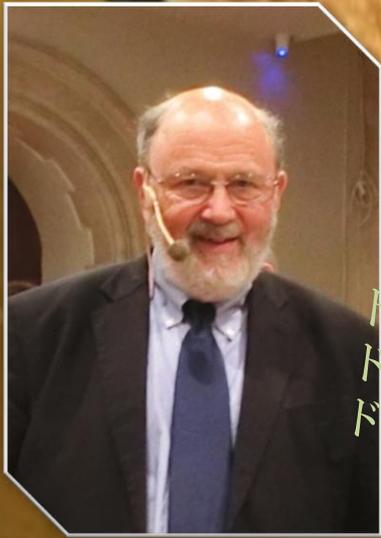
6番目は、キリストは、全被造物の統治権をキリスト者と共有しています。パウロは「神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つからであるキリストを、教会にお与えになりました」(エペソ1・22)と述べています。教会が「キリストのからだ」(エペソ1・23、4・16、5・30、コロサイ1・24)であるとは、教会はキリストの命令を受け、キリストに従い、キリストとともに働くことを意味しています。クリスチャンとは、「神」ご自身の御国と栄光とに召「され」(1テサロニ2・12)、「御国を受け継ぐ者」です(エペソ1・11)。聖霊が与えられているのは、「御国を受け継ぐことの保証」でした(同1・14)。

最後は新しい創造との関係です。ヨハネは、「私は、新しい天と新しい地を見た」(黙示21・1)、「新しい天がこの地に降りてくる」(21・10参照)と述べます。すべてのクリスチャンは、「神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます」(IIペテロ3・13)。クリスチャンは、「新しく造られた者」(IIコリント5・17)です。これは、新しい創造がクリスチャンの救いをもって始まったということです。この地の創造は新しい創造をもって完成されますが、その新しい創造はクリスチャンの誕生から始まっているのです。(本稿は筆者によるライトの主張の要約)

NOT

ライトの神学とは

物語



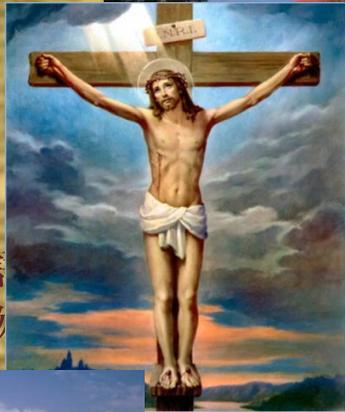
創造



イスラエル



墮落



イエス



教会



神学 神学 神学

神学 神学 神学

物語 物語 物語

物語

物語 物語 物語 物語

ドラマ ドラマ ドラマ

目 次

まえがき

なぜ、ライトの神学を学ばなければならないのか

N・Tライトとは誰か

「創造・新創造」に基づく新しい福音理解を提示1

ポスト・モダン社会に「聖書的な福音」を発信2

ライトの経歴と著作3

N・Tライトの神学とは

第1章 ライトの時代認識9 ~ 15

第2章 聖書について16 ~ 29

第3章 神学プロレゴメナについて30 ~ 44

第4章 創造について45 ~ 54

ライトの神学とは

クリスチャン新聞掲載
(2015年8月～2017年1月)

発行日 2017年2月5日

発 行 恵友書房
神奈川県相模原市南区相模大野6-9-13

著 者 中澤啓介
大野キリスト教会 宣教牧師



N/Tライト博士とともに
オックスフォード大学 ウィクリフホール
夏季研修にて (2016年6月)